



Hewlett Packard
Enterprise

HPE Operations Bridge Reporter

ソフトウェアバージョン:10.00

Windows®オペレーティングシステムとLinuxオペレーティングシステム

設定ガイド

ドキュメントリリース日 :2015年 12月
ソフトウェアリリース日 :2015年 12月

ご注意

保証

Hewlett-Packard Development Company, L.P. 製品、またはサービスの保証は、当該製品、およびサービスに付随する明示的な保証文によってのみ規定されるものとします。ここでの記載で追加保証を意図するものは一切ありません。ここに含まれる技術的、編集上の誤り、または欠如について、HPEはいかなる責任も負いません。

ここに記載する情報は、予告なしに変更されることがあります。

権利の制限

機密性のあるコンピューターソフトウェアです。これらを所有、使用、または複製するには、HPEからの有効な使用許諾が必要です。商用コンピューターソフトウェア、コンピューターソフトウェアに関する文書類、および商用アイテムの技術データは、FAR12.211および12.212の規定に従い、ベンダーの標準商用ライセンスに基づいて米国政府に使用許諾が付与されます。

著作権について

© Copyright 2015 Hewlett Packard Enterprise Development LP

商標

Adobe®は、Adobe Systems Incorporatedの商標です。

Microsoft®およびWindows®は、Microsoft Corporationの米国登録商標です。

UNIX®は、The Open Groupの登録商標です。

ドキュメントの更新情報

このマニュアルの表紙には、以下の識別番号が記載されています。

- ソフトウェアのバージョン番号は、ソフトウェアのバージョンを示します。
- ドキュメントリリース日は、ドキュメントが更新されるたびに更新されます。
- ソフトウェアリリース日は、このバージョンのソフトウェアのリリース期日を表します。

最新の更新のチェック、またはご使用のドキュメントが最新版かどうかのご確認には、次のサイトをご利用ください。

<https://softwaresupport.hp.com>

このサイトを使用するには、HP Passportに登録してサインインする必要があります。HP Passport IDを登録するには、次のURLを参照してください。 <https://hpp12.passport.hp.com/hppcf/createuser.do>

または、HP Passportのログインページの **[the Register]** リンクをクリックします。

適切な製品 サポート サービスをお申し込みいただいたお客様は、更新版または最新版をご入手いただけます。詳細は、HPの営業担当にお問い合わせください。

サポート

次のHP SoftwareサポートオンラインWebサイトをご覧ください。<https://softwaresupport.hp.com>

このサイトでは、HPのお客様窓口のほか、HPソフトウェアが提供する製品、サービス、サポートに関する詳細情報をご覧いただけます。

HPソフトウェアのオンラインサポートでは、セルフソルブ機能を提供しています。お客様のビジネスを管理するのに必要な対話型の技術サポートツールに、素早く効率的にアクセスできます。HPソフトウェアサポートのWebサイトでは、次のようなことができます。

- 関心のあるナレッジドキュメントの検索
- サポートケースの登録とエンハンスメント要求のトラッキング
- ソフトウェアパッチのダウンロード
- サポート契約の管理
- HPサポート契約の検索
- 利用可能なサービスに関する情報の確認
- 他のソフトウェアカスタマーとの意見交換
- ソフトウェアトレーニングの検索と登録

一部を除き、サポートのご利用には、HP Passportユーザーとしてご登録の上、ログインしていただく必要があります。また、多くのサポートのご利用には、サポート契約が必要です。HP Passport IDを登録するには、次のWebサイトにアクセスしてください。

<https://hpp12.passport.hp.com/hppcf/createuser.do>

アクセスレベルに関する詳細は、以下のWebサイトにアクセスしてください。

<https://softwaresupport.hp.com/web/softwaresupport/access-levels>

HP Software Solutions Nowは、HPSWのソリューションと統合に関するポータルWebサイトです。このサイトでは、お客様のビジネスニーズを満たすHP製品ソリューションを検索したり、HP製品間の統合に関する詳細なリストやITILプロセスのリストを閲覧することができます。このWebサイトのURLは<http://h20230.www2.hp.com/sc/solutions/index.jsp>です。

オンラインヘルプの本 PDF バージョンについて

このドキュメントはオンラインヘルプのPDFバージョンです。このPDFファイルは、ヘルプ情報から複数のトピックを容易に印刷したり、PDF形式でオンラインヘルプを閲覧することができます。本内容は、本来Webブラウザでのオンラインヘルプとして表示するように作成されているため、一部のトピックが正しくフォーマットされない場合があります。このPDF版では、一部の対話型トピックが表示されない場合があります。そうしたトピックはオンラインヘルプ内から正常に印刷できます。

目次

第 I 部: HPE OBR の概要と計画	8
Secure Sockets Layer (SSL) 証明書の使用	9
第 1 章: 設定計画	10
デプロイメントシナリオの確認	10
Business Service Management/Operations Manager i	10
HP Operations Manager	13
VMware vCenter	14
その他のデプロイメント	15
データソースの確認	16
準備状況の確認	17
サイズ設定の確認	18
HPE OBR のライセンス要件	19
ライセンス使用権 (LTU)	19
永久的なライセンスキーの取得	22
永久的なライセンスキーのインストール	23
SAP BusinessObjects ライセンスの再アクティブ化	24
第 II 部 HPE OBR の設定	26
第 2 章: ガイド付き設定またはインストール後の設定	27
タスク 1: 管理コンソールの起動	28
タスク 2: Vertica データベーススキーマの作成	30
共存する Vertica のデータベーススキーマの作成	31
リモート Vertica のデータベーススキーマの作成	33
Vertica データベースの再起動	34
タスク 3: 管理データベースユーザーアカウントの作成	34
タスク 4: リモートシステムにインストールされているコレクターの設定	37
タスク 5: データソースの選択	39
HPOM デプロイメントシナリオのデータソース	41
BSM または OMi デプロイメントシナリオのデータソース	42
BSM と統合された OMi 10 トポロジソース	45
BSM のアップグレード後の OMi 10 トポロジソース	46
VMware vCenter デプロイメントシナリオのデータソース	47
その他の (汎用) データベースデプロイメントシナリオのデータソース	48
タスク 6: トポロジソースの設定	49
RTSM サービス定義ソースの設定	51
サポートされるデータソースの選択	52
HPOM サービス定義ソースの設定	53
サポートされるデータソースの選択	55
vCenter サービス定義の設定	55
サポートされるデータソースの選択	56
タスク 7: サマリー	56

第3章:BSM/OMiデプロイメントシナリオのためのOBRの設定	58
HPE OBRのRTSMトポロジソースの設定	58
コンテンツパックとデプロイするトポロジビューのリスト	59
HP BSMサーバー	65
HP OMi 10サーバー	67
コンテンツパックのCI属性の有効化	69
第4章:HPOMデプロイメントシナリオのためのOBRの設定	74
HPE OBRのHPOM接続用の認証	74
NT認証を使用したHPE OBRのHPOM接続	75
データベース認証を使用したHPE OBRのHPOM接続	76
HPOMサーバーのポート番号のチェック	83
第5章:コンテンツパックのインストールおよびアンインストール	84
開始する前に	84
データソースの可用性および整合性の確認	84
コンテンツパックコンポーネントの選択	84
コンテンツパックコンポーネントのインストール	86
コンテンツパックコンポーネントのアンインストール	89
第6章:データソースの設定	91
トポロジーソース	92
HP Operations Agentデータソースの設定	93
HP Operations Managerデータソースの設定	93
ネットワークデータソースの設定 (汎用データベースの使用)	94
VMware vCenterデータソースの設定	95
SiteScopeデータソースの設定	96
HP Server Automationデータソースの設定	99
管理およびプロファイルデータベースの設定	99
HP OMiデータソースの設定	105
第7章:保留中の設定	107
第III部 追加の設定	108
第8章:セキュアモードでのデータ収集のためのHP Operations Agentの設定	109
第9章:レポートドリル機能設定の設定	113
第10章:内部アラートサービスの設定	116
第11章:HPE OBR用のクライアント認証証明書	118
認証と承認	118
証明書に基づいた認証の前提条件	118
ユーザー名抽出方法の設定	121
HPE OBR管理コンソールの設定	122
SAP BusinessObjects BI起動パッドの設定	125
第12章:Network Node Manager i (NNMi) と統合するためのHPE OBRの設定	132
第13章:Verticaデータベース接続用のWindows上のDSNの設定	135
第14章:複数のプロファイルデータベースの設定	139
第15章:管理者ユーザーのデフォルトパスワードの変更	141

第16章:管理者ユーザーのパスワードの変更	143
第IV部 データベースのバックアップとリカバリ	146
第17章:データベースのバックアップとリカバリ	147
HPE OBRコンポーネントのバックアップ	148
Windows上でのHPE OBRの完全バックアップの作成	148
Linux上でのHPE OBRの完全バックアップの作成	153
HPE OBRコンポーネントの復元	154
Windows上でのHPE OBRのバックアップの復元	154
SAP BusinessObjectsデータベースおよびファイルストアの場合	154
管理データベーステーブルの場合	165
Linux上でのHPE OBRのバックアップの復元	166
SAP BusinessObjectsデータベースおよびファイルストアの場合	166
管理データベーステーブルの場合	177
Verticaデータベースのバックアップと復元	178
第V部 Appendix	179
付録AHPE OBRのSiteScopeモニター	180
付録BSAP BusinessObjects Dashboards 4.1 SP6 (以前のXcelsius) のインストール	188
ハードウェアおよびソフトウェアの要件	188
SAP BusinessObjects Dashboards 4.1 SP6のインストール(省略可能)	188
付録C:ETLのリスト	189
ドキュメントに関するフィードバックの送信	197

第I部:HPE OBRの概要と計画

HPE Operations Bridge Reporter (HPE OBR) は、クロスドメインの履歴 インフラストラクチャ パフォーマンスレポートソリューションです。トポロジ情報を活用して、基盤となるITインフラストラクチャの稼働状態、パフォーマンス、および可用性がビジネスサービスやビジネスアプリケーションに長期的にどのような影響を与えるかを示します。HPE OBRは、管理対象ノードからパフォーマンスデータを収集する製品で使用されるものと同じトポロジサービスを使用して、実行時にインフラストラクチャ要素とビジネスサービスの関係を管理します。

HPE Operations Bridge Reporterは、さまざまなデータソースからデータを収集して処理し、処理済みのデータを使用してレポートを生成します。HPE Operations Bridge Reporterは、パフォーマンスデータを格納するためのVertica データベース、レポートを作成するためのSAP BusinessObjects、管理データを格納するためのPostgreSQLデータベースを使用します。HPE OBRのコレクターコンポーネントは、RTSM、HPOM、BSMプロファイルデータベース、BSM管理データベース、Operations Manager i (OMi)、HP SiteScope、HP Network Node Manager i (NNMi) およびNNM iSPI Performance for Metrics、HP Operations Agent、HP Cloud Optimizerからデータを取得します。

HPE Operations Bridge Reporterのすべてのコンポーネントを単一のシステムにインストールできます。単一のシステムでHPE Operations Bridge Reporterのすべてのコンポーネントをサポートできない場合は、データコレクター、SAP BusinessObjects、Verticaコンポーネントを別々のシステムにインストールできます。データソースが大規模な領域にわたって分散している場合、HPE Operations Bridge Reporterコレクターを異なる複数のシステムにデプロイできます。ネットワーク負荷を軽減し、データソースへの接続性を高めることができます。

HPE OBRは、WindowsとLinuxをサポートします。HPE OBRの標準シナリオは、Linuxシステムでのみインストール可能です。これは、VerticaがVerticalにしかインストールできないためです。HPE OBRのカスタムシナリオは、WindowsとLinux両方を組み合わせた環境にインストールすることができます。HPE OBRのインストールと設定の詳細については、HPE Operations Bridge Reporter『Interactive Installation Guide』を参照してください。

トポロジモデルまたはビューは、ビジネスサービスをIT要素に論理的にマッピングして関連付けます。HPE OBRを使用すると、トポロジサービスを定義し、トポロジの一部になっているノードからインフラストラクチャデータを収集できます。この方法では、トポロジ情報のすべての変更が実行時にレポートに自動的に反映されます。

参照資料

最新版のSAP BusinessObjectsドキュメントについては、http://help.sap.com/businessobject/product_guides/ (英語サイト) を参照してください。

OMi管理パックとその他のコンテンツについては、[HP Live Network Content Catalog](#)を参照してください。

Secure Sockets Layer (SSL) 証明書の使用

Secure Sockets Layer (SSL) は、サーバー認証、クライアント認証、サーバーとクライアントの間の暗号化された通信を管理する、ネットワークプロトコルです。SSLは、データの暗号化と認証を行うことにより、通信をセキュリティ保護します。ネットワーク経路でやりとりされる情報は、SSLにより暗号化されない場合、中間者攻撃 (MITM) などの攻撃に対して脆弱になります。このため、ネットワーク経路で通信する2つのシステムの間でセキュアな接続を確保するためには、SSL証明書を設定する必要があります。

注: HPE OBRでは、ネットワーク経路の通信をセキュリティ保護するため、Secure Sockets Layer (SSL) 証明書を使用することを推奨しています。SSLを使用しないと、ネットワーク経路の通信がMITMなどの攻撃に対して脆弱になる可能性があります。

注: HPE OBRでは、認証局 (CA) 署名証明書の使用を強く推奨しています。CA署名証明書を使用するようにHPE OBRを設定する方法については、『HPE Operations Bridge Reporterインタラクティブインストールガイド』の「認証局署名証明書の生成」セクションを参照してください。

HPE OBRでは、SSL接続の設定時に自己署名証明書を使用することは推奨していません。

第1章:設定計画

このセクションでは、インストール後の設定を開始するにあたって実行する必要のあるタスクの計画について説明します。インストール後の設定を計画するには、次の点について知っておく必要があります。

1. 「[デプロイメントシナリオの確認](#)」(次のセクション)
2. 「[データソースの確認](#)」(16ページ)
3. 「[準備状況の確認](#)」(17ページ)
4. 「[サイズ設定の確認](#)」(18ページ)
5. 「[HPE OBRのライセンス要件](#)」(19ページ)

デプロイメントシナリオの確認

HPE OBRでは、次のデプロイメントシナリオがサポートされています。

- [BSM/OMiのデプロイメント](#)
- [HP Operations Managerのデプロイメント](#)
- [VMware vCenterのデプロイメント](#)
- [その他のデプロイメント](#)

デプロイメントシナリオに基づいて、トポロジソースを決定する必要があります。

注: HPE OBRは一度にいずれか1つのみのトポロジソースに接続します。

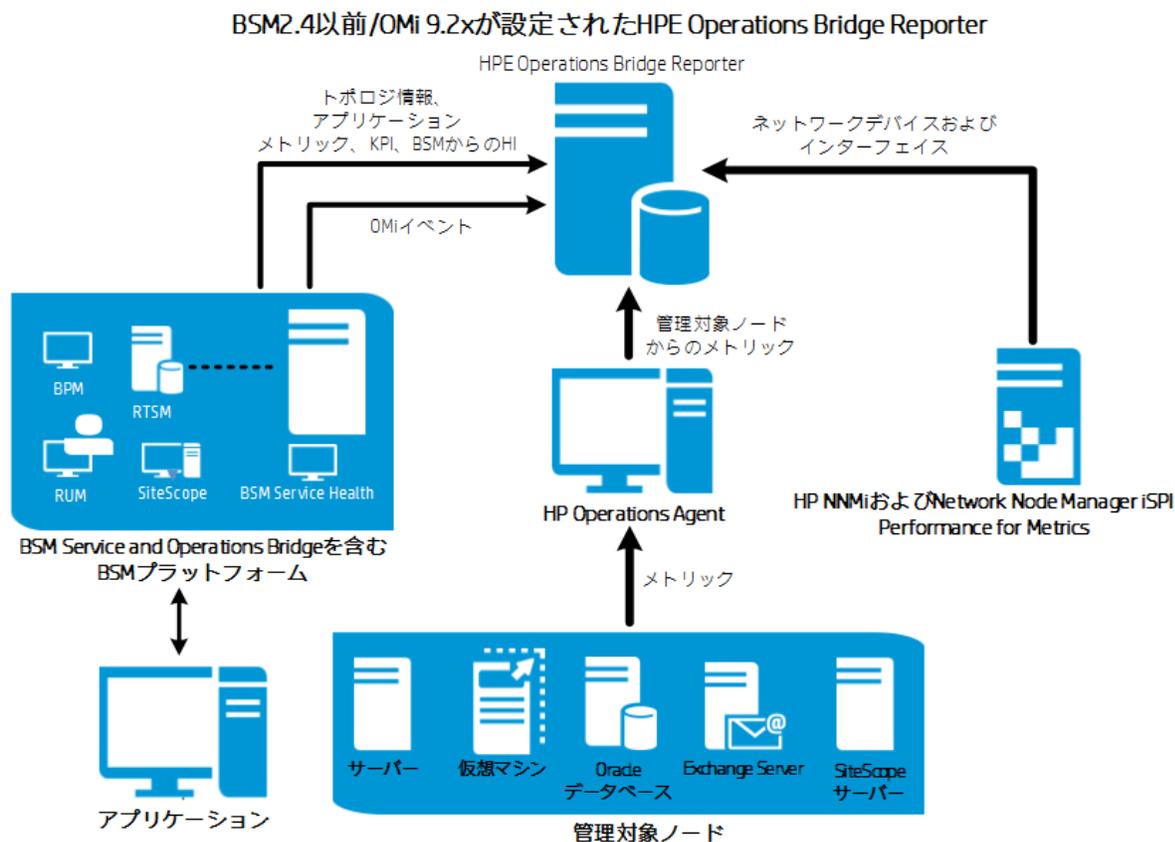
以下の各セクションでは、デプロイメントシナリオと、それらのシナリオで使用されるトポロジ情報のソースについて説明します。

Business Service Management/Operations Manager i

このデプロイメントでは、Run-time Service Model (RTSM) がトポロジ情報のソースです。HPE OBRは、RTSMからトポロジ情報を検出して同期します。BSMとOMi 9.2xでは、この同期テクノロジーにより、HP Operations Agent、NNMi、およびNNM iSPI Performance for Metricsからデータが、BSM環境内のRTSMからトポロジ情報が、およびOMiからイベント情報が取得されます。BSMとOMi 10環境では、この同期テクノロジーにより、BSM、OMi 10、およびHP Operations Agentからトポロジ情報、メトリック、KPI、およびHIが取得されます。OMi 10を備えた環境では、HPE OBRはRTSMを使用して、OMiが設定されているHP Operations AgentまたはHP SiteScopeシステムからトポロジ情報およびメトリックを取得します。

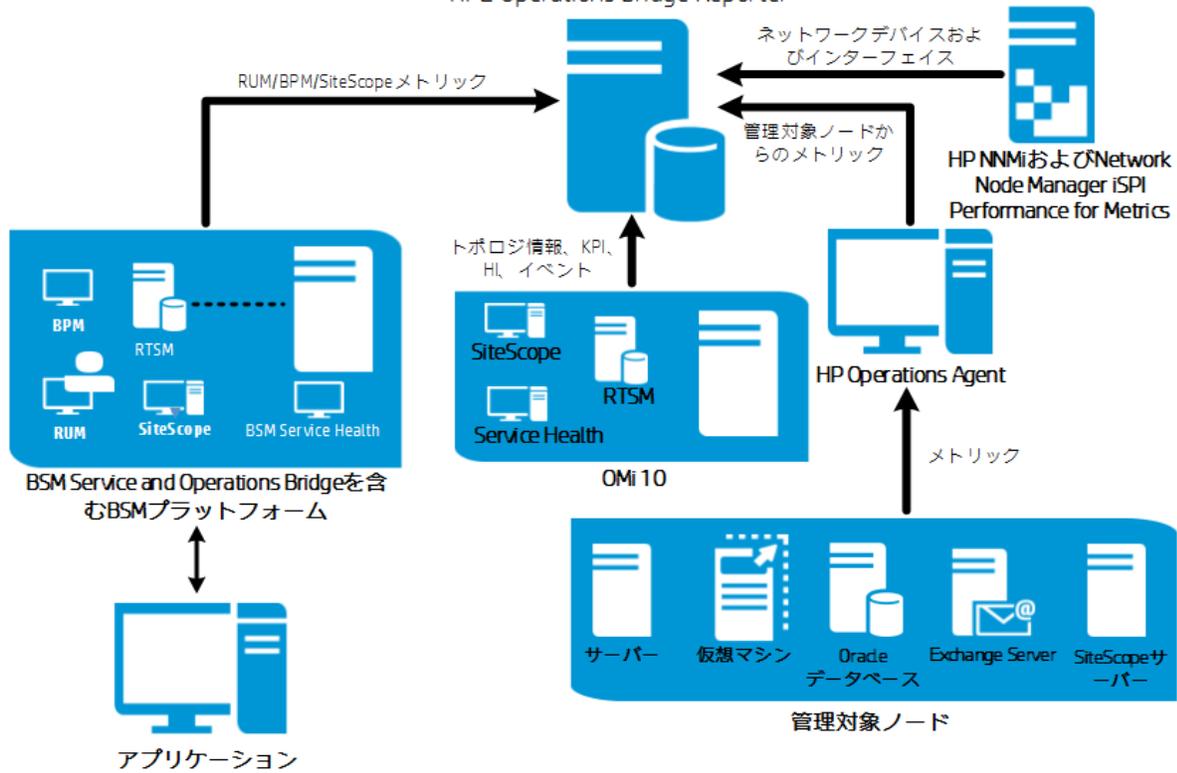
さらに、NNMiおよびNNM iSPI Performance for Metricsから直接データを収集するようにHPE OBRを設定できます。IT環境内のコンポーネントとインターフェイスに基づいてネットワークパフォーマンスレポートにアクセスできます。

次の図では、HP Operations Agent、NNMi、NNM iSPI Performance for Metricsからのデータの流れ、および基盤となるHPOMサーバーを備えたBSM環境のRTSMからのトポロジ情報を示します。

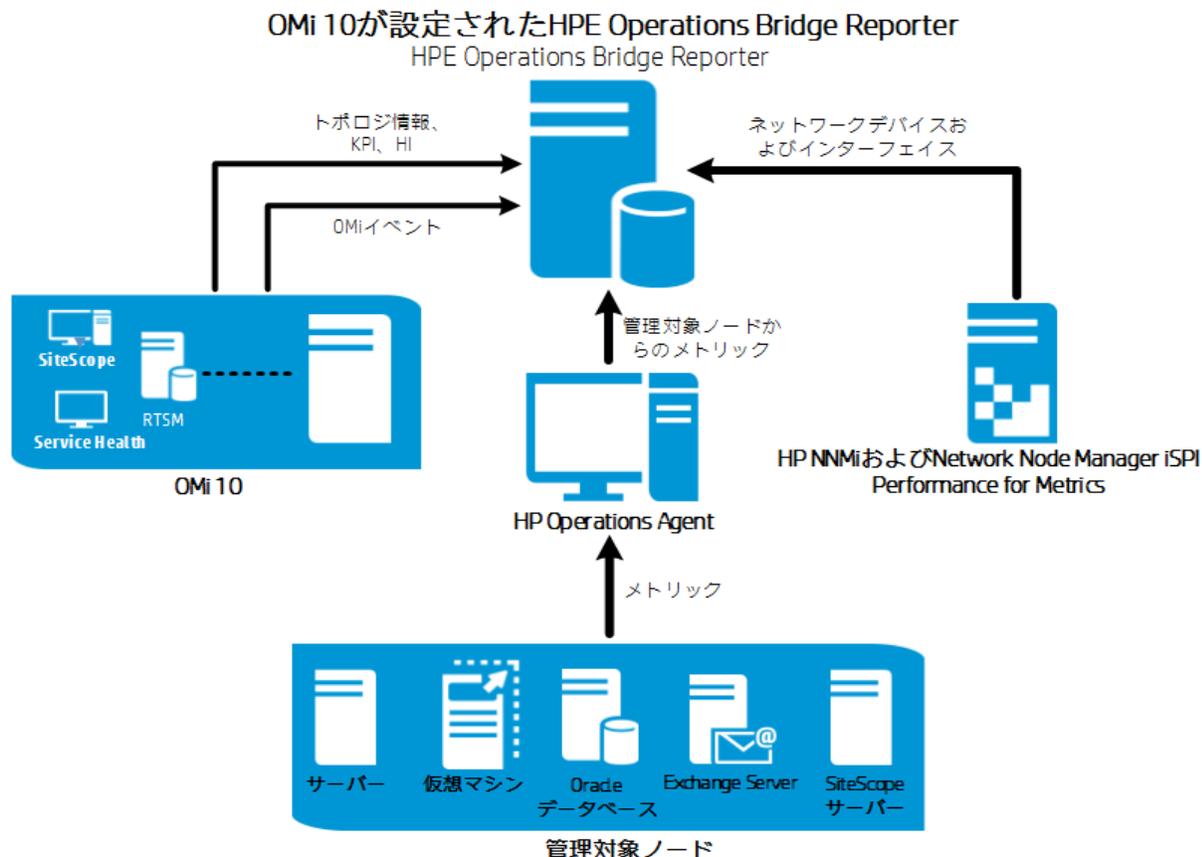


次の図では、HP Operations Agent、OMi 10、NNM iSPI Performance for Metricsからのデータの流ると、BSMおよびOMi 10環境のRTSMからのトポロジ情報を示します。

BSM2.4以前/OMi 10が設定されたHPE Operations Bridge Reporter HPE Operations Bridge Reporter



次の図では、HP Operations Agent、NNM iSPI Performance for Metricsからのデータの流れ、およびOMi 10環境のRTSMからのトポロジ情報を示します。



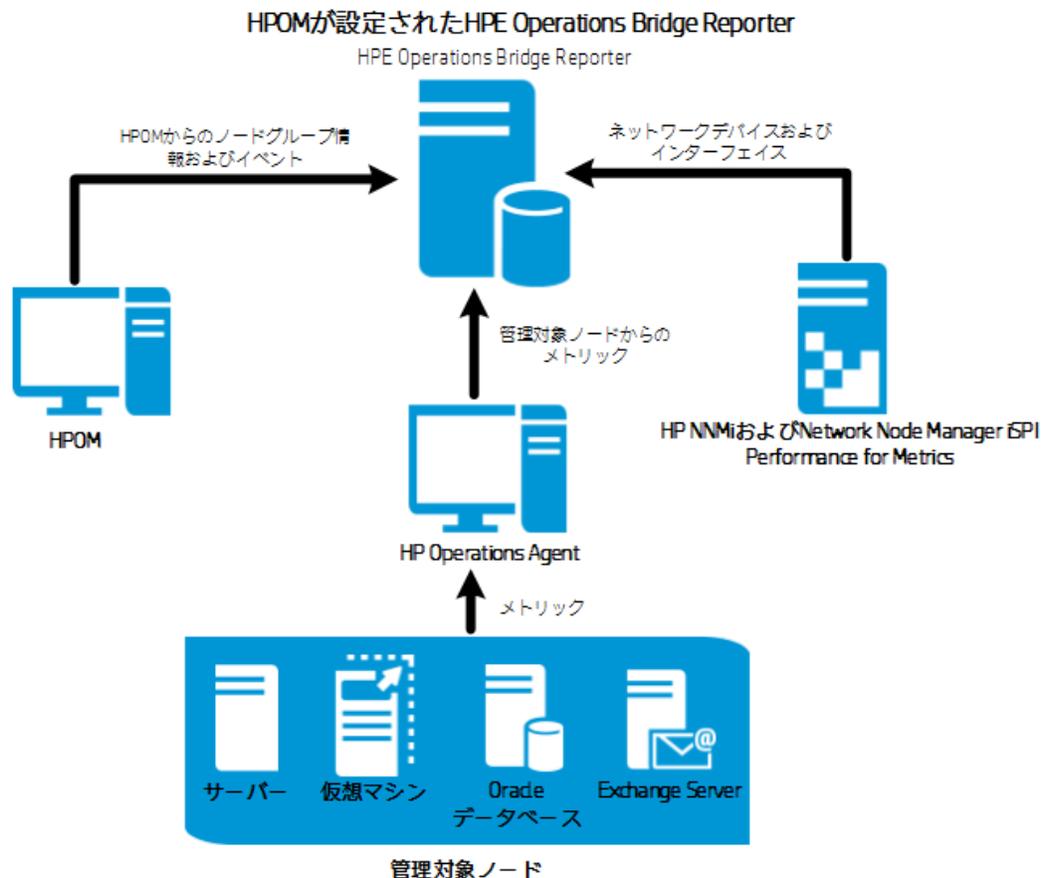
スタンドアロンのトポロジおよびデータソースとして、BSM 2.5以降とOMi 10を設定できます。OMi 10システムとトポロジデータを同期するようにBSMをセットアップすることもできます。

この設定では、OMi 10システムがすべてのノードのトポロジデータ、および操作、イベントおよびKPIのファクトデータを提供します。BSMシステムは、RUM、BPM、およびSiteScopeからの(BSMが直接監視した)ファクトデータを提供します。

HP Operations Manager

このデプロイメントでは、トポロジ情報は、HPOM内に定義された管理対象ノードのグループであり、操作を監視するために論理的に組み合わせられます。これらの論理的なノードグループは、HPOMユーザーによって、エンタープライズ内の特定の組織またはエンティティとしてノードを分類するために作成されます。たとえば、**Exchange Servers**という名前のグループをHPOM内に作成し、レポートまたは監視を目的として、固有のExchange ServerノードとActive Directoryノードをまとめることができます。HPE OBRは、HPOMのノードグループをトポロジレポートのために使用します。

NNMiおよびNNM iSPI Performance for Metricsから直接データを収集するようにHPE OBRを設定できます。IT環境内のコンポーネントとインターフェイスに基づいてネットワークパフォーマンスレポートにアクセスできます。



VMware vCenter

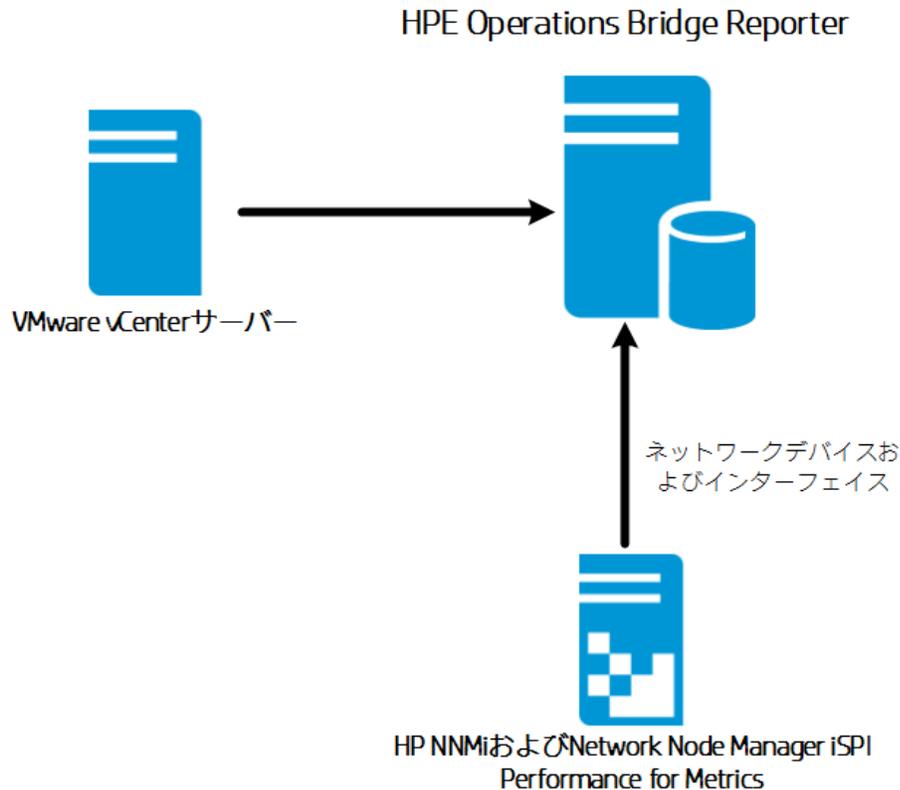
VMware vCenterは、エンタープライズのビジネスに不可欠なシステムの仮想インフラストラクチャの管理を行う柔軟な中央プラットフォームを提供する分散型サーバー/クライアントソフトウェアソリューションです。VMware vCenterは、パフォーマンスとイベントを一元的に監視し、仮想環境の視認性のレベルを拡張します。このようにして、IT管理者が環境を制御するのに役立ちます。

VMware vCenterのデプロイメントシナリオでは、VMware vCenterサーバーが、HPE OBRのトポロジ情報のソースになります。

NNMiおよびNNM iSPI Performance for Metricsから直接データを収集するようにHPE OBRを設定できます。IT環境内のコンポーネントとインターフェイスに基づいてネットワークパフォーマンスレポートにアクセスできます。

注: VMwareの統計情報のログレベルを2に設定することをお勧めします。ただし、ログレベルが1に設定されている場合、ログレベルが2のメトリックが、一部HPE OBRレポートで利用できない可能性があります。ログレベルと対応するメトリックについては、次のURLを参照してください。

<https://communities.vmware.com/docs/DOC-5600>



その他のデプロイメント

基本的なデプロイメントシナリオとは別に、設定したトポロジソースに関係なく、次のソースから独自にデータを収集できます。

- NNMiのデプロイメント

HPE OBRは、HP Network Node Manager i (NNMi) およびNNM iSPI Performance for Metricsと統合して、ネットワークノードのネットワーク関連履歴データを直接収集します。HPE OBRは、データベースコレクターの機能を拡張することによって、ネットワークデータの収集をサポートしています。Networkコンテンツパック、ネットワークコンポーネントヘルスコンテンツパック、インターフェイスヘルスコンテンツパックは、HPE OBRがこれらの各データソースから収集する必要があるメトリックまたはファクトデータのリストを特定します。対応するディメンションデータは、デプロイメントシナリオに応じて、RTSMまたはHPOMのトポロジソースから収集されます。NNMiがBSM/OMi RTSMと統合されている場合は、**NetworkPerf_ETL_PerfiSPI_RTSM**コンテンツパックコンポーネントを使用してください。それ以外の場合は、**NetworkPerf_ETL_PerfiSPI_NonRTSM**コンテンツパックコンポーネントを使用してください。

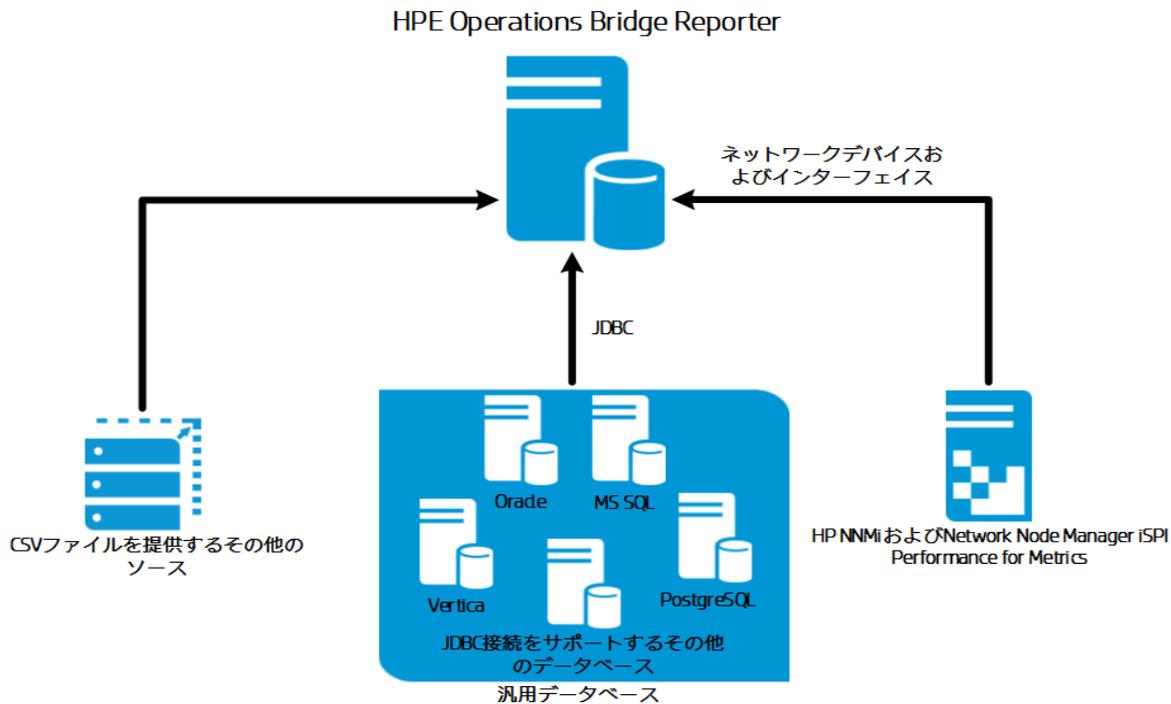
- 汎用データベースのデプロイメント

HPE OBRには、Oracle、Microsoft SQL、およびVerticaデータベースに接続するためのJava Database Connectivity (JDBC) ドライバーが含まれています。JDBCドライバーやその他のデータベースをHPE OBRで設定できます。HPE OBRのコンテンツ開発環境 (CDE)

およびContent Designerを使用すると、コンテンツを作成したり、他のデータベースから収集したデータについてレポートを生成したりすることができます。

- CSVを使用した他のアプリケーションのデプロイメント

HPE OBRでは、カンマ区切りの値 (CSV) ファイルのセットからデータを収集することも可能です。CSVファイルの形式は、Domainコンテンツパックの定義と一致する必要があります。コンテンツ開発環境 (CDE) ツールは、コンテンツの作成や、他のデータベースから収集したデータについてのレポート生成に役立ちます。



データソースの確認

HPE OBRは、HP SiteScope、HP Operations Agent (OA)、HP Operations Manager (OM)、Business Process Management (BPM)、Real User Monitoring (RUM)、Network Node Manager i (NNMi)、VMware vCenter、Operations Management i (OMi)などのHP監視製品からデータを収集します。

デプロイメントシナリオとポロジソースに基づいて、HP監視製品とサードパーティーのデータソースからデータを収集するよう、HPE OBRを設定することができます。HPE OBRは設定されたデータソースから収集されたデータについてレポートを作成します。

また、HPE OBRでは、コンテンツ開発環境 (CDE) を使用した新しいコンテンツの作成もサポートされています。コンテンツ開発環境は、新しいコンテンツの開発時に使用する一連のツールで構成されます。

HPE OBRでデータを収集するデータソースについて計画し、デプロイするコンテンツパックをリストしておく必要があります。また、必要に応じて、生成する新しいカスタムコンテンツやレポートについても計画してください。

準備状況の確認

ここで、環境内にデプロイされているHP監視製品について、HPE OBRに統合する前に準備状況を確認する必要があります。環境内にデプロイされてるHP製品のバージョンがHPE OBRでサポートされていることを確認してください。

HPE OBRでサポートされるバージョンの詳細については、『HPE Operations Bridge Reporter サポート一覧表』を参照してください。

次の表で、HPE OBRとの統合を行うにあたって必要な準備状況の確認について説明します。

HPE監視製品	準備状況チェックリスト
BSM/OMi	<p>構成アイテム(CI)により確実に製品が検出され、RTSMにCIが追加されるようにする必要があります。RTSMのHPE OBRビュー内のCIインスタンスの数が想定通りであり、HPE OBRが使用するCI属性が正しい値を含んでいることを確認します。</p> <p>デプロイメントシナリオに基づき、HPE OBRは管理データベース、プロファイルデータベース、Operationsデータベース、イベントデータベースからデータを収集します。これらのデータベースとHPE OBRシステムとの間で接続が確立されていることを確認する必要があります。</p>
HP Operations Manager (OM)	HPOMデータベースとHPE OBRシステムとの間で正常な接続が確立されていることを確認する必要があります。
HP Operations Agent (OA)	必要なすべてのSPIおよびMPポリシーがデプロイされており、HP OAとHPE OBRシステムとの間に正常な接続が存在することを確認する必要があります。
HP SiteScope	<p>必要なすべてのモニターがSiteScopeにデプロイされていることを確認する必要があります。SiteScopeモニターのリストは付録セクションに記載されています。「付録AHPE OBRのSiteScopeモニター」(180ページ)を参照してください。</p> <p>HP SiteScopeからパフォーマンスデータを収集するため、SitescopeをBSMと統合する必要があります。HPE OBRがBSMプロファイルデータベースにログ記録されたデータを収集できるようにSysPerf_ETL_SiS_DBをインストールするか、HPE OBRがAPIIにログ記録されたデータを収集できるように</p>

HPE監視製品	準備状況チェックリスト
	SysPerf_ETL_SiS_API をインストールする必要があります。
NNMi	<p>HPE OBRは、NNMiおよびSPI Performance for Metricsから直接ネットワークデータを収集します。環境内にNNMiおよびNPSをインストールし、設定しておく必要があります。環境内にBSMがデプロイされている場合は、NNMiをBSMと統合して、HPE OBR内でレポートを表示することが可能です。</p> <p>HPE OBRがNNMiと直接統合されている場合は、HPE_PMDB_Platform_NRT_ETLサービスが正しく稼働していることを確認する必要があります。いることを確認する必要があります。また、ネットワークコンポーネントヘルスおよびネットワークインターフェイスコンテンツパックがインストールされていることを確認します。</p>
VMware vCenter	VMware vCenterサーバーとHPE OBRシステムとの間で正常な接続が確立されていることを確認する必要があります。

サイズ設定の確認

HPE OBRシステムのハードウェア仕様は、レポートを作成するデータソースと環境のサイズによって決まります。初期設定の保管期間を増やす場合は、ディスク領域の要件を引き上げる必要があります。HPE OBRのサイズ設定カリキュレータによって、HPE OBRシステムのハードウェア要件が決定されます。サイズ設定カリキュレータを使用する際は、今後増加する可能性を考慮してパラメーターの値を決定するようにしてください。

障害発生時に備えて、HPE OBRではシステムを復元するディザスターリカバリプロセスがサポートされています。HPE OBRシステムでのデータのバックアップを計画する必要があります。詳細については、『HPE Operations Bridge Reporterディザスターリカバリガイド』を参照してください。

HPE OBRのコンポーネントをすべて単一のシステムにインストールするか、異なるシステムにインストールするかを選択できます。

注: パフォーマンスを高めるには、HPE OBRとBOを同じシステムにインストールし、Verticaを異なるシステムにインストールしてください。選択により、コレクターコンポーネントを異なるシステムにインストールすることができます。

ハードウェア、ソフトウェア、データベースのサイズ設定の詳細については、『HPE Operations Bridge Reporterパフォーマンス、サイズ設定および調整ガイド』を参照してください。

オペレーティングシステムとブラウザ

HPE OBRでは、WindowsオペレーティングシステムとLinuxオペレーティングシステムがサポートされています。また、HPE OBRではInternet Explorer、Chrome、Firefoxブラウザがサポートされています。HPE OBRデプロイメントで使用するオペレーティングシステムとブラウザを決定する必要があります。また、必要なサービスパック/RPM/パッケージマネージャー (RPM) をシステムにインストールする必要があります。

詳細については、『HPE Operations Bridge Reporterサポート一覧表』を参照してください。

HPE OBRのライセンス要件

このセクションでは、HPE OBRのライセンス取得に関する情報を提供します。HPE OBRのライセンス使用権のリストを記載します。また、永久的なライセンスキーを取得してインストールする手順を説明します。さらに、SAP BusinessObjectsのライセンスを再アクティブ化する手順についても説明します。

デフォルトでは、OBRには60日間有効な自動的にオンになる一時的なライセンスが含まれています。60日間経過した後も継続してOBRを使用するには、永久的なライセンスをインストールする必要があります。

OBRライセンスを次に示します。

- **HPE Operations Bridge Reporter (基本ライセンス)**

このライセンスには、データ収集フレームワーク、SAP BusinessObjects Enterprise、収集したメトリックを保存および処理するための高パフォーマンスなパフォーマンス管理データベース、追加設定なしのコンテンツパックが含まれています。さらに、最大50ノードのメトリックを収集して報告するためのエンタイトルメントも含まれています。

- **50ノードの追加拡張パック (ノードライセンス)**

ノードとは、実際または仮想のコンピューターシステム、またはネットワーク上のデバイス (たとえばプリンタ、ルーターまたはブリッジ) またはカスタムコンテンツで定義されるエンティティ (たとえばソフトウェアインスタンス、ポート) を指します。データ収集およびレポートのエンタイトルメントを追加し、環境に合わせてソリューションを拡張することができます。

永久的なライセンスを取得するには、HPライセンスマネージャーを使用するか、HP eBware Webサイトを使用してHP Password Centerから直接ライセンスを取得します。

注: ノードライセンスを取得した場合は、ベースライセンスも一緒に取得する必要があります。

ライセンス使用権 (LTU)

表 1に、HPE OBRで利用できるすべてのLTUを示します。

表1:ライセンス使用権

ライセンス使用権	在庫商品識別番号 (SKU: Stock-keeping Unit)	説明
HP Service Health Reporter Standard Edition 50 Service Health Nodesソフトウェア電子ライセンス使用権	TD905AAE	このライセンス使用権には次のコンテンツパックが含まれます。 <ul style="list-style-type: none"> • Systems/Virtualization Managementコンテンツパック • Enterprise Application Managementコンテンツパックのインストール • イベントコンテンツパック (OM、OMi) BSM EUMおよびネットワークコンテンツパックはこのライセンス使用権では使用できません。
HP Service Health Reporter Advanced 50 Service Health Nodesソフトウェア電子ライセンス使用権	TJ756AAE	このライセンス使用権は、HPE OBRの出荷時に含まれるすべてのコンテンツパックのエンタイトルメントをユーザーに付与します。
HP Service Health Reporter Upgrade from Standard to Advanced 50 Service Health Nodesソフトウェア電子ライセンス使用権	TD906AAE	このアップグレードライセンス使用権は、HPE OBRをStandard EditionからAdvanced Editionにアップグレードするための資格をユーザーに付与します。
HP Service Health Reporter add 50 Nodes for Standard or Advanced Service Health Nodesソフトウェア電子ライセンス使用権	TJ757AAE	HPE OBR用に50個の追加ノードのエンタイトルメントを追加するアドオンパックです。
Performance Insight to Service Health Reporter	TJ773AAE	HP Service Health Reporter Advanced Core

表1:ライセンス使用権 (続き)

ライセンス使用権	在庫商品識別番号 (SKU: Stock-keeping Unit)	説明
Advanced Core for Migrationソフトウェア電子ライセンス使用権		ライセンス使用権 (50ノード)に移行するためのPerformance Insightユーザー向けの移行パックです。
Performance Insight to Service Health Reporter Advanced Migration 250 Service Healthソフトウェア電子ライセンス使用権	TJ774AAE	HP Service Health Reporter Advancedライセンス使用権 (250ノード)に移行するためのPerformance Insightユーザー向けの移行パックです。
Performance Insight to Service Health Reporter Advanced Migration 1000 Service Healthソフトウェア電子ライセンス使用権	TJ775AAE	HP Service Health Reporter Advancedライセンス使用権 (1000ノード)に移行するためのPerformance Insightユーザー向けの移行パックです。
Performance Insight to Service Health Reporter Advanced Migration 5000 Service Healthソフトウェア電子ライセンス使用権	TJ776AAE	HP Service Health Reporter Advancedライセンス使用権 (5000ノード)に移行するためのPerformance Insightユーザー向けの移行パックです。
Performance Insight to Service Health Reporter Advanced Migration Unlimited Service Healthソフトウェア電子ライセンス使用権	TJ777AAE	HP Service Health Reporter Advanced Core電子ライセンス(ノード数無制限)に移行するためのPerformance Insightユーザー向けの移行パックです。

注: ノードとは、実際または仮想のコンピューターシステム、またはネットワーク上のデバイス

(たとえばプリンタ、ルーターまたはブリッジ) またはカスタムコンテンツで定義されるエンティティ (たとえばソフトウェアインスタンス、ポート) を指します。

カスタムコンテンツのライセンスについては、『HPE Operations Bridge Reporterコンテンツ開発ガイド』を参照してください。

永久的なライセンスキーの取得

永久的なライセンスキーを取得するには、次の手順を実行します。

1. 次のURLを使用して、Webブラウザで管理コンソールを起動します。

`https://<OBRサーバーのFQDN>:21412/`

ここでの<OBRサーバーのFQDN> は、OBRのインストール先のシステムの完全修飾ドメイン名です。

注: HPE OBRではデフォルトでHTTPSが有効になっています。HTTPSを無効にしている場合は、`http://<OBRサーバーのFQDN>:21411/`を使用して管理コンソールを起動することもできます。

2. [ユーザー名] フィールドにユーザー名を入力し、[パスワード] フィールドにパスワードを入力します。
3. [ログオン] をクリックします。
[ホーム] ページが表示されます。
4. [管理] > [ライセンス取得] をクリックします。[ライセンス取得] ページに、[HP SH Reporter ライセンスの詳細] が表示されます。
5. [HP Password Centerの起動] をクリックします。[HPライセンス取得へようこそ] ページが表示されます。
6. 新しいエンタイトルメントをアクティブ化するには、[EON (エンタイトルメント注文番号) または証明書ID] を入力して [送信] をクリックします。既存のアセットを管理するには、[電子メールアドレス] を入力して [送信] をクリックします。
7. 自分のユーザーIDとパスワードを使用して、HPパスポートにログオンします。アカウントを持っていない場合は、操作を続ける前にアカウントを作成する必要があります。[HPソフトウェアライセンス取得ポータル] が表示されます。
8. 新規エンタイトルメントをアクティブ化するには、[EON (エンタイトルメント注文番号) または証明書ID] を再度入力して、[GO] をクリックします。[アクティブ化するエンタイトルメントの検索] ページが表示されます。
9. チェックボックスをオンにしてアクティブ化するエンタイトルメントを選択します。[アクティブ化] をクリックします。[エンタイトルメントのアクティブ化] ページが表示されます。
10. ドロップダウンから [登録所有者] を選択し、[登録所有者の検索] をクリックします。[登録所有者の検索] ポップアップが表示されます。

11. [電子メール]に電子メールアドレスを入力し、[検証]をクリックします。

注:登録所有者リストで電子メールアドレスが見つからない場合は、[新規ユーザーの作成]をクリックし、[新規ユーザーの追加]ウィンドウに詳細を入力して、[保存]をクリックします。

12. [エンタイトルメントのアクティブ化]ページの[ターゲット情報]で[MACアドレス]を入力し、[ターゲット名]で[マシンオプション]をクリックします。ターゲットマシンの新しい名前を作成することも、既存のマシンを選択することもできます。複数のマシンを選択することも可能です。
13. [アセット管理]テーブルで、[数量]に必要な数量を入力し、[完了]をクリックします。キーが自動生成され、テーブル列に表示されます。キーと証明書が、登録所有者の電子メールアドレスに送信されます。これでエンタイトルメントがアクティブ化されました。
[サマリーの表示]をクリックします。[ターゲットのサマリー]ポップアップが表示され、アクティブ化した製品の情報(製品の名前、数量、およびその他の詳細)が表示されます。[保存]をクリックします。
[ファイルに保存]をクリックして選択した場所にファイルとしてキーを保存するか、[証明書を電子メールで送信]をクリックして、電子メール経由で証明書を送信します。
[証明書の表示]をクリックします。証明書の所有権、キー、トランザクションの詳細が表示されます。

永久的なライセンスキーのインストール

永久的なライセンスをインストールするには、次の手順を実行します。

1. HPE OBRのインストールに使用したユーザーと同じユーザーでHPE OBRシステムにログインします。
2. コマンドプロンプトを開き、次のコマンドを実行します。
SHRLicenseManager -install <ライセンスファイルのパス>
ここで、<ライセンスファイルのパス>は、ライセンスファイルの保存先のパスです。
3. インストールされているライセンスをリストするため、コマンドプロンプトで次のコマンドを実行します。

```
SHRLicenseManager -list
```

インストールされているライセンスのリストの例を次に示します。

```
PID:1502
```

```
(1) License Feature           :HPE Operations Bridge Reporter BO Pack
```

```
License Feature Id          :1004
```

```
Active License Type         :Instant On
```

Days to License Expiry :60
License Entitlement :50
(2) License Feature :HPE Operations Bridge Reporter Server
License Feature Id :1002
Active License Type :Instant On
Days to License Expiry :60
License Entitlement :50
(3) License Feature :HPE Operations Bridge Reporter Collector
License Feature Id :1006
Active License Type :Instant On
Days to License Expiry :60
License Entitlement :50

SAP BusinessObjectsライセンスの再アクティブ化

SAP BusinessObjectsライセンスは、OBRライセンスの有効性に依存します。OBRライセンスが期限切れになった場合、SAP BusinessObjectsライセンスキーが自動的に無効になり、すべてのSAP BusinessObjectsサーバーが無効になります。OBRライセンスを更新した後で管理コンソールにアクセスすると、OBRが自動的にSAP BusinessObjectsライセンスキーを再びアクティブにします。ただし、SAP BusinessObjectsサーバーは無効な状態のままになっています。SAP BusinessObjectsを機能させるには、次の手順を実行して、サーバーを手動で有効にする必要があります。

Windowsの場合:

1. HPE OBRのインストールに使用したユーザーと同じユーザーでHPE OBRシステムにログオンします。
2. [スタート] > [プログラム] > [BusinessObjects XI 4.x] > [SAP Business Intelligence] > [Central Configuration Manager] をクリックします。[Central Configuration Manager] ウィンドウが表示されます。
3. [Display Name] 列で、[Server Intelligence Agent (OBR)] を選択します。
4. メインツールバーで、[Manage Servers] アイコンをクリックします。[Log On] ダイアログボックスが表示されます。
5. [System] リストで、SAP BusinessObjectsがインストールされているシステムを選択します。
6. SAP BusinessObjectsサーバーの [User name] フィールドと [パスワード] フィールドに、

ユーザー資格情報を入力します。

デフォルトのユーザー名はadministratorです。

7. [接続] をクリックします。[Manage Servers] ウィンドウが表示されます。
8. [更新] アイコンをクリックして、サーバーリストを更新します。
9. [Select All] をクリックして、リストされているすべてのサーバーを選択し、[Enable] アイコンをクリックして、サーバーを再起動します。
10. [閉じる] をクリックして、ウィンドウを閉じます。
11. 開いているすべてのウィンドウを閉じます。

Linuxの場合:

1. 次のURLを使用して中央管理コンソールにログオンします。

`https://<システム_FQDN>:8443/CMC`

ここでの<システム_FQDN>は、SAP BusinessObjectsのインストール先のシステムの完全修飾ドメイン名です。

注: HPE OBRではデフォルトでHTTPSが有効になっています。HTTPSを無効にしている場合は、`http://<システム_FQDN>:8080/CMC`を使用してCMCを起動することもできます。

2. 管理者権限のあるユーザーとしてログオンします。

[System Configuration Wizard] が表示されます。[Close] をクリックして、ウィザードを閉じます。[Central Management Console] ページが表示されます。

注: CMCへのログオン時に毎回 [System Configuration Wizard] が表示されないようにするには、[Don't show this wizard when cms is started] のチェックボックスをオンにします。

3. [ Servers] をクリックして、左側のメニューの [Servers list] を選択します。
4. 複数のサーバーを選択するには、ShiftキーまたはCtrlキーを押しながらサーバーをクリックします。
5. 選択したサーバーのグループを右クリックし、[Enable Server] をクリックします。

注: サーバーのリストが2ページにわたる場合は、2ページ目に進み、すべてのサーバーを有効にします。

注: それでもSAP BusinessObjectsサーバーが有効にならない場合は、HPE_PMDB_Platform_IMサービスを再起動します。

第II部 HPE OBRの設定

このセクションでは、HPE OBRのセットアップに必要なインストール後の設定と、その他のデータソースの設定について説明します。

第2章:ガイド付き設定またはインストール後の設定

このセクションでは、HPE OBRのガイド付き設定またはインストール後の設定を完了するための作業について、各サブセクションで説明します。

HPE OBRをインストールしたら、インストール後の設定のため、管理コンソールを起動します。管理コンソールを使用して、必要なデータの収集、プラットフォームの管理、コンテンツパックのインストールを行うようHPE OBRシステムを設定することができます。設定ウィザードは、管理コンソールに初めてログオンする場合、または以前のセッションでインストール後の設定が完了していない場合に表示されます。設定ウィザードを使用して、HPE OBRシステムのインストール後の設定を完了できます。また、HPE OBRのデータベース、コレクター、およびトポロジソースを設定することもできます。設定ウィザードのタスクが完了すると、[デプロイメントマネージャー] ページが表示されます。

ガイド付き設定またはインストール後の設定作業を一部完了していない場合は、[保留中の設定] ページを参照して、設定や残りのパッケージのインストールを行うことができます。「[第7章:保留中の設定](#)」(107ページ)を参照してください。追加のコンテンツパックのインストールおよびデータソースの設定については、それぞれ「[第5章:コンテンツパックのインストールおよびアンインストール](#)」(84ページ)および「[第6章:データソースの設定](#)」(91ページ)を参照してください。

管理者ユーザーのデフォルトパスワードを変更することができます。インストール後の設定を開始する前にパスワードを変更する方法については、「[第15章:管理者ユーザーのデフォルトパスワードの変更](#)」(141ページ)を参照してください。管理者ユーザーのパスワードは、後で変更することもできます。後で管理者ユーザーのパスワードを変更する方法については、「[第16章:管理者ユーザーのパスワードの変更](#)」(143ページ)を参照してください。

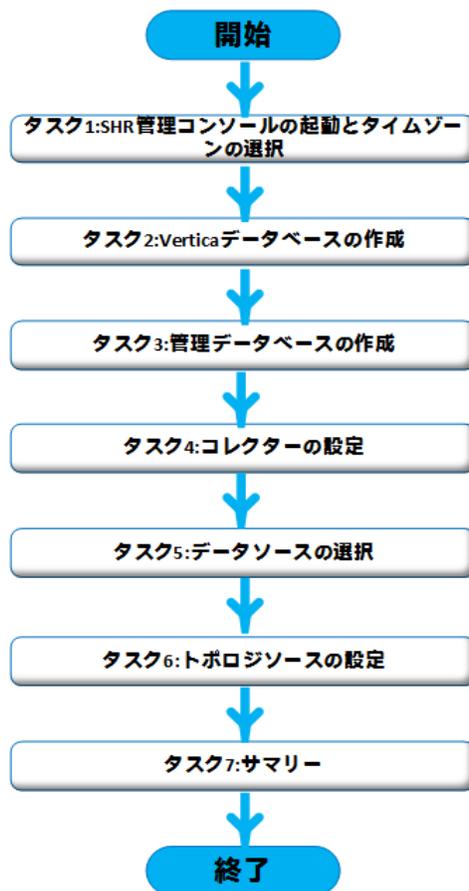
注: セキュリティ上の理由から、インストール後の設定を開始する前に管理者ユーザーのデフォルトパスワードを変更することをお勧めします。

注: HPE OBRをインストールした後でデプロイメントマネージャを使用してコンテンツパックをインストールする前に、本章で説明しているすべてのガイド付き設定またはインストール後の設定作業を実行する必要があります。

次のフローチャートは、HPE OBRとVerticaデータベースが同じシステムにインストールされている場合における、HPE OBRのガイド付き設定またはインストール後の設定作業の概要を示します。

注: HPE OBRおよびVerticaデータベースが異なるシステムにインストールされている場合は、ガイド付き設定またはインストール後の設定作業を開始する前に「[リモートVerticaの](#)

データベーススキーマの作成」(33ページ)の手順を実行してください。



タスク1:管理コンソールの起動

1. 次のURLを使用して、Webブラウザで管理コンソールを起動します。

`https://<OBRサーバーのFQDN>:21412/`

注: HPE OBRではデフォルトでHTTPSが有効になっています。HTTPSを無効にしている場合は、`http://<OBRサーバーのFQDN>:21411/`を使用して管理コンソールを起動することもできます。

HPE Operations Bridge Reporter 管理コンソールログオンページが表示されます。



2. ユーザー名とパスワードを入力し、**[ログイン]** をクリックして続行します。デフォルトのパスワードは**1ShrAdmin**です。

注: HPE OBRではデフォルトのパスワードを変更することを推奨しています。

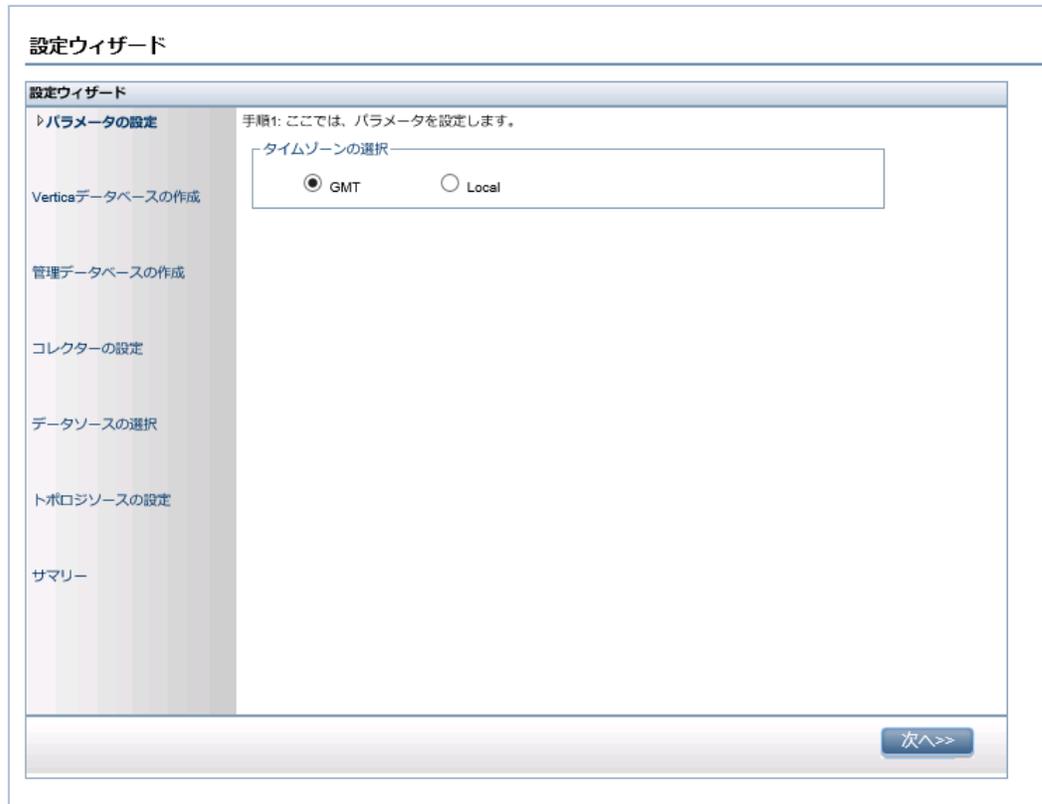
初めて管理コンソールにログオンした際に管理者アカウントのデフォルトパスワードを変更するには、「[管理者ユーザーのデフォルトパスワードの変更](#)」を参照してください。

管理者アカウントのパスワードを後で設定するには、「[管理者アカウントのパスワードの作成](#)」を参照してください。

[管理コンソール] ページが表示されます。

注: ほかのユーザーアカウントを使用して管理コンソールにアクセスする場合は、そのユーザーアカウントが管理者権限を持っていることを確認してください。

次のHPE OBR設定ウィザードは、インストール後の設定作業を完了していない場合のみ表示されます。このウィザードは、セッション状態の維持をサポートします。これにより以前に中断された設定セッションを再開して続行することができます。



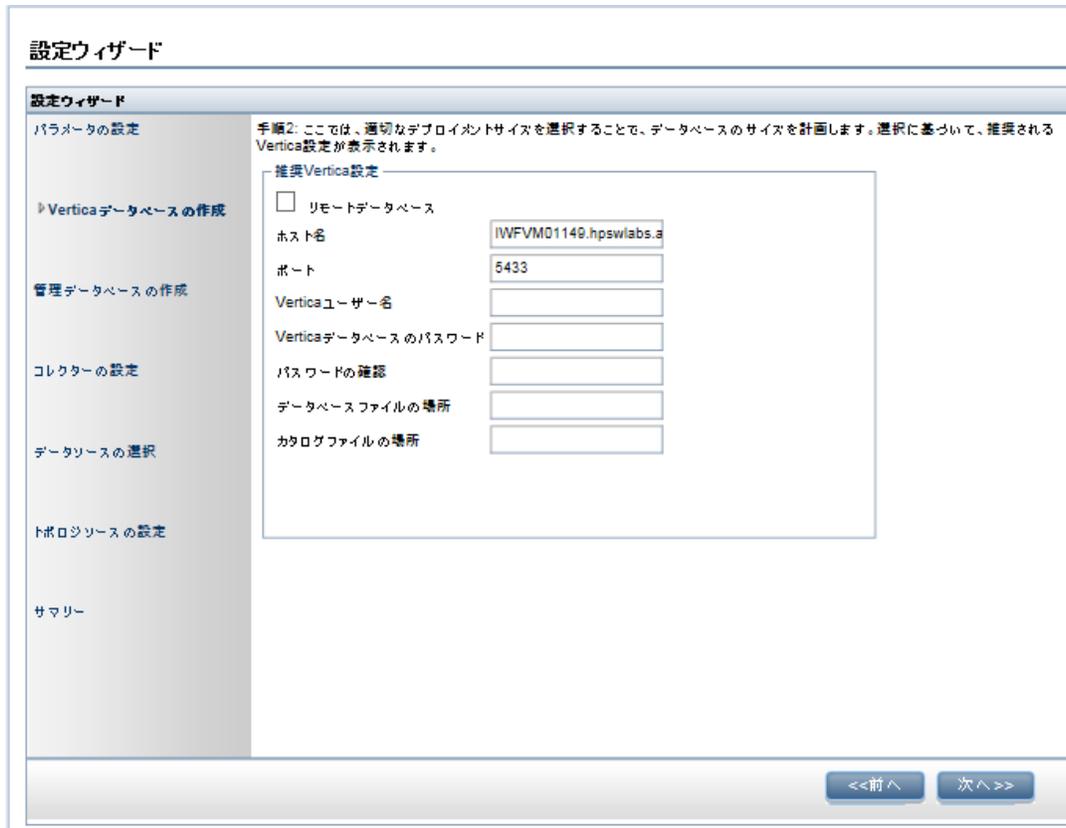
3. [パラメータの設定] ページで、HPE OBRを動作させるタイムゾーン (GMTまたはローカル) を選択します。
 - HPE OBRをGMTタイムゾーンで動作させる場合は、[GMT] を選択します。
 - HPE OBRをローカルシステムタイムゾーンで動作させる場合は、[Local] を選択します。

注: ここで選択したタイムゾーンがHPE OBRシステムとレポートに適用されます。ただし、収集やワークフローストリームなどのプロセスの実行時情報は、この選択に関係なく常にローカル時間に基づきます。

4. [次へ] をクリックします。[Verticaデータベースの作成] ページが表示されます。

タスク2:Verticaデータベーススキーマの作成

[Verticaデータベースの作成] ページで、Verticaデータベースのユーザー資格情報を入力し、Verticaデータベースとカタログファイルの場所を指定します。



VerticaデータベースがHPE OBRに埋め込まれている場合は、「共存するVerticaのデータベーススキーマの作成」(31ページ)の説明にあるタスクを実行します。

Verticaデータベースリモートの場所にある場合は、「リモートVerticaのデータベーススキーマの作成」(33ページ)の説明にあるタスクを実行します。

共存するVerticaのデータベーススキーマの作成

HPE OBRサーバーにインストールされているVerticaデータベースのデータベーススキーマを作成するには、次の手順を実行します。

1. **[Verticaデータベースの作成]** ページで、次のようにVerticaデータベースの設定パラメーターを入力します。

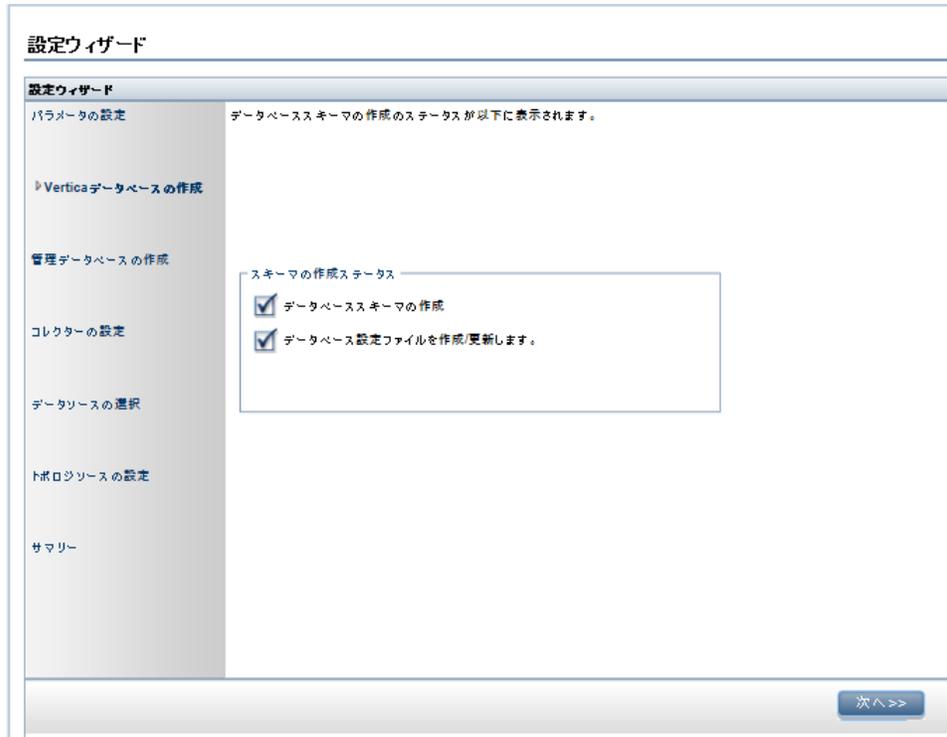
フィールド	説明
リモートデータベース	HPE OBRがリモートのVerticaデータベースとともにインストールされている場合は、このオプションを選択します。
ホスト名	Verticaデータベースサーバーが実行されているホストの名前。
ポート	データベースサーバーを照会するためのポート番号。デフォ

フィールド	説明
	ルトポートは5433です。
Verticaユーザー名	Verticaデータベースへのログオンに使用するVerticaデータベースのユーザー名。
Verticaデータベースのパスワード	Verticaデータベースへのログオンに使用するVerticaデータベースのパスワード。
パスワードの確認	確認のためにパスワードを再入力します。
データベースファイルの場所	データを保存する場所またはパス。 注: [リモートデータベース] を選択した場合、このオプションは無効です。
カタログファイルの場所	カタログを作成する場所またはパス。 注: [リモートデータベース] を選択した場合、このオプションは無効です。

確認のダイアログボックスが表示されます。



2. [はい] をクリックします。
[スキーマの作成ステータス] ページが表示されます。



3. [次へ] をクリックします。[管理データベースの作成] ページが表示されます。

注: [次へ] をクリックしても [管理データベースの作成] ページが表示されない場合は、ブラウザを更新して、インストール後の作業を続行してください。

リモート Vertica のデータベーススキーマの作成

注: HPE OBR と Vertica が異なるシステムにインストールされている場合は、ガイド付き設定またはインストール後の設定を開始する前にと Vertica データベースを作成してください。

リモートシステム上に Vertica データベースを作成するには、コマンドラインインターフェイスで次のスクリプトを実行してください。

```
$PMDB_HOME/bin/CreateVerticaDatabase.sh <Verticaユーザー> <パスワード> <データファイルの場所> <カタログファイルの場所>
```

ここでの <Verticaユーザー> は、Vertica データベースのユーザー名です。

<パスワード> は、Vertica データベースのパスワードです。

<データファイルの場所> は、Vertica データベースを作成する場所のパスです。

<カタログファイルの場所> は、Vertica カタログを作成する場所のパスです。

注: HPE OBR が Windows 上にインストールされている場合は、Vertica データベースに接続するための DSN を Windows 上で作成する必要があります。Windows 上で DSN を作成

する手順については、「[第13章:Verticaデータベース接続用のWindows上のDSNの設定](#)」(135ページ)を参照してください。

Verticaデータベースの再起動

再起動ポリシーを設定してもVerticaが自動的に再起動しない場合があります。また、予期しないシャットダウンや停電、強制シャットダウンの後でVerticaが再起動しない場合があります。

Verticaデータベースを再起動するには、次の手順を実行します。

1. Verticaがインストールされているシステムにrootユーザーとしてログオンします。
2. コマンドプロンプトで次のコマンドを実行します。
`su - <Verticaユーザー名>`
ここでの<Verticaユーザー名>は、Verticaデータベースユーザーのユーザー名です。
3. admintoolsと入力して、**Enter**キーを押します。メインメニューが表示されます。
4. **[データベースの開始]**をクリックし、**[OK]**をクリックします。Verticaデータベースが開始されます。
初期化中に、最後の正常なエポックから開始するかを確認されたら、**[Yes]**をクリックします。

ヒント: 計画済みの再起動やシャットダウンがある場合は、必ずVerticaデータベースを停止するようにしてください。

タスク3:管理データベースユーザーアカウントの作成

管理データベースとは、データプロセスジョブストリームのステータス、変更されたテーブルのステータス、データソース情報などの実行時データを保存するためにHPE OBRによって使用されるオンライントランザクション処理 (OLTP) ストアを意味します。

[管理データベースの作成] ページで、管理データベースのユーザーの詳細を指定します。

設定ウィザード

設定ウィザード

パラメータの設定

Verticaデータベースの作成

管理データベースの作成

コレクターの設定

データソースの選択

トポロジースの設定

サマリー

手順3: ここでは、データベース管理者が管理データベースにアクセスするための新しいユーザーアカウントを作成できます。このデータベースは、ランタイムデータを格納するために使用されるOLTPストアです。

管理データベースのユーザー (DBA権限) とパスワードの入力

ユーザー名: postgres

新しいDBAパスワード:

新しいDBAパスワードの確認:

管理データベースのユーザー情報の入力

ユーザー名: pmdb_admin

新しいパスワード:

新しいパスワードの確認:

次へ >>

管理データベースのユーザーアカウントを作成するには、次の手順を実行します。

1. [管理データベースユーザー (DBA権限) とパスワードの入力] で、次の値を入力します。

フィールド	説明
ユーザー名	PostgreSQLデータベース管理者の名前。
新しいDBAパスワード	PostgreSQLデータベース管理者の新しいパスワードを入力します。
新しいDBAパスワードの確認	確認のために同じパスワードを再入力します。

2. 管理データベースユーザーのパスワードを変更する場合は、[管理データベースのユーザー情報の入力] で、次の値を入力します。

フィールド	説明
ユーザー名	管理データベースユーザーの名前。デフォルト値はpmdb_adminです。

フィールド	説明
新しいパスワード	管理データベースユーザーの新しいパスワードを入力します。
新しいパスワードの確認	確認のために同じパスワードを再入力します。

3. [次へ]をクリックします。[管理データベースの作成ステータス] ページが表示されます。
4. データベース接続の一環として完了したタスクおよび管理データベースの詳細を確認し、[次へ]をクリックします。[コレクターの設定] ページが表示されます。



HPE_PMDB_Platform_NRT_ETLサービスのステータスの確認

注: 次の手順は、管理データベースが正しく作成され、HPE_PMDB_Platform_NRT_ETLサービスが自動的に開始されない場合にのみ実行してください。

管理データベースの作成ステータスが正しく完了すると、HPE_PMDB_Platform_NRT_ETLサービスが自動的に開始されます。サービスが自動的に開始されていない場合は、手動で開始します。

HPE_PMDB_Platform_NRT_ETLサービスを手動で開始するには、次の手順を実行します。

1. HPE OBRシステムにログオンします。
2. サービスを手動で開始します。

Windowsの場合:

- [サービス] ウィンドウで、HPE_PMDB_Platform_NRT_ETLサービスを右クリックし、[開始]をクリックします。

Linuxの場合:

- /etc/init.dディレクトリに移動し、次のコマンドを実行します。
`service HPE_PMDB_Platform_NRT_ETL start`

タスク4:リモートシステムにインストールされているコレクターの設定

コレクターの設定に進む前に、リモートシステムで次のコマンドを実行する必要があります。

Windowsの場合:

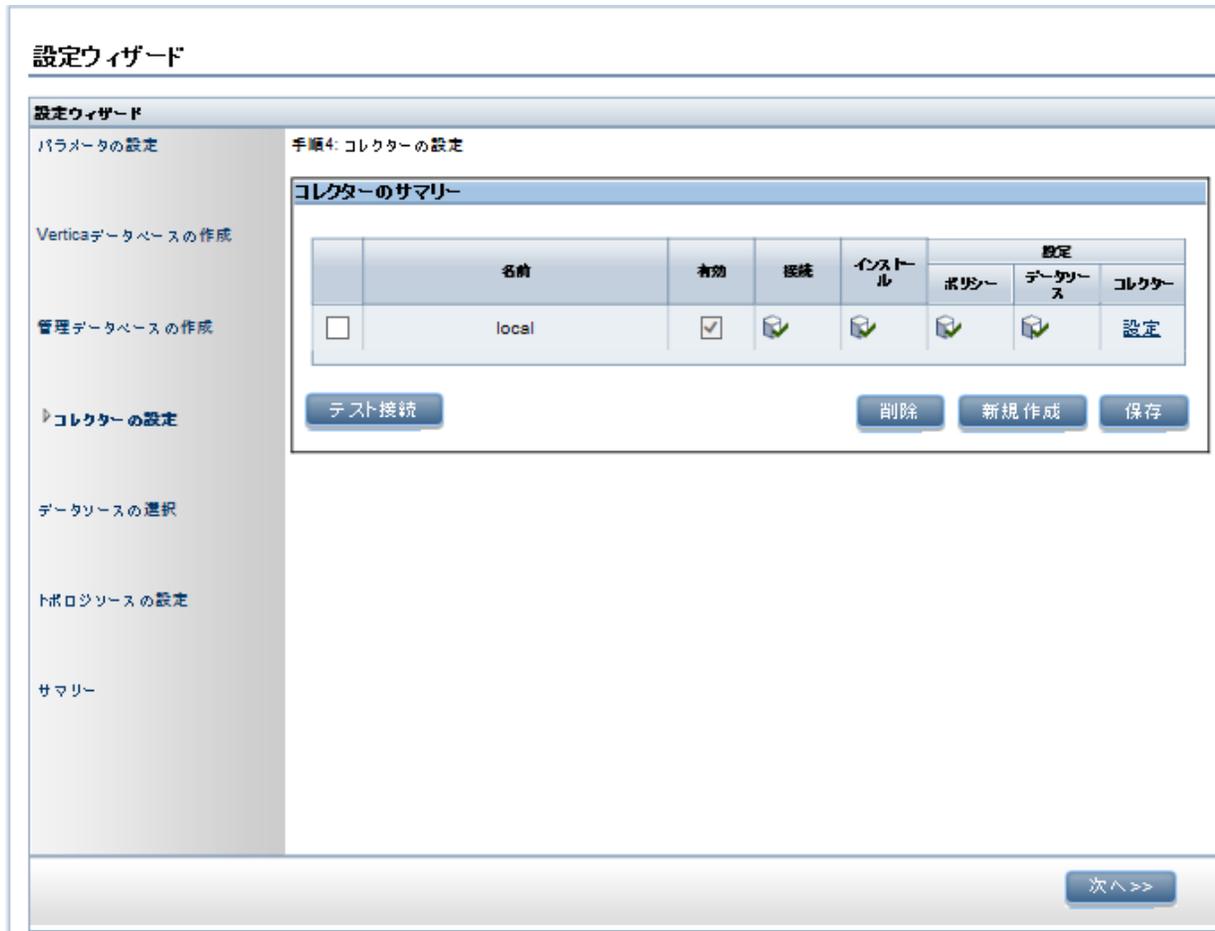
```
"perl %PMDB_HOME%\bin\scripts\configurePoller.pl <OBRシステムの完全修飾  
ホスト名>"
```

Linuxの場合:

```
"perl $PMDB_HOME/bin/scripts/configurePoller.pl <OBRシステムの完全修飾ホ  
スト名>"
```

注: 上記のコマンドを実行することにより、HPE OBRシステムとコレクターシステムの間で証明書が交換されます。この交換により、HPE OBRとコレクターの間の通信チャネルが設定されます。コレクターの1つのインスタンスでは、1つのみのHPE OBRのインスタンスを使用するように設定できます。1つのコレクターで複数のHPE OBRインスタンスを使用する設定はサポートされていません。

[コレクターの設定] ページでは、新規コレクターの作成、既存のコレクターの削除、既存のコレクターへのアプリケーションの接続を行うことができます。



1. [コレクターの設定] ページで、[新規作成] をクリックします。
[設定パラメーター] セクションが表示されます。次の値を入力します。

フィールド	説明
名前	リモートシステムにインストールされているコレクターの表示名。この名前にはスペースまたは特殊文字を含めることができません。
ホスト名	コレクターホスト名

2. [OK] をクリックして、コレクターの作成を完了し、[保存] をクリックします。
3. [接続テスト] をクリックし、接続の状態を確認します。
状態レポートに「テスト接続に失敗しました」と表示された場合は、次の手順を実行します。
 - a. コレクターシステムにログオンします。
 - b. **HPE_PMDB_Platform_Collection** が開始されていることを確認します。
サービスが開始されていない場合は、手動でサービスを開始します。

- c. サービスを手動で開始するには、次の手順を実行します。

Windowsの場合:

- [サービス] ウィンドウで、**HPE_PMDB_Platform_Collection**サービスを右クリックし、[開始]をクリックします。

Linuxの場合:

- /etc/init.dディレクトリに移動し、次のコマンドを実行します。

```
service HPE_PMDB_Platform_Collection start
```

4. [次へ]をクリックします。[データソースの選択] ページが表示されます。

タスク5:データソースの選択

[データソースの選択] ページで、選択したデータソースおよびそのほかのオプションのデプロイメントシナリオを指定します。

設定ウィザード

設定ウィザード

パラメータの設定 手順5: データソースの選択

Verticaデータベースの作成

管理データベースの作成

コレクターの設定

データソースの選択

トポロジソースの設定

サマリー

Deployment Scenario

HP OM BSM/OMi VMware vCenter only Others

次へ >>

デプロイメントシナリオを、**HP OM**、**BSM/OMi**、**VMWare vCenterのみ**、**その他** から1つ選択します。

次の表に、各デプロイメントシナリオで監視できる領域を示します。

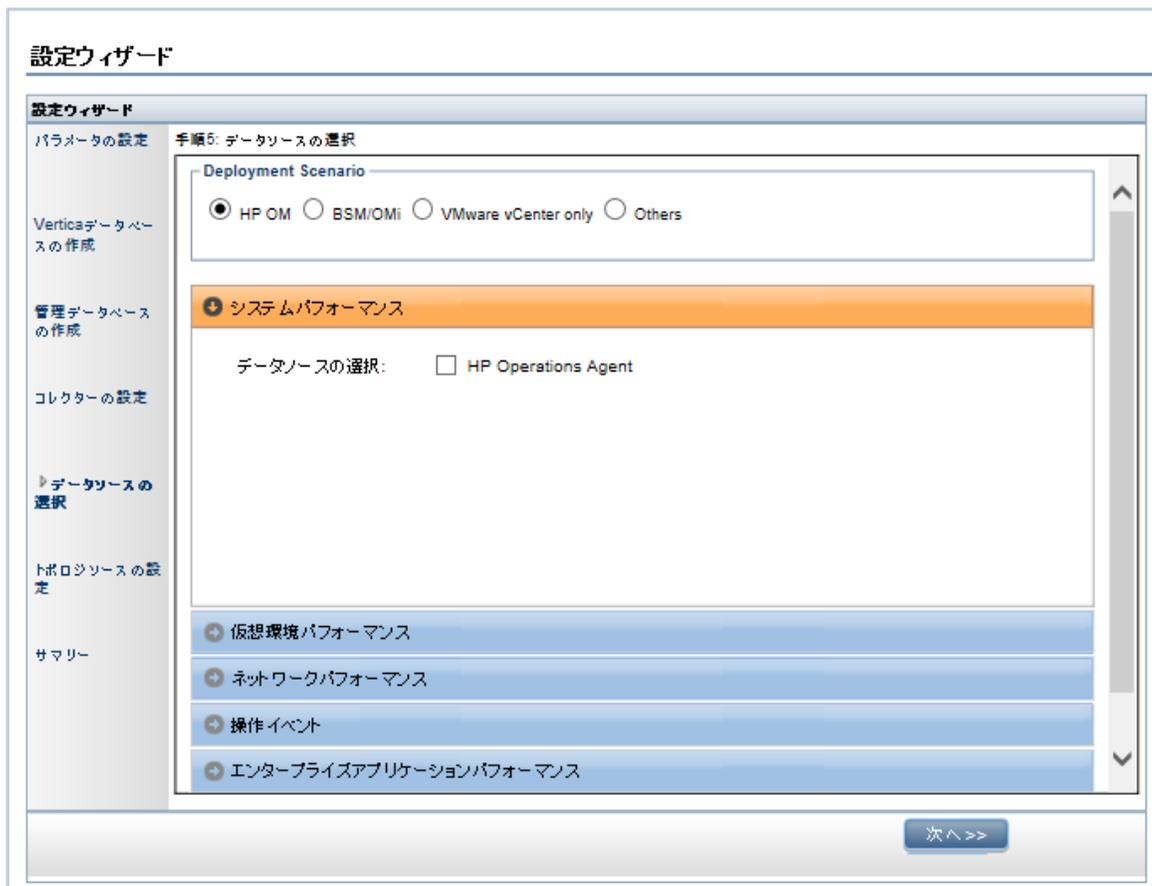
デプロイメントシナリオ	監視の領域
<p>HP OM</p>	<ul style="list-style-type: none"> • System Performance <ul style="list-style-type: none"> • HP Operations Agent • Virtual Environment Performance <ul style="list-style-type: none"> • HP Operations Agent • VMware vCenter • Network Performance • Operations Events <ul style="list-style-type: none"> • HPOMイベント • Enterprise Application Performance <ul style="list-style-type: none"> • Microsoft SQL Server • Microsoft Exchange Server • Microsoft Active Directory • Oracle • Oracle WebLogic Server • IBM WebSphere Application Server
<p>BSM/OMi BSM 9.2xまたはOMi 10</p>	<ul style="list-style-type: none"> • System Performance <ul style="list-style-type: none"> • HP Operations Agent • SiteScope • Virtual Environment Performance <ul style="list-style-type: none"> • HP Operations Agent • SiteScope • VMware vCenter • Network Performance <ul style="list-style-type: none"> • BSM/OMiと統合されたNNMi • Operations EventおよびKPI <ul style="list-style-type: none"> • HPOMイベント • OMiイベント • HP Service Health

デプロイメントシナリオ	監視の領域
	<ul style="list-style-type: none">• HP End User Monitoring<ul style="list-style-type: none">• HP Real User Monitor• HP Business Process Monitor• Enterprise Application Performance<ul style="list-style-type: none">• Microsoft SQL Server• Microsoft Exchange Server• Microsoft Active Directory• Oracle• Oracle WebLogic Server• IBM WebSphere Application Server
VMware vCenterのみ	<ul style="list-style-type: none">• Virtual Environment Performance• Network Performance
その他	<ul style="list-style-type: none">• Network Performance

HPOMデプロイメントシナリオのデータソース

HPOMでデータを収集するには、次の手順に従います。

1. [デプロイメントシナリオ] で、[HP OM] をクリックします。



2. [システムのパフォーマンス] で、[HP Operations Agent] を選択します。
3. (任意):[仮想環境のパフォーマンス] で、仮想環境のデータソースを選択します。
4. (任意):環境でNNMiおよびNNMi SPI Performanceを利用できる場合は、[ネットワークパフォーマンス] で [BSM/OMiと統合されたNNMi] を選択します。
5. [操作イベント] で、イベントに [HPOMイベント] を選択します。
6. [エンタープライズアプリケーションパフォーマンス] セクションで、HPOMによって監視されるスマートプラグイン (SPI) のデータソースを選択します。

注: [Microsoft Exchange Server] を選択すると、[MS Exchange Serverのバージョンの選択] セクションが開きます。Exchange Serverのバージョンを選択する必要があります。

7. [保存] をクリックします。すべての選択内容のサマリーが表示されます。
8. [次へ] をクリックします。[トポロジソースの設定] ページが表示されます。

BSMまたはOMiデプロイメントシナリオのデータソース

以下のデータコレクターをHPE OBR内で設定する必要があります。

- **データベースコレクター** - BSMデータベースから履歴合成トランザクションモニタリング (BPM) データおよびリアルユーザーモニタリング (RUM) データを収集します。さらに、プロファイルデータベース、HPOMデータベース、およびHP OMiデータベースなどのデータソースのデータベースからイベント、メッセージ、可用性、およびパフォーマンスの主要パフォーマンス指標 (KPI) も収集します。
- **HP Operations Agentコレクター** - システムパフォーマンスメトリックと、アプリケーション、データベース、およびシステムリソースに関連したデータを収集します。データは、管理対象ノードにインストールされているHP Operations Agentによって収集されます。

BSMまたはOMiでデータを収集するには、次の手順を実行します。

1. [デプロイメントシナリオ] で、[BSM/OMi] をクリックします。

設定ウィザード

設定ウィザード

パラメータの設定 手順5: データソースの選択

Verticaデータベースの作成

管理データベースの作成

コレクターの設定

データソースの選択

トポロジソースの設定

サマリー

Deployment Scenario

HP OM BSM/OMi VMware vCenter only Others

BSM/OMiのバージョン

BSM/OMiのバージョン: BSM 9.2x OMi 10.x

システムパフォーマンス

データソースの選択: HP Operations Agent SiteScope

仮想環境パフォーマンス

ネットワークパフォーマンス

次へ>>

2. [BSM/OMiのバージョン] で、アプリケーションのバージョンを選択します。
[BSM 9.2x] または [OMi 10.x] のいずれか、また [BSM 9.2x] と [OMi 10.x] の両方を選択できます。BSMとOMiを使用した追加のデプロイメント設定については、以下を参照してください。

 - 「BSMと統合されたOMi 10トポロジソース」
 - 「BSMのアップグレード後のOMi 10トポロジソース」

3. [システムのパフォーマンス] で、システムについての必要なデータソースを選択します。
 - a. システムのパフォーマンスに [SiteScope] を選択すると、[SiteScopeメトリックチャンネル] セクションが表示されます。
 - b. SiteScopeのメトリックチャンネルとして [プロファイルDB] または [ダイレクトAPI] のいずれかを選択する必要があります。

注: OMi 10.xでシステムまたは仮想環境パフォーマンスを監視するために SiteScopeを使用する場合、SiteScopeのメトリックチャンネルはダイレクトAPIを介します。

4. (任意):[仮想環境のパフォーマンス] で、仮想環境のデータソースを選択します。データソースのテクノロジーを選択します。

データソース	テクノロジーの選択
HP Operations Agent	VMware IBM LPAR Microsoft Hyper-V Solaris Zones
SiteScope	VMware 注: 仮想環境パフォーマンスについては、メトリックチャンネルも選択する必要があります。OMi 10.xの場合は、ダイレクトAPIを介してのみSiteScopeのデータを収集できません。
VMware vCenter	VMware

5. (任意):環境でNNMiおよび**NNMi SPI Performance**を利用できる場合は、[ネットワークパフォーマンス] で [BSM/OMiと統合されたNNMi] を選択します。
6. [操作イベントおよびKPI] で、必要なイベントのデータソースを選択します。
7. [HP End User Monitoring] で、BSMIによって監視されるコンポーネントのデータソースを選択します。

注: デプロイメントがOMi 10.x用である場合、このパラメーターは無効です。

8. [Enterprise Application Performance] で、OMiによって監視される管理パックのデータソースを選択します。
9. 必要な管理パックを選択すると、[テクノロジーの選択] セクションが表示されます。[管理パック] チェックボックスをオンにします。

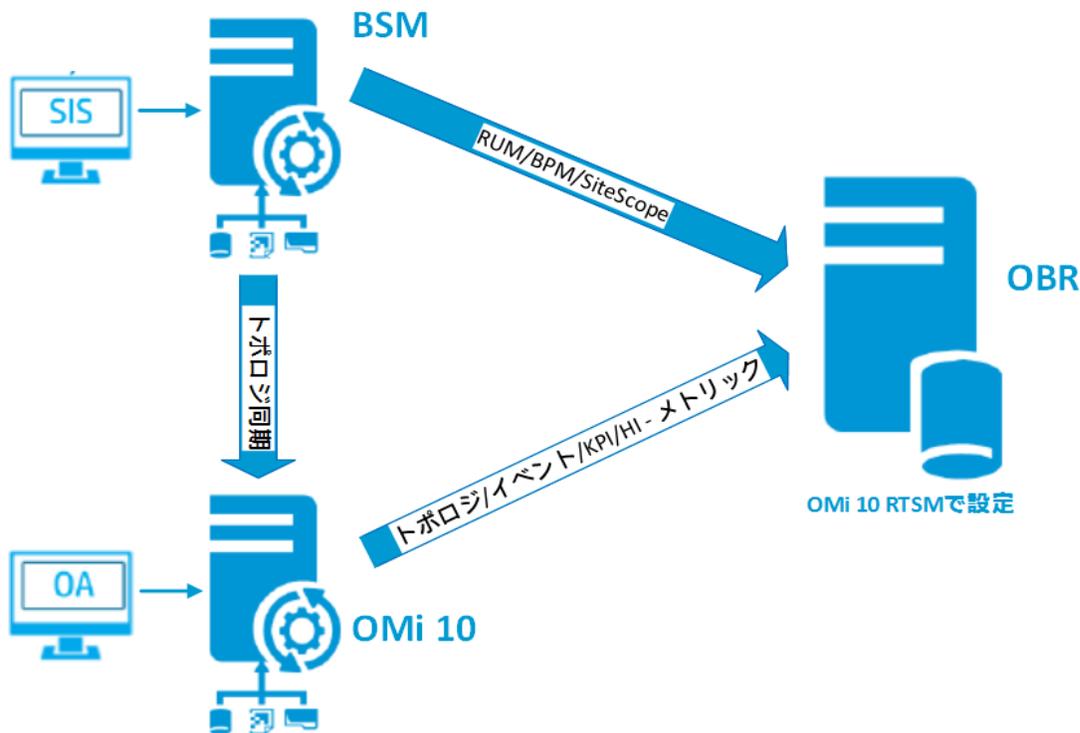
注: [Microsoft Exchange Server管理パック] を選択すると、[MS Exchange Server

のバージョンの選択 セクションが開きます。Exchange Serverのバージョンを選択する必要があります。

10. [保存] をクリックします。すべての選択内容のサマリーが表示されます。
11. [次へ] をクリックします。[トポロジソースの設定] ページが表示されます。

BSMと統合されたOMi 10トポロジソース

BSMとOMi 10をスタンドアロンのトポロジおよびデータソースとして設定できる一方、OMi 10システムとトポロジデータを同期するようにBSMをセットアップすることもできます。



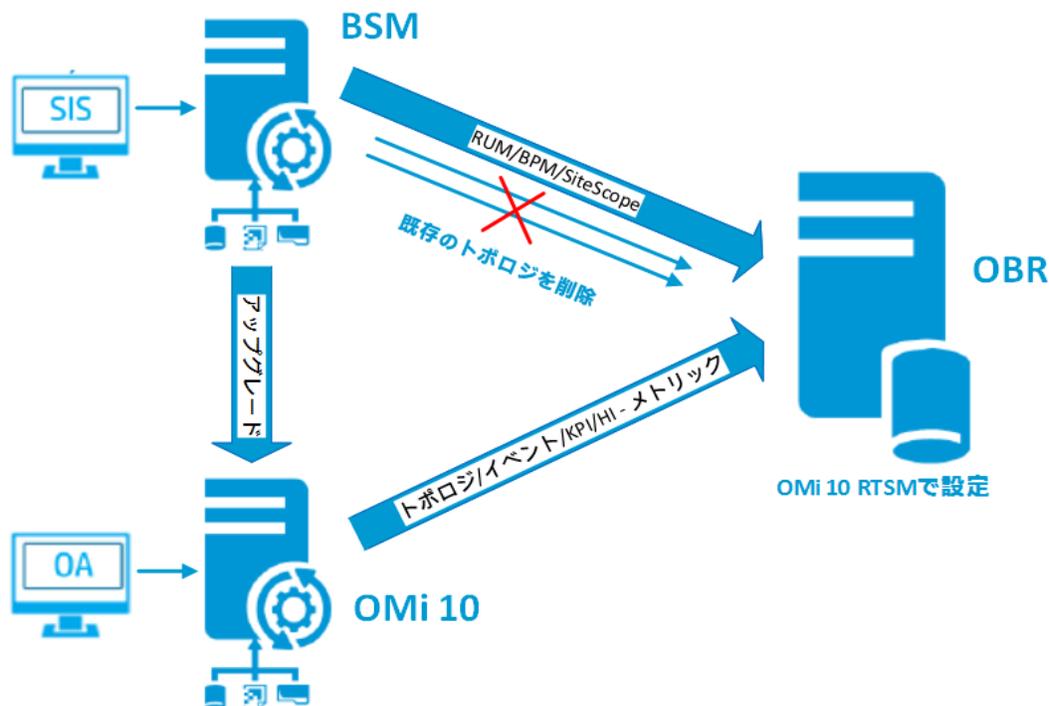
この設定では、OMi 10システムがすべてのノードのトポロジデータ、およびOperations EventsとKPIのファクトデータを提供します。BSMシステムは、RUM、BPM、およびSiteScopeからの (BSMが直接監視した) ファクトデータを提供します。BSMおよびOMi 10間におけるトポロジの同期の有効化については、それぞれのドキュメントを参照してください。

注: NNMiがOMi RTSMと統合されている場合、NPS RTSM ETL (**NetworkPerf_ETL_PerfiSPI_RTSM**) コンテンツパックコンポーネントを使用します。それ以外の場合、非NPS RTSM ETL (**NetworkPerf_ETL_PerfiSPI_NonRTSM**) コンテンツパックコンポーネントを使用します。

OBRでトポロジソースを設定するには、「[RTSMサービス定義ソースの設定](#)」(51ページ)を参照してください。

BSMのアップグレード後のOMi 10トポロジソース

BSMとOMi 10をスタンドアロンのトポロジおよびデータソースとして設定できる一方、BSMシステムをOMi 10システムにアップグレードすることもできます。



この設定では、BSMシステムとHPE OBRシステムの間で同期された既存のトポロジが削除され、OMi 10システムがすべてのノードのトポロジデータと、操作イベントおよびKPIのファクトデータを提供します。BSMシステムは、RUM、BPM、およびSiteScopeからの (BSMが直接監視した) ファクトデータを提供します。

注: このシナリオにおいて、HPE OBRがBSM 9.2xに接続された時点ですでにNPS RTSM ETL (**NetworkPerf_ETL_PerfiSPI_RTSM**) を使用している場合は、BSMがOMi 10およびBSM 9.24にアップグレードした後、必ずNNMiがOMi 10 RTSMに統合されるようにしてください。

この設定では、BSMシステムがOMiにアップグレードした後はすべてのトポロジとファクトデータがOMiから収集されます。アップグレードを実行するには、次の手順に従います。

1. BSMおよびOMiシステムからのデータ収集を停止します。
すべてのデータがHPE OBRテーブルにロードされるまで待機します。
2. BSMからOMiへのアップグレードプロセスを完了します。
3. [管理コンソール] > [管理] > [デプロイメントマネージャ] ページから、次の手順を実行します。

- a. BPMの古いETLコンポーネント (SynTrans_ETL_BPM) をアンインストールし、新しい (SynTrans_ETL_BPM_OMi10) ETLコンポーネントをインストールします。
 - b. RUMの古いETLコンポーネント (RealUsrTrans_ETL_RUM) をアンインストールし、新しい (RealUsrTrans_ETL_RUM_OMi10) ETLコンポーネントをインストールします。
 - c. 任意の手順として、SiteScopeプロファイルデータベースのETL (SysPerf_ETL_SiS_DB ETL) をアンインストールし、SiteScopeダイレクトAPI (SysPerf_ETL_SiS_API) のETLをインストールします。
4. Postgres DBで次の更新ステートメントを使用して、OMiのRTSMTポロジソースを変更します。

```
update dict_cmdb_ds set hostname='<omi10ホスト名>';
```

ここで<omi10ホスト名>は、OMi10のホスト名です。
 5. [管理コンソール] > [トポロジソース] にログインし、[設定] をクリックして、ユーザー名、パスワード、ポートをOMi 10に合わせて変更します。
 6. [管理コンソール] > [データソース] > [設定] > [BSM/OMi] ページで、OMiのOperationsデータベース接続を追加します。詳細については、「[管理およびプロファイルデータベースの設定](#)」(99ページ)を参照してください。
 7. HI/KPIデータ収集と、任意でSiteScopeを有効にします。
 8. 収集サービスを起動します。

注: アップグレードを実行した後すぐ、収集サービスを起動する前に、HPE OBRでOMiにトポロジソースを設定するようにしてください。そうしないと、OMi 10へのアップグレード後も、HPE OBRはBSMシステムからデータを収集し続けます。この間にBSMで新しいCIが検出され、その新しいCIがHPE OBRにより収集された場合、トポロジがOMi 10に変更された時にHPE OBRで重複と見なされます。このような状況が生じた場合は、DLCを使用して重複を削除してください。

VMware vCenterデプロイメントシナリオのデータソース

VMware vCenterでデータを収集するには、次の手順に従います。

1. [デプロイメントシナリオ] で、[VMware vCenterのみ] をクリックします。

設定ウィザード

設定ウィザード

パラメータの設定 手順5: データソースの選択

Verticaデータベースの作成

管理データベースの作成

コレクターの設定

データソースの選択

トポロジソースの設定

サマリー

Deployment Scenario

HP OM BSM/OMi VMware vCenter only Others

仮想環境パフォーマンス

VMware

ネットワークパフォーマンス

保存 クリア

次へ >>

2. [仮想環境のパフォーマンス] で、[VMware] を選択します。
3. (任意):環境でNNMiおよびNNMi SPI Performanceを利用できる場合は、[ネットワークパフォーマンス] で [ネットワークパフォーマンス] を選択します。
4. [保存] をクリックします。[正常に保存しました] というメッセージが表示されます。
5. [次へ] をクリックします。[トポロジソースの設定] ページが表示されます。

その他の(汎用) データベースデプロイメントシナリオのデータソース

その他のデータベースでデータを収集するには、次の手順に従います。

1. [デプロイメントシナリオ] で、[その他] をクリックします。

設定ウィザード

設定ウィザード

パラメータの設定 手順5: データソースの選択

Verticaデータベースの作成

管理データベースの作成

コレクターの設定

データソースの選択

トポロジソースの設定

サマリー

Deployment Scenario

HP OM BSM/OMi VMware vCenter only Others

ネットワークパフォーマンス

ネットワークパフォーマンス

保存 クリア

次へ >>

2. ネットワーク環境でメトリックを収集するために、[ネットワークパフォーマンス] で [ネットワークパフォーマンス] を選択します。
3. [保存] をクリックします。すべての選択内容のサマリーが表示されます。
4. [次へ] をクリックします。[トポロジソースの設定] ページが表示されます。

タスク6:トポロジソースの設定

データ収集を行うためにHPE OBRを設定するには、トポロジソースを設定する必要があります。

設定ウィザード

設定ウィザード

パラメータの設定

手順6: トポロジソースの設定 (注: 選択したトポロジソースは変更できません。)

トポロジソース

RTSM HP OM VMware vCenter

ホスト名	接続	ステータス	設定
トポロジソースが設定されていません。			

テスト接続

新規作成

保存

次へ >>

トポロジソースの設定作業は、次のカテゴリに編成されます。

- BSMまたはOperations Manager iiにHPE OBRをデプロイした場合は、「[RTSMサービス定義ソースの設定](#)」(51ページ)を参照してください。
- HPOM環境にHPE OBRをデプロイした場合は、「[HPOMサービス定義ソースの設定](#)」(53ページ)を参照してください。
- VMware vCenter環境にHPE OBRをデプロイした場合は、「[vCenterサービス定義の設定](#)」(55ページ)を参照してください。

注: HPE OBRは、構成アイテムをレポート用に固有識別するためにトポロジソースから取得した構成アイテム(CI)の識別子を使用します。特定のCIに対して使用される識別子はトポロジソースごとに異なるため、トポロジソースを変更すると、重複CIが発生する可能性があります。したがって、特定のトポロジソース(RTSM、HPOMまたはVMware vCenter)をいったん設定すると、後で変更することはできません。

インストール後の設定時以外は、[データソース設定] > [トポロジソース] ページでトポロジソースを設定することができます。

RTSMサービス定義ソースの設定

RTSMサービス定義ソースを設定するには、[トポロジソースの設定] ページで次の手順を実行します。

1. [サービス定義ソース] で、[RTSM] をクリックします。
2. [新規作成] をクリックします。[接続パラメータ] セクションが表示されます。
3. [接続パラメータ] で、次の詳細を入力します。

フィールド	説明
ホスト名	BSMまたはOMiサーバーのIPアドレスまたはFQDN。HP BSMインストールが分散している場合は、ゲートウェイサーバーの名前をこのフィールドに入力します。 注: 複数のゲートウェイサーバーとロードバランサーが設定された分散BSMデプロイメントでは、ロードバランサーの仮想IPアドレスをこのフィールドに入力します。
ポート	RTSM Webサービスに照会するためのポート番号。デフォルトのポート番号は80です。 ポート番号が変更されている場合、BSM管理者に詳細を問い合わせてください。
ユーザー名	RTSM Webサービスユーザーの名前。デフォルトのユーザー名はadminです。
パスワード	RTSM Webサービスユーザーのパスワード。
収集ステーション	コレクターをリモートシステムにインストールした場合は、ローカルコレクターまたはリモートコレクターのいずれかを選択できます。 このサービス定義ソースを使用してリモートコレクターを設定するには、ドロップダウンリストから利用可能なリモートシステムのいずれかを選択します。 デフォルトによりHPE OBRシステムにインストールされているコレクターを使用するには、ローカルを選択します。

4. [OK] をクリックします。
5. [保存] をクリックして、設定を保存します。
6. [テスト接続] をクリックします。
7. メッセージボックスで、[はい] をクリックします。[正常に保存しました] というメッセージが情報メッセージパネルに表示されます。

手順2～手順7を実行して、追加のRTSMデータソースを設定できます。

RTSMサービス定義ソースの設定の詳細については、『HPE Operations Bridge Reporter管理者オンラインヘルプ』の「エンタープライズトポロジの管理」セクションを参照してください。

8. [次へ]をクリックして続行します。[サマリー]ページが表示されます。
9. [終了]をクリックして、インストール後の設定タスクを完了します。[デプロイメントマネージャ]ページが表示されます。

RTSMでHTTPSが有効な場合のデータ収集の設定

RTSMでHTTPSが有効になっている場合は、次の手順を実行します。

1. トポロジソースの設定時にRTSMでHTTPSを有効にする際は、ポートを443に設定します。
2. BSM/OMi 10のルートCA証明書を、HPE OBR cacertsトラストストアにインポートします。CA証明書をインポートするには、次の手順を実行します。

• Windowsの場合

```
keytool -import -trustcacerts -keystore C:\HP-SHR\JRE64\lib\security\cacerts -file "<パス付きファイル名>"
```

• Linuxの場合

```
keytool -import -trustcacerts -keystore /opt/HP/BSM/JRE64/lib/security/cacerts -file "<パス付きファイル名>"
```

ここでの<パス付きファイル名>は、BSM/OMiのCA証明書の場所およびファイル名です。

注: パスワードはchangeitです。

3. %PMDB_HOME%\data (**Windowsの場合**) および\$PMDB_HOME/data (**Linuxの場合**)にあるconfig.prpに次のフィールドを追加します。

フィールド	値
ucmdb.protocol	https

サポートされるデータソースの選択

このデプロイメントシナリオでは、次のデータソースをファクトデータの収集用に設定できます。

- 「管理およびプロファイルデータベースの設定」(99ページ)
- 「HP OMiデータソースの設定」(105ページ)
- 「HP Operations Managerデータソースの設定」(93ページ)
- 「HP Operations Agentデータソースの設定」(93ページ)

- 「ネットワークデータソースの設定 (汎用データベースの使用)」(94ページ)
- 「VMware vCenterデータソースの設定」(95ページ)
- 「SiteScopeデータソースの設定」(96ページ)

HPOMサービス定義ソースの設定

HPOMサービス定義ソースを設定するには、[トポロジソースの設定] ページで次の手順を実行します。

1. [サービス定義ソース] で、[HP OM] をクリックします。
2. [新規作成] をクリックします。[接続パラメータ] セクションが表示されます。
3. [接続パラメータ] で、次の詳細を入力します。

注意: 認証にデータベースの方法を使用してHPOMデータベースサーバーに接続している場合は、「openview」データベースのSELECT権限とCONNECT権限を持つユーザーの詳細をここで指定する必要があります。

フィールド	説明
データソースのタイプ	環境で設定されているHPOMのタイプを選択します。オプションには次のものがあります。 HPOM for Windows HPOM for Unix HPOM for Linux HPOM for Solaris
データベースタイプ	選択するデータソースタイプに応じて、データベースタイプが自動的に選択されます。HPOM for Windowsデータソースタイプの場合、データベースタイプはMSSQLです。HPOM for Unix、HPOM for Linux、HPOM for Solarisの場合、データベースタイプはOracleです。
ホスト名	HPOMデータベースサーバーのIPアドレスまたは完全修飾ドメイン名 (FQDN)。HPOMデータベースがリモートシステム上で設定されている場合は、リモートシステムのマシン名をここで入力する必要があります。データベースタイプがOracleで、Oracle RACの管理DBが選択されている場合、ホスト名は表示されません。
データベースインスタンス	データソース内のデータベースインスタンスのシステム識別子 (SID)。デフォルトのデータベースインスタンスはOVOPSです。MSSQLがデフォルト (名前未設定) のデータベースイン

フィールド	説明
	スタンスを使用するように設定されている場合は、このフィールドを空白のままにしておきます。
ポート	HPOMデータベースサーバーに照会するためのポート番号。 OVOPSなどの、データベースインスタンスのポート番号をチェックするには、「 HPOMサーバーのポート番号のチェック 」(83ページ)を参照してください。
Windows認証	HPOMデータベースにアクセスするためのWindows認証を有効にするためのオプション。ユーザーは、データベースをホスティングしているWindowsシステムのアクセス資格情報と同じ情報を使用してHPOMIにアクセスすることができます。このオプションは、データソースタイプとしてHPOM for Windowsが選択された場合にのみ表示されます。
ユーザー名	HPOMデータベースユーザーの名前。HPOM for Windowsデータソースタイプの場合に、[Windows認証] オプションを選択すると、このフィールドは無効になって空になります。
パスワード	HPOMデータベースユーザーのパスワード。HPOM for Windowsデータソースタイプの場合に、[Windows認証] オプションを選択すると、このフィールドは無効になって空になります。
収集ステーション	コレクターをリモートシステムにインストールした場合は、ローカルコレクターまたはリモートコレクターのいずれかを選択できます。 このサービス定義ソースを使用してリモートコレクターを設定するには、ドロップダウンリストから利用可能なリモートシステムのいずれかを選択します。 デフォルトによりHPE OBRシステムにインストールされているコレクターを使用するには、ローカルを選択します。

4. **[OK]** をクリックします。
5. **[保存]** をクリックして、設定を保存します。
6. **[テスト接続]** をクリックします。
7. メッセージボックスで、**[はい]** をクリックします。[正常に保存しました] というメッセージが情報メッセージパネルに表示されます。

手順2～手順7を実行して、追加のHPOMデータソースを設定できます。

HPOMサービス定義ソースの設定の詳細については、『HPE Operations Bridge Reporter管理者オンラインヘルプ』の「エンタープライズトポロジの管理」セクションを参照してください。

注: 非ドメインホストからデータを収集するには、そのようなホストに対してHPOM管理者が適切なDNS解決を行うことにより、ドメインにインストールされているHPE OBRからそのホストに到達できるようにする必要があります。

8. [次へ]をクリックして続行します。[サマリー]ページが表示されます。
9. [終了]をクリックして、インストール後の設定タスクを完了します。[デプロイメントマネージャ]ページが表示されます。

サポートされるデータソースの選択

このデプロイメントシナリオでは、次のデータソースをファクトデータの収集用に設定できます。

- 「HP Operations Managerデータソースの設定」(93ページ)
- 「HP Operations Agentデータソースの設定」(93ページ)
- 「ネットワークデータソースの設定 (汎用データベースの使用)」(94ページ)
- 「VMware vCenterデータソースの設定」(95ページ)

vCenterサービス定義の設定

vCenterサービス定義を設定するには、[トポロジソースの設定]ページで次の手順を実行します。

1. [サービス定義ソース]で、[VMware vCenter]をクリックします。
2. [新規作成]をクリックします。[接続パラメータ]セクションが表示されます。
3. [接続パラメータ]で、次の詳細を入力します。

フィールド	説明
ホスト名	vCenterサーバーのIPアドレスまたはFQDN。
ユーザー名	vCenter Webサービスユーザーの名前。デフォルトのユーザー名は、administration@vsphere.localです。
パスワード	vCenter Webサービスユーザーのパスワード。
収集ステーション	コレクターをリモートシステムにインストールした場合は、ローカルコレクターまたはリモートコレクターのいずれかを選択できます。 このサービス定義ソースを使用してリモートコレクターを設定するには、ドロップダウンリストから利用可能なリモートシス

フィールド	説明
	<p>テムのいずれかを選択します。</p> <p>デフォルトによりHPE OBRシステムにインストールされているコレクターを使用するには、ローカルを選択します。</p>

4. **[OK]** をクリックします。
5. **[保存]** をクリックして、設定を保存します。
6. **[テスト接続]** をクリックします。
7. メッセージボックスで、**[はい]** をクリックします。**[正常に保存しました]** というメッセージが情報メッセージパネルに表示されます。

手順2～手順7を実行して、追加のvCenterデータソースを設定できます。

8. **[次へ]** をクリックして続行します。**[サマリー]** ページが表示されます。
9. **[終了]** をクリックして、インストール後の設定タスクを完了します。**[デプロイメントマネージャ]** ページが表示されます。

コレクターサービスの再起動

サービス定義でリモートコレクターを設定した場合は、コンテンツパックをインストールした後にコレクターシステムでコレクターサービスを再起動します。

サービスを手動で再起動するには、次の手順を実行します。

Windowsの場合:

- [サービス] ウィンドウで、**HPE_PMDB_Platform_Collection**サービスを右クリックし、**[再起動]** をクリックします。

Linuxの場合:

- /etc/init.dディレクトリに移動し、次のコマンドを実行します。

```
service HPE_PMDB_Platform_Collection -restart
```

サポートされるデータソースの選択

このデプロイメントシナリオでは、次のデータソースをファクトデータの収集用に設定できます。

- [「ネットワークデータソースの設定 \(汎用データベースの使用\)」\(94ページ\)](#)
- [「VMware vCenterデータソースの設定」\(95ページ\)](#)

タスク7:サマリー

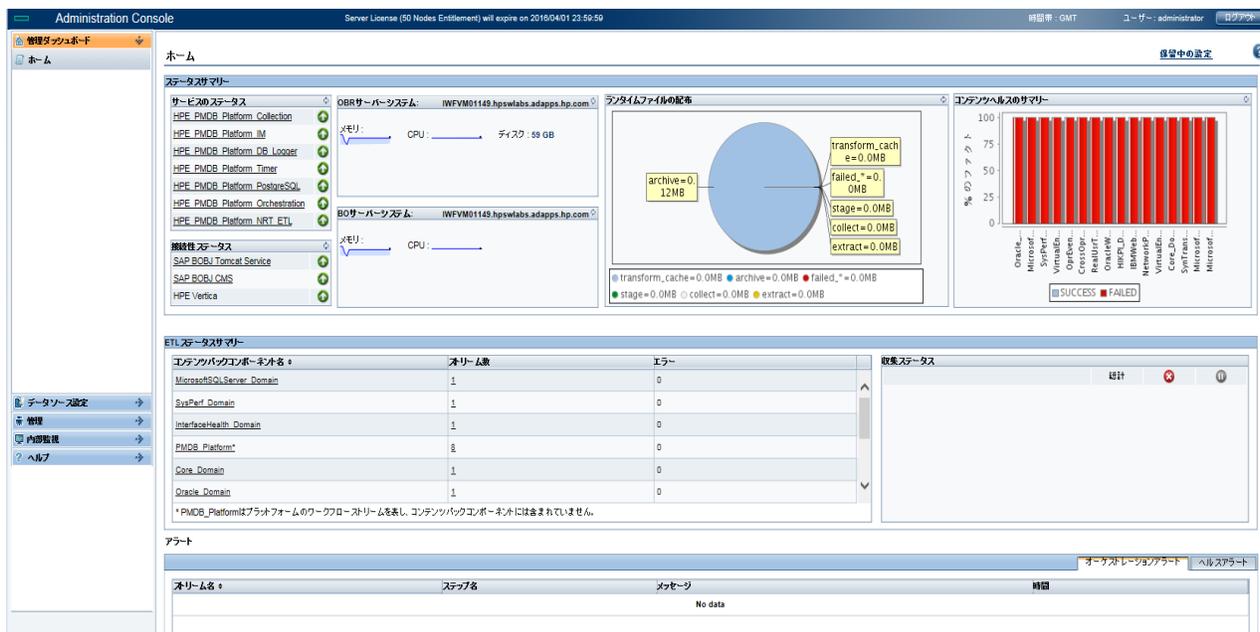
[サマリー] ページには、選択したすべての項目のサマリーが表示されます。**[完了]** をクリックします。

設定ガイド

第2章:ガイド付き設定またはインストール後の設定



[デプロイメントマネージャ] ページに、**データソース設定**での選択に基づいて選択されたコンテンツパックが表示されます。



第3章:BSM/OMiデプロイメントシナリオのためのOBRの設定

BSMまたはOMiインストールと連携するようにOBRを設定する場合は、次の項目を確認する必要があります。

- BSM/OMiが正常にインストールされ、設定されていること
- OMiおよび管理パックの監視自動化コンポーネントを使用してシステムおよびアプリケーションを監視している場合は、必要な管理パックポリシーがデプロイされていること
- 基盤となるHPOMサーバーおよびスマートプラグイン (SPI) を使用してシステムおよびアプリケーションを監視している場合は、必要なSPIポリシーがデプロイされていること
- 必要なOMiビューがデプロイされていること[HPE OBRのRTSMトポロジソースの設定](#)を参照してください。

HPE OBRのRTSMトポロジソースの設定

RTSMはOBRのトポロジ情報のソースです。トポロジ情報には、RTSMにおいてモデル化されて検出されるすべてのCIが含まれます。ノードリソース情報は、HP Operations AgentおよびHP SiteScopeから直接取得されます。

注: ノードリソースは、HP Operations AgentおよびHP SiteScopeのローカルディメンションです。

管理パックの前提条件

OMi10データソースからデータを収集する次のHPE OBRコンテンツパックのレポートを表示するには、対応する管理パックがインストールされている必要があります。

- Microsoft Active Directory
- Microsoft Exchange
- Microsoft SQL Server
- Oracle
- Oracle WebLogic
- IBM WebSphere
- システムインフラストラクチャ
- 仮想化インフラストラクチャ

これらの管理パックのインストールは、Service HealthおよびOMiのHPE OBRレポートを表示する場合にも必須です。

HP BSM環境では、RTSMを使用してCIが検出され、トポロジビューが作成されます。ドメイン固有のデータを収集するようにOBRを設定するには、まずコンテンツパックごとにそのようなトポロジビューをデプロイする必要があります。

そのトポロジビューには、コンテンツパックが関連データを収集するのに使用する個々のCI属性が備えられています。ただし、このトポロジビューは、コンテンツパックごとに異なる可能性があります。

たとえば、Exchange Serverコンテンツパックでは、Exchange Server、メールボックスサーバー、メールボックスおよびパブリックフォルダストアなどを一覧表示するトポロジビューが必要になることがあります。ただし、システム管理コンテンツパックでは、すべてのビジネスアプリケーション、ビジネスサービス、およびインフラストラクチャ内のCPU、メモリ、ディスクなどのシステムリソースを一覧表示する別のトポロジビューが必要になる可能性があります。これらのビューに基づいて、各コンテンツパックのCI属性はそれぞれ異なる可能性があります。

コンテンツパックとデプロイするトポロジビューのリスト

Windowsの場合:

コンテンツパック	ビュー名	場所
BPM (合成トランザクションモニタリング)	EUM_BSMR.zip (BSMのみ) EUM_OMi.zip (OMi 10のみ)	%PMDB_HOME%\packages\EndUserManagement\ETL_BPM.ap\source\cmdb_views %PMDB_HOME%\packages\EndUserManagement\ETL_BPM_OMi.ap\source\cmdb_views 注: デプロイメントシナリオがBSMの場合は、BSMサーバーにEUM_BSMR.zipビューのみをデプロイします。 デプロイメントシナリオがOMi 10の場合は、OMi 10サーバーにEUM_OMi.zipビューのみをデプロイします。
Real User Transaction Monitoring	EUM_BSMR.zip (BSMのみ) EUM_OMi.zip (OMi 10のみ)	%PMDB_HOME%\packages\EndUserManagement\ETL_RUM.ap\source\cmdb_views %PMDB_

コンテンツ パック	ビュー名	場所
		<p>HOME%\packages\EndUserManagement\ETL_RUM_OMi.ap\source\cmdb_views</p> <p>注: デプロイメントシナリオがBSMの場合は、BSMサーバーにEUM_BSMR.zipビューのみをデプロイします。</p> <p>デプロイメントシナリオがOMi 10の場合は、OMi 10サーバーにEUM_OMi.zipビューのみをデプロイします。</p>
Network Performance	SHR_Network_Views.zip	%PMDB_HOME%\packages\Network\ETL_Network_NPS92_RTSM.ap\source\cmdb_views
Network Component Health	ビューなし	
Network Interface Health	ビューなし	
System Performance	SM_BSM9_Views.zip	%PMDB_HOME%\packages\SystemManagement\ETL_SystemManagement_PA.ap\source\cmdb_views
Oracle	SHR_DBOracle_Views.zip SHR_DBOracle_OM.zip	%PMDB_HOME%\packages\DatabaseOracle\ETL_DBOracle_DBSPI.ap\source\cmdb_views
Oracle WebLogic Server	J2EEApplication.zip J2EEApplication_OM.zip	<p>OM/SPIの場合 :%PMDB_HOME%\packages\ApplicationServer\ETL_AppSrvrWLS_WLSSPI.ap\source\cmdb_views</p> <p>OMi/MPの場合 :%PMDB_HOME%\packages\ApplicationServer\ETL_AppSrvrWLS_WLSMP.ap\source\cmdb_views</p>

コンテンツ パック	ビュー名	場所
IBM WebSphere Application Server	J2EEApplication.zip J2EEApplication_OM.zip	OM/SPIの場合 :%PMDB_ HOME%\packages\ApplicationServer\ETL_AppSrvrWBS_WBSSPI.ap\source\cmdb_views OMi/MPの場合 :%PMDB_ HOME%\packages\ApplicationServer\ETL_AppSrvrWBS_WBSMP.ap\source\cmdb_views
Microsoft SQL Server	SHR_DBMSSQL_Views.zip SHR_DBMSSQL_OM.zip	%PMDB_ HOME%\packages\DatabaseMSSQL\ETL_DBMSSQL_DBSPI.ap\source\cmdb_views
Microsoft Exchange Server	SHR_Exchange_Business_View.zip SHR_Exchange_OM.zip	Exchange Server 2007: %PMDB_ HOME%\packages\ExchangeServer\ETL_Exchange_Server2007.ap\source\cmdb_views Exchange Server 2010: %PMDB_ HOME%\packages\ExchangeServer\ETL_Exchange_Server2010.ap\source\cmdb_views Exchange Server 2013: %PMDB_ HOME%\packages\ExchangeServer\ETL_Exchange_Server2013.ap\source\cmdb_views
Microsoft Active Directory	SHR_AD_Business_View.zip SHR_ActiveDirectory_OM.zip	%PMDB_ HOME%\packages\ActiveDirectory\ETL_AD_ADSPi.ap\source\cmdb_views
Virtual Environmen	SM_BSM9_Views.zip	%PMDB_ HOME%\packages\SystemManagement\ET

コンテンツパック	ビュー名	場所
t Performance		L_SystemManagement_PA.ap\source\cldb_views
状況と主要パフォーマンス指標 (サービス状況)	すべてのビュー	
HPSA		%PMDB_HOME%\packages\HPSA\HPSA_ETL.ap\source\cldb_views
Cross-Domain Operations Events	すべてのビュー	
Operations Events	ビューなし	

Linuxの場合:

コンテンツパック	ビュー名	場所
BPM (合成トランザクションモニタリング)	EUM_BSMR.zip (BSMのみ) EUM_OMi.zip (OMi 10のみ)	<p>ビジネスビュー: \$PMDB_HOME/packages/EndUserManagement/ETL_BPM.ap/source/cldb_views</p> <p>OMビュー: \$PMDB_HOME/packages/EndUserManagement/ETL_BPM_OMi.ap/source/cldb_views</p> <p>注: デプロイメントシナリオがBSMの場合は、BSMサーバーにEUM_BSMR.zipビューのみをデプロイします。</p> <p>デプロイメントシナリオがOMi 10の場合は、OMi 10サーバーにEUM_OMi.zipビューのみをデプロイします。</p>
Real User Transaction	EUM_BSMR.zip (BSMのみ)	ビジネスビュー: \$PMDB_HOME/packages/EndUserManagement/ETL_BPM.ap/source/cldb_views

コンテンツパック	ビュー名	場所
Monitoring	EUM_OMi.zip (OMi 10のみ)	L_RUM_OMi.ap/source/cmdb_views OMビュー: \$PMDB_HOME/packages/EndUserManagement/ETL_RUM_OMi.ap/source/cmdb_views 注: デプロイメントシナリオがBSMの場合は、BSMサーバーにEUM_BSMR.zipビューのみをデプロイします。 デプロイメントシナリオがOMi 10の場合は、OMi 10サーバーにEUM_OMi.zipビューのみをデプロイします。
Network Performance	SHR_Network_Views.zip	\$PMDB_HOME/packages/Network/ETL_Network_NPS92_RTSM.ap/source/cmdb_views
Network Component Health	ビューなし	
Network Interface Health	ビューなし	
System Performance	SM_BSM9_Views.zip	\$PMDB_HOME/packages/SystemManagement/ETL_SystemManagement_PA.ap/source/cmdb_views
Oracle	SHR_DBOracle_Views.zip SHR_DBOracle_OM.zip	\$PMDB_HOME/packages/DatabaseOracle/ETL_DBOracle_DBSPI.ap/source/cmdb_views
Oracle WebLogic Server	J2EEApplication.zip J2EEApplication_OM.zip	OM/SPIの場合: \$PMDB_HOME/packages/ApplicationServer/ETL_AppSrvrWLS_WLSSPI.ap/source/cmdb_views OMi/MPの場合: \$PMDB_

コンテンツパック	ビュー名	場所
		HOME/packages/ApplicationServer/ETL_AppSrvrWLS_WLSMP.ap/source/cmdb_views
IBM WebSphere Application Server	J2EEApplication.zip J2EEApplication_OM.zip	OM/SPIの場合 :\$PMDB_HOME/packages/ApplicationServer/ETL_AppSrvrWBS_WBSPI.ap/source/cmdb_views OMi/MPの場合 :\$PMDB_HOME/packages/ApplicationServer/ETL_AppSrvrWBS_WBSMP.ap/source/cmdb_views
Microsoft SQL Server	SHR_DBMSSQL_Views.zip SHR_DBMSSQL_OM.zip	\$PMDB_HOME/packages/DatabaseMSSQL/ETL_DBMSSQL_DBSPI.ap/source/cmdb_views
Microsoft Exchange Server	SHR_Exchange_Business_View.zip SHR_Exchange_OM.zip	Exchange Server 2007: \$PMDB_HOME/packages/ExchangeServer/ETL_Exchange_Server2007.ap/source/cmdb_views Exchange Server 2010: \$PMDB_HOME/packages/ExchangeServer/ETL_Exchange_Server2010.ap/source/cmdb_views Exchange Server 2013: \$PMDB_HOME/packages/ExchangeServer/ETL_Exchange_Server2013.ap/source/cmdb_views
Microsoft Active Directory	SHR_AD_Business_View.zip SHR_ActiveDirectory_	\$PMDB_HOME/packages/ActiveDirectory/ETL_AD_ADSPI.ap/source/cmdb_views

コンテンツパック	ビュー名	場所
	OM.zip	
Virtual Environment Performance	SM_BSM9_Views.zip	\$PMDB_HOME/packages/SystemManagement/ETL_SystemManagement_PA.ap/source/cmdb_views
状況と主要パフォーマンス指標 (サービス状況)	すべてのビュー	
HPSA		\$PMDB_HOME/packages/HPSA/HPSA_ETL.ap/source/cmdb_views
Cross-Domain Operations Events	すべてのビュー	
Operations Events	ビューなし	

HP BSMサーバー

HP BSMサーバーでのコンテンツパック用のトポロジモデルビューをデプロイするには、次の手順を実行します。

1. Webブラウザで、以下のURLを入力します。

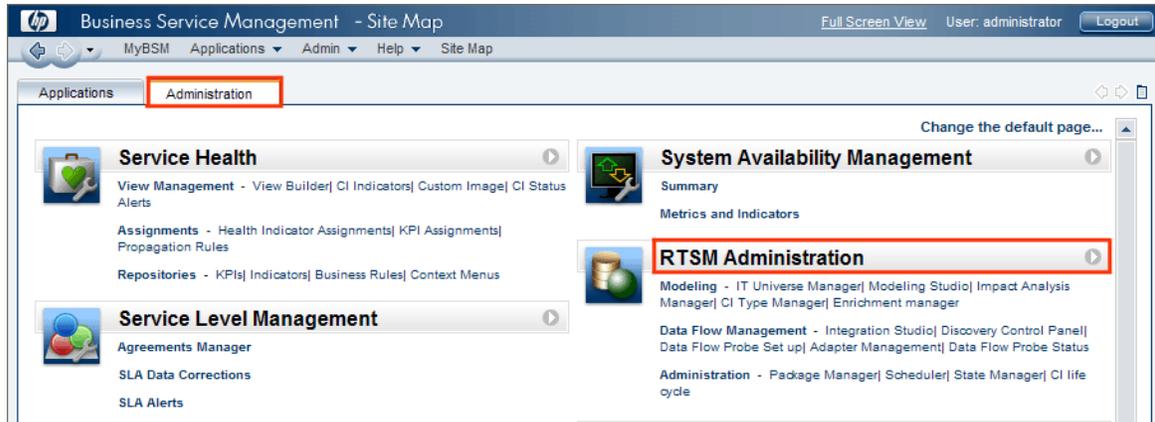
`http://<BSMシステムのFQDN>/bsm`

ここで、<BSMシステムのFQDN> は、HP BSMサーバーのFQDNです。

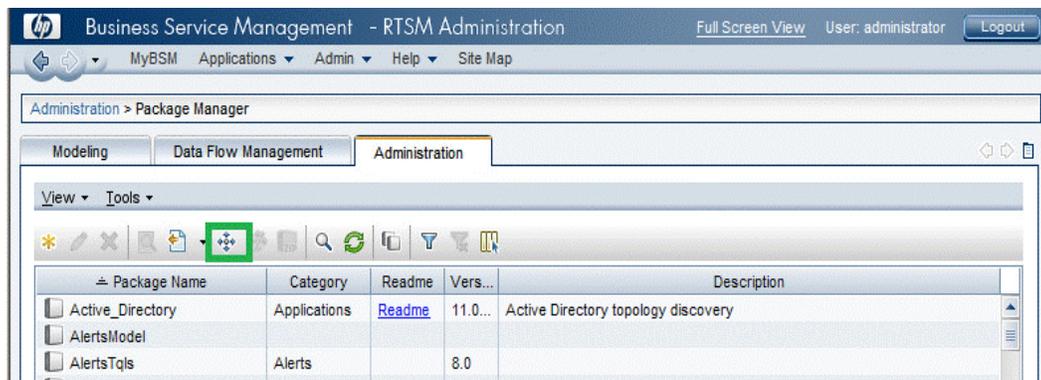
注: HP BSMサーバーは、HPE OBRがインストールされているシステムまたはその他のローカルシステムから起動できます。ローカルシステムから起動する場合は、必ず「[コンテンツパックとデプロイするトポロジビューのリスト](#)」に記載されている場所を参照し、必要なビューをローカルシステムにコピーするようにしてください。

[Business Service Managementのログイン] ページが表示されます。

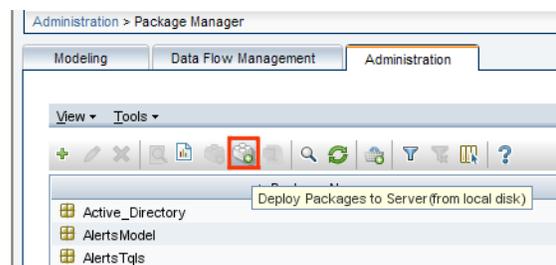
2. ログイン名とパスワードを入力し、[ログイン] をクリックします。[Business Service Management - サイトマップ] が表示されます。
3. [管理] > [RTSM管理] をクリックします。[RTSM管理] ページが表示されます。



4. [管理] > [パッケージマネージャ] をクリックします。[パッケージマネージャ] ページが表示されます。



5. [サーバーにパッケージをデプロイする (ローカルディスクから)] アイコンをクリックします。[サーバーにパッケージをデプロイ] ダイアログボックスが表示されます。



6. [追加] アイコンをクリックします。



[サーバーにパッケージをデプロイする (ローカルディスクから)] ダイアログボックスが表示されます。

7. コンテンツパックzipファイルの場所に移動し、目的のファイルを選択してから、[開く] をクリックします。

[サーバーにパッケージをデプロイする (ローカルディスクから)] ダイアログボックスの [デプロイするリソースを選択] の下で、デプロイするTQLビューおよびODBビューを表示および選択することができます。すべてのファイルを選択したことを確認します。

8. [デプロイ] をクリックし、コンテンツパックビューをデプロイします。

HPE OBRに対して選択したタイプのデプロイメントシナリオに基づいて、コンテンツパックのデプロイが正常に完了しました。

HP OMi 10サーバー

HP OMi 10サーバーでのコンテンツパック用のトポロジモデルビューをデプロイするには、次の手順を実行します。

1. Webブラウザで、以下のURLを入力します。

`http://<OMiシステムのFQDN>/omi`

ここでの <OMiシステムのFQDN> は、HP BSMサーバーのFQDNです。

注: HP OMiサーバーは、HPE OBRがインストールされているシステムまたはその他のローカルシステムから起動できます。ローカルシステムから起動する場合は、必ず「[コンテンツパックとデプロイするトポロジビューのリスト](#)」に記載されている場所を参照し、必要なビューをローカルシステムにコピーするようにしてください。

[Operations Manager iログイン] ページが表示されます。

2. ログイン名とパスワードを入力し、[ログイン] をクリックします。[Operations Manager iワークスペース] ページが表示されます。
3. [管理] > [RTSM管理] > [パッケージマネージャ] をクリックします。

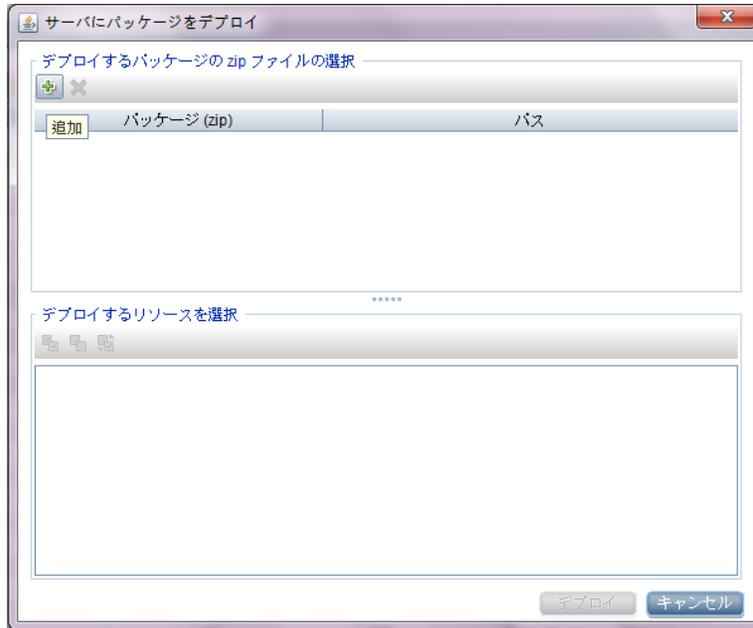


[パッケージマネージャ] ページが表示されます。

4. [サーバーにパッケージをデプロイする (ローカルディスクから)] アイコンをクリックします。[サーバーにパッケージをデプロイ] ダイアログボックスが表示されます。



5. [追加] アイコンをクリックします。



[**サーバーにパッケージをデプロイする (ローカルディスクから)**] ダイアログボックスが表示されます。

6. コンテンツパックzipファイルの場所へ移動し、目的のファイルを選択してから、[開く] をクリックします。

[**サーバーにパッケージをデプロイする (ローカルディスクから)**] ダイアログボックスの [デプロイするリソースを選択] の下で、デプロイするTQLビューおよびODBビューを表示および選択することができます。すべてのファイルを選択したことを確認します。

7. [デプロイ] をクリックし、コンテンツパックビューをデプロイします。

HPE OBRに対して選択したタイプのデプロイメントシナリオに基づいて、コンテンツパックのデプロイが正常に完了しました。

コンテンツパックのCI属性の有効化

注: OMi 10環境でコンテンツパックのCI属性を有効化する場合も、このセクションで説明する設定手順に従ってください。ただし、その場合はBSMサーバーの代わりにOMiサーバーの詳細を使用します。

どのコンテンツパックビューにも、そのコンテンツパックに固有のCI属性のリストが備えられています。データ収集に必要なCI属性は、デプロイ後の各コンテンツパックビューにおいて自動的に有効になります。

ビジネスニーズに関連した追加情報を収集するための追加のCI属性を有効にするには、次の手順を実行します。

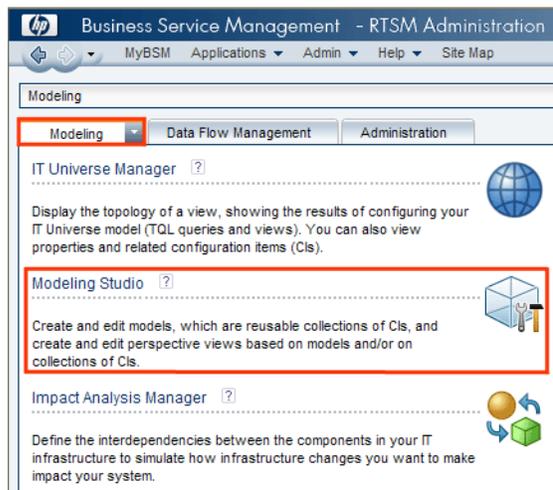
1. Webブラウザで、以下のURLを入力します。

`http://<サーバー名>.<ドメイン名>/HPBSM`

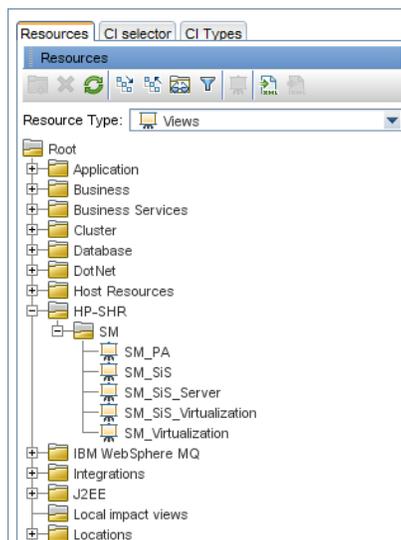
ここでの<サーバー名>は、HP BSMサーバーの名前、<ドメイン名>は、ユーザーネットワーク設定に基づくユーザーのドメインの名前です。

[Business Service Managementのログイン] ページが表示されます。

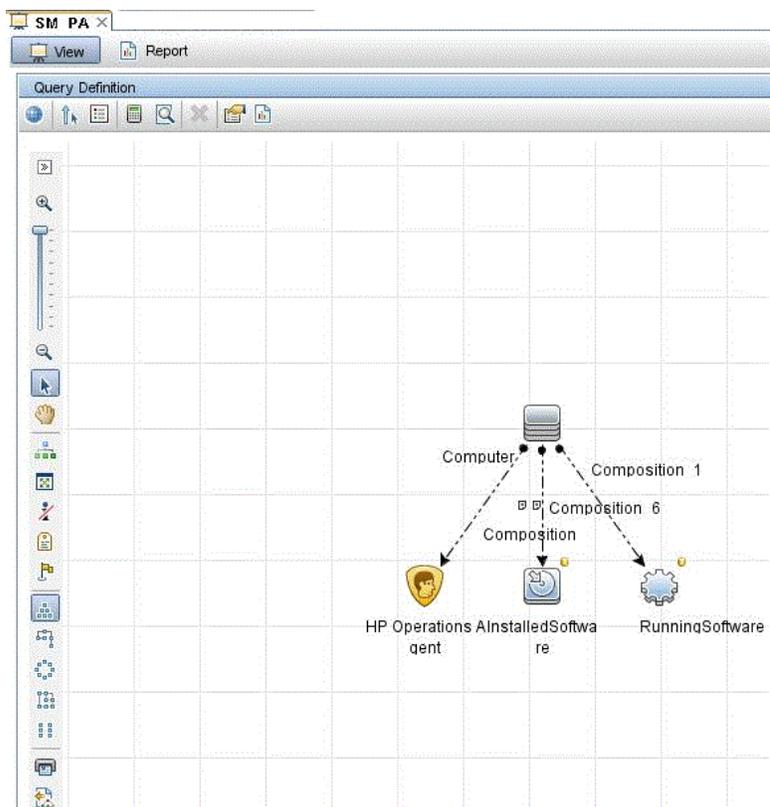
2. ログイン名とパスワードを入力し、[ログイン] をクリックします。[Business Service Management - サイトマップ] が表示されます。
3. [管理] > [RTSM管理] をクリックします。[RTSM管理] ページが表示されます。
4. [モデリング] -> [モデリング スタジオ] をクリックします。[モデリング スタジオ] ページが表示されます。



5. [リソース] ペインで、[HP-OBR] を展開し、コンテンツパックのフォルダーを展開して、トポロジビューをダブルクリックして開きます。

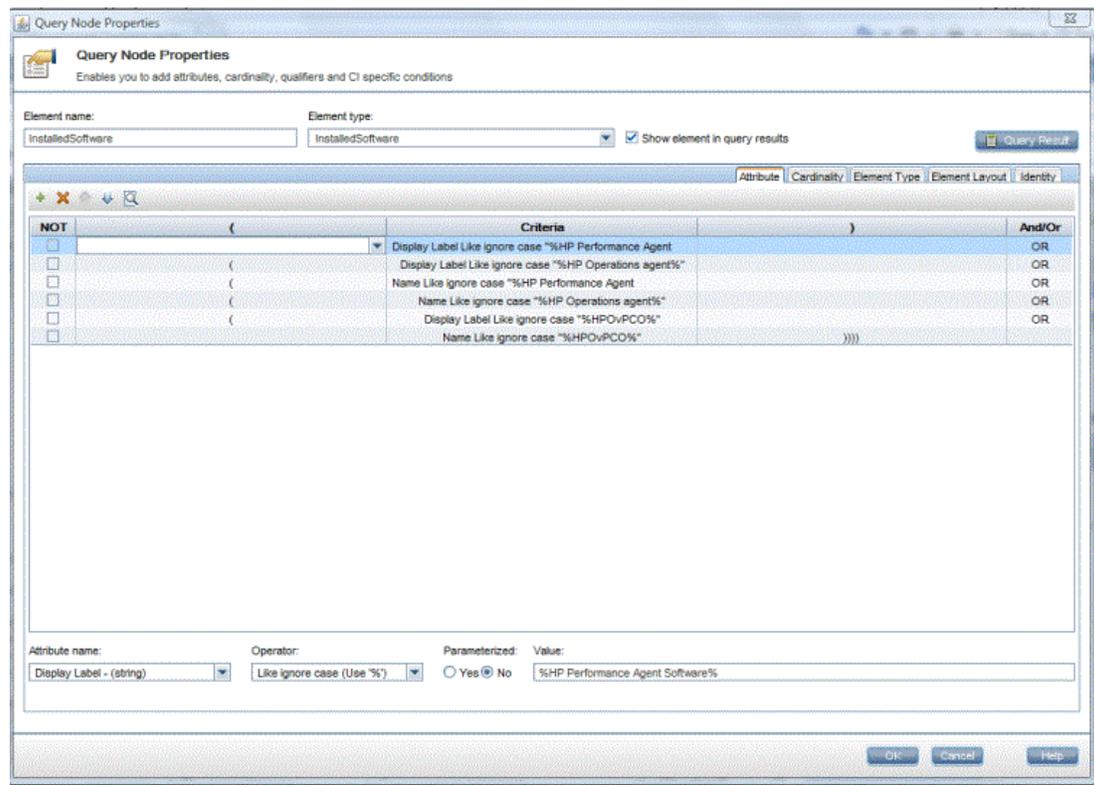


6. [トポロジ] ペインで、トポロジ図内の任意のノードを右クリックしてから [クエリノードのプロパティ] をクリックして、選択したノードのCI属性のリストを表示します。



[クエリノードプロパティ] ダイアログボックスが表示されます。

7. [属性] をクリックします。有効化する属性を選択してから [OK] をクリックします。



OBRとの統合のためのSiteScopeの設定

HP SiteScopeは、サーバー、オペレーティングシステム、ネットワークデバイス、ネットワークサービス、アプリケーション、アプリケーションコンポーネントなどの分散ITインフラストラクチャの可用性とパフォーマンスを確保するよう設計されたエージェント不要の監視ソリューションです。

OBRがSiteScopeから物理ノードのデータを収集するには、最初にSiteScopeでモニターを作成する必要があります。モニターは、エンタープライズビジネスシステムで使用されている各種のシステムとアプリケーションに自動的に接続して問い合わせを行うツールです。このモニターは、環境内にあるさまざまなITコンポーネントに関するデータを収集し、CPU使用率、メモリ使用率など、OBRが使用する特定のメトリックにマップされます。モニターを作成したら、SiteScopeがHP Operations Agent/BSMプロファイルデータベースでデータのログを記録して、エージェントから必要なデータをOBRが収集できるようにする必要があります。このタスクは、SiteScopeを環境内にインストールした場合にのみ実行してください。そうでない場合は、次のタスクに進みます。

SiteScopeに作成するモニター(カウンターおよび測定を含む)のリストについては、「[付録 AHPE OBRのSiteScopeモニター](#)」(180ページ)を参照してください。

SiteScopeにモニターを作成する方法の詳細については、『[SiteScopeの使用](#)』および『[Monitor Reference](#)』ガイドを参照してください。このドキュメントは、以下のURLに用意されています。

<http://support.openview.hp.com/selfsolve/manuals>

SiteScopeモニターによって収集されたトポロジデータをBSMに転送するには、SiteScopeとBSM間の統合を有効にします。BSMとのSiteScopeの統合の詳細は、『[SiteScopeの使用](#)』ガイドの「[Business Service Management \(BSM\) との連携](#)」を参照してください。

デプロイメントシナリオがHP BSMの場合は、「[管理およびプロファイルデータベースのデータソースの設定](#)」、または「[SiteScopeデータソースの設定](#)」の手順を使用して、SiteScopeをHPE OBRに統合することができます。

デプロイメントシナリオがOMi10の場合は、「[SiteScopeデータソースの設定](#)」の手順を使用して、SiteScopeをHPE OBRに統合することができます。

SysPerf_ETL_SiSは廃止されています。SysPref_ETL_SiS_DBがすでにインストールされている場合は、次の手順に従ってSiteScopeをOBRに統合してください。

1. HPE OBRがインストールされているホストシステムに管理者としてログオンします。
2. SiteScopeアドレスをWebブラウザーに入力することにより、SiteScopeにアクセスします。デフォルトのアドレスは、<http://<SiteScopeホスト名>:<ポート番号>/SiteScope>です。
3. データのログ記録のためにSiteScopeをHP Operations Agentに統合できるようにします。詳細については、『[SiteScopeの使用](#)』ガイドの「[HP Operations Agentを使用したOperations ManagerとBSMでの作業](#)」を参照してください。
4. モニター数と、HP Operations Agentの統合システムにデータを取り込む頻度を設定します。デフォルトのSiteScope設定で数千のモニターの実行は可能ですが、SiteScope-

HPOMのメトリックの統合において保存できるモニターの最大数、メトリック、およびモニタータイプの計画を立てるには、サイズ設定が重要です。詳細については、『SiteScopeの使用』ガイドの「SiteScope-Operations Manager測定値統合のサイズ設定の推奨事項」を参照してください。

サービス定義でリモートコレクターを設定した場合は、コンテンツパックをインストールした後にコレクターシステムでコレクターサービスを再起動します。

Windows上でサービスを手動で再起動するには、次の手順を実行します。

1. [サービス] ウィンドウで、**HPE_PMDB_Platform_Collection**サービスを右クリックし、[再開]をクリックします。

Linux上でサービスを手動で再起動するには、次の手順を実行します。

1. /etc/init.dディレクトリに移動し、次のコマンドを実行します。
`service HPE_PMDB_Platform_Collection --full-restart`

第4章:HPOMデプロイメントシナリオのためのOBRの設定

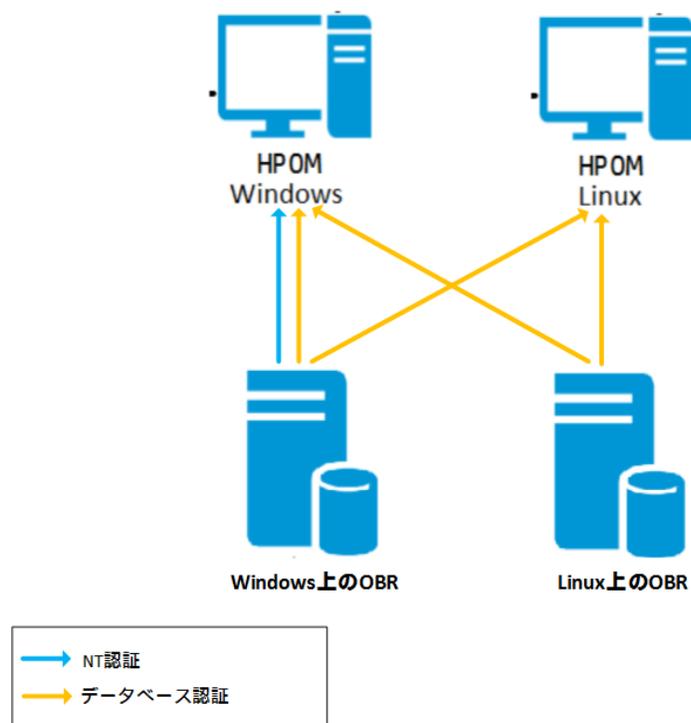
HPOMインストールと連携するようにOBRを設定する場合は、次の項目を確認する必要があります。

- HPOMの正常なインストールと設定
- 必要なSPIポリシーのデプロイ

HPE OBRのHPOM接続用の認証

HPE OBRは、HPOMに接続してデータを収集します。HPE OBRがHPOMに接続するための認証方法には、NT認証とデータベース認証の2つがあります。

HPE OBRとHPOMがWindowsにインストールされている場合は、NT認証とデータベース認証の両方がサポートされます。その他のすべてのデプロイメントシナリオでは、データベース認証のみがサポートされます。



NT認証を使用したHPE OBRのHPOM接続

OBRがドメインの一部であるシステムにインストールされている場合や管理者権限 (例: DOMAIN\Administrator) を持つローカルユーザーまたはドメインユーザーとしてそのようなシステムにログインしている場合、HP PMDB Platform AdministratorおよびHP PMDB Platform Collectionサービスを開始します。HPOMサービス定義ソース接続を設定する前に、ドメインのサービスを設定する必要があります。

タスク1:ドメインのHP PMDB Platform Administratorサービスの設定

1. [スタート]>[ファイル名を指定して実行]をクリックします。[ファイル名を指定して実行]ダイアログボックスが表示されます。
2. [名前]フィールドにservices.mscと入力し、Enterキーを押します。[サービス]ウィンドウが表示されます。
3. 右側のペインで、HPE_PMDB_Platform_Administratorを右クリックし、[停止]をクリックします。
4. HPE_PMDB_Platform_Administratorを右クリックし、[プロパティ]をクリックします。[OBR Serviceのプロパティ]ダイアログボックスが開きます。
5. [ログオン]タブで、[アカウント]を選択します。
6. フィールドにDOMAIN\Administratorと入力します (ここで、管理者は管理者権限を持つローカルユーザーです)。
7. ユーザーパスワードを[パスワード]フィールドに入力します。
8. パスワードを[パスワードの確認入力]フィールドに再度入力します。
9. [適用]をクリックし、[OK]をクリックします。
10. 右側のペインで、HPE_PMDB_Platform_Administratorを右クリックし、[開始]をクリックします。

タスク2:ドメインのHPE_PMDB_Platform_Collectionサービスの設定

1. [スタート]>[ファイル名を指定して実行]をクリックします。[ファイル名を指定して実行]ダイアログボックスが表示されます。
2. [名前]フィールドにservices.mscと入力し、Enterキーを押します。[サービス]ウィンドウが表示されます。
3. 右側のペインで、HPE_PMDB_Platform_Collection_Serviceを右クリックし、[停止]をクリックします。
4. HPE_PMDB_Platform_Collection_Serviceを右クリックし、[プロパティ]をクリックします。[OBR Collection Serviceのプロパティ]ダイアログボックスが開きます。
5. [ログオン]タブで[アカウント]を選択します。
6. フィールドにDOMAIN\Administratorと入力します (ここで、管理者は管理者権限を持つローカルユーザーです)。
7. ユーザーパスワードを[パスワード]フィールドに入力します。

8. パスワードを[パスワードの確認入力]フィールドに再度入力します。
9. [適用]をクリックし、[OK]をクリックします。
10. 右のペインで、**HPE_PMDB_Platform_Collection_Service**を右クリックし、[開始]をクリックします。

設定手順を実行し終わったら、HPOMサービス定義接続の設定に進みます。

データベース認証を使用したHPE OBRのHPOM接続

データベースのユーザーアカウントの作成方法は、HPOM環境でMicrosoft SQL Serverがどのように設定されているかと、HPOMデータベースサーバーと通信するためにOBRをどのように設定するかによって異なります。選択できるシナリオには次の2つがあります。

- **シナリオ1:**HPOM for Windows 8.xまたは9.xが1つのシステムにインストールされ、Microsoft SQL Server 2005またはMicrosoft SQL Server 2008は同一システムまたはリモートシステムにインストールされます。別のシステムにインストールされているOBRは、Windows認証またはSQL Server認証(混合モード認証)を介してSQL Serverに接続するように設定できます。SQL Serverに定義されている認証方法をOBRで使用して、HPOMデータベース接続を設定できます。
- **シナリオ2:**HPOM for Windows 8.xは、デフォルトで組み込まれているMicrosoft SQL Server 2005 Express Editionを使用します。同様に、HPOM for Windows 9.xも、デフォルトで組み込まれているMicrosoft SQL Server 2008 Express Editionを使用します。このシナリオにおける認証モードは、Windows NT認証です。ただし、その場合、SQL ServerとOBR間のリモート接続は可能ではありません。したがって、このシナリオで混合モード認証が可能になるよう、OBR用のユーザーアカウントを作成する必要があります。

そのユーザーアカウントを作成する前に、まず混合モード認証を使用可能にする必要があります。混合モード認証を使用可能にする手順については、次のURLを参照してください。

<http://support.microsoft.com>

組み込みのMicrosoft SQL Server 2005を使ってHPOMシステム上で認証用のユーザー名とパスワードを作成するには、次の手順を実行します。

タスク1:ユーザー名とパスワードの作成

1. 組み込みのMicrosoft SQL Server 2005を使ってHPOMシステムにログオンします。
2. [スタート] > [プログラム] > [Microsoft SQL Server 2005] > [SQL Server Management Studio] をクリックします。[Microsoft SQL Server Management Studio] ウィンドウが開きます。

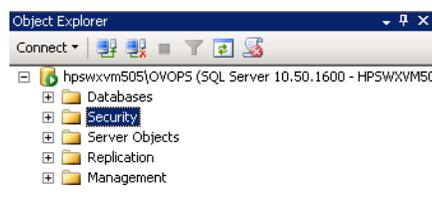
注: SQL Server Management Studioがシステムにインストールされていない場合、以下のURLにアクセスしてMicrosoftのWebサイトの関連セクションからダウンロードできます。<http://www.microsoft.com>

3. [サーバーへの接続] ダイアログボックスで、[認証] リストから [Windows 認証] を選択して

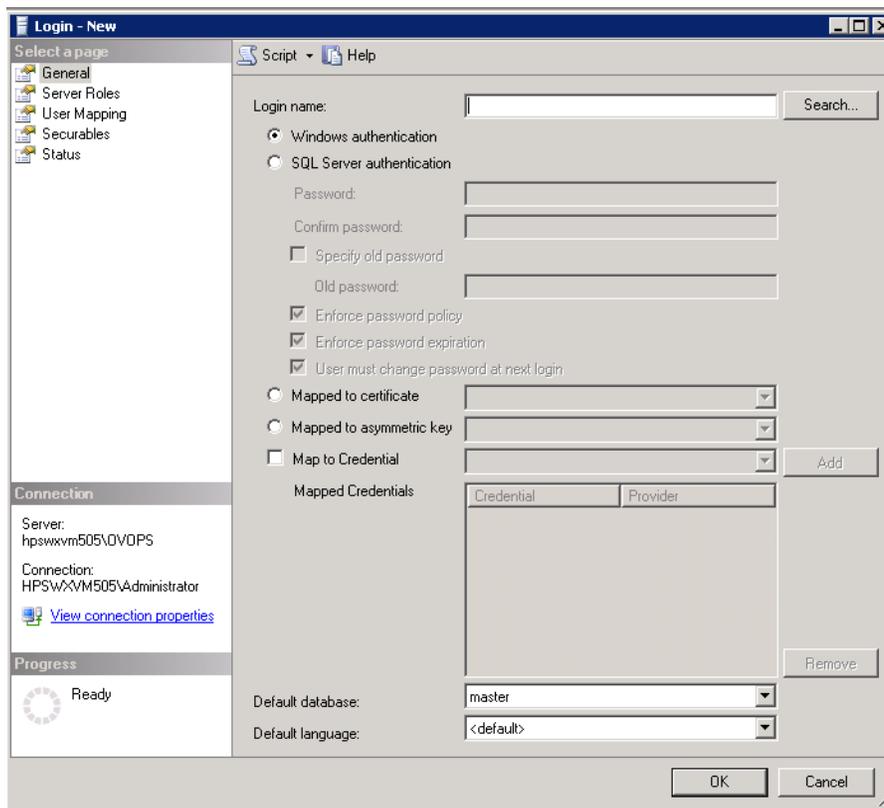
から、[接続] をクリックします。



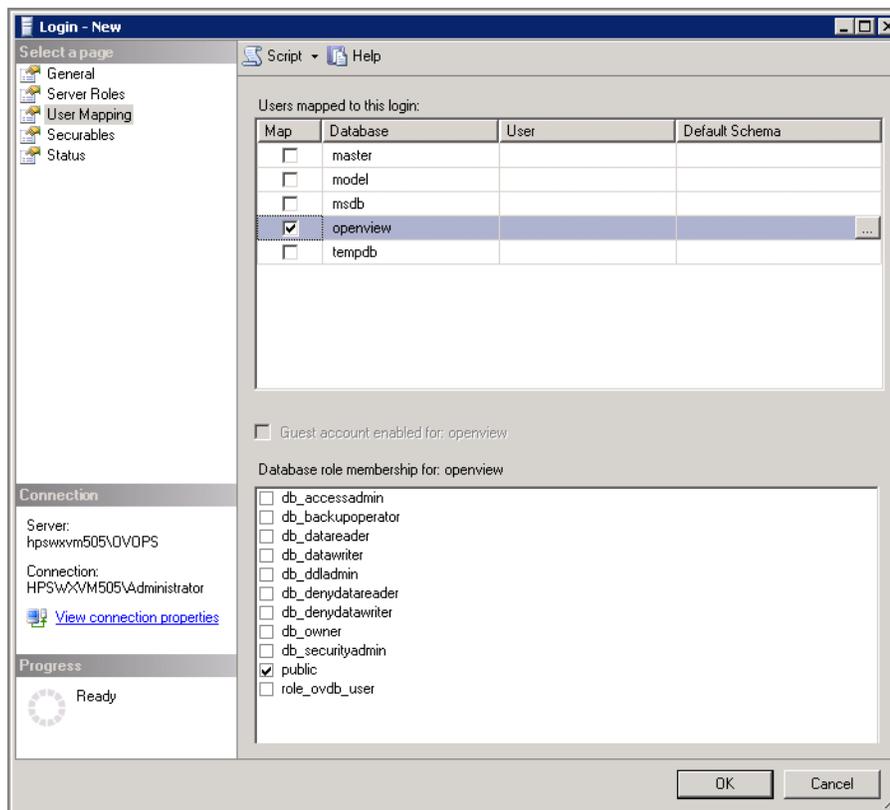
4. [オブジェクト エクスプローラ] ペインで、[セキュリティ] を展開します。



5. [ログイン] を右クリックし、[新しいログイン] をクリックします。[ログイン - 新規作成] ダイアログボックスが開きます。



6. [全般]で、[ログイン名]フィールドにユーザー名を入力します。必要なその他の詳細を指定します。
7. [SQL Server 認証] オプションボタンをクリックします。
8. [パスワード]フィールドにパスワードを入力します。
9. [パスワードの確認入力]フィールドにパスワードをもう一度入力します。パスワードの入力義務ルールを無効にして、シンプルなパスワードを作成することができます。
10. [ユーザーマッピング]をクリックします。
11. [このログインにマップされたユーザー]の下で、[openview]チェックボックスを選択します。



12. [OK]をクリックし、ユーザー名とパスワードを作成します。

注: 組み込みのMicrosoft SQL Server 2008を使ってHPOMシステム上でユーザー名とパスワードを作成するには、手順1から同じ手順を実行します。

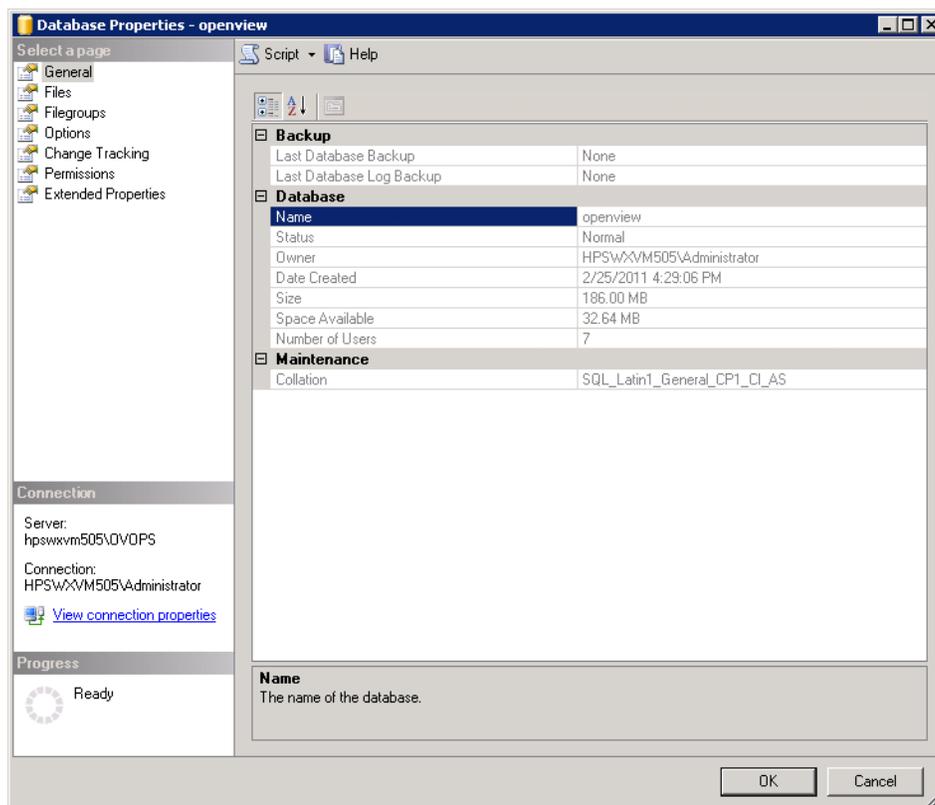
タスク2:接続の有効化と権限の選択

データベースユーザーは、少なくともCONNECT権限およびSELECT権限を持っていない限りなりません。新たに作成したユーザーアカウントに対してCONNECT権限およびSELECT権限を有効にするには、以下の手順を実行します。

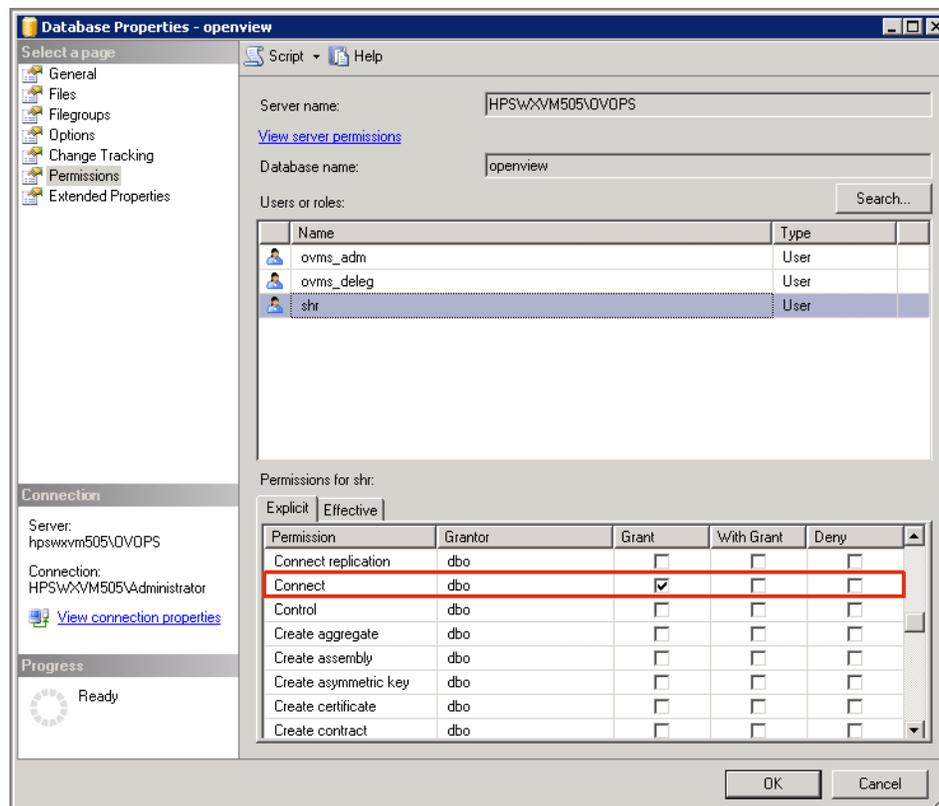
1. [オブジェクト エクスプローラ] ペインで、[データベース] を展開します。



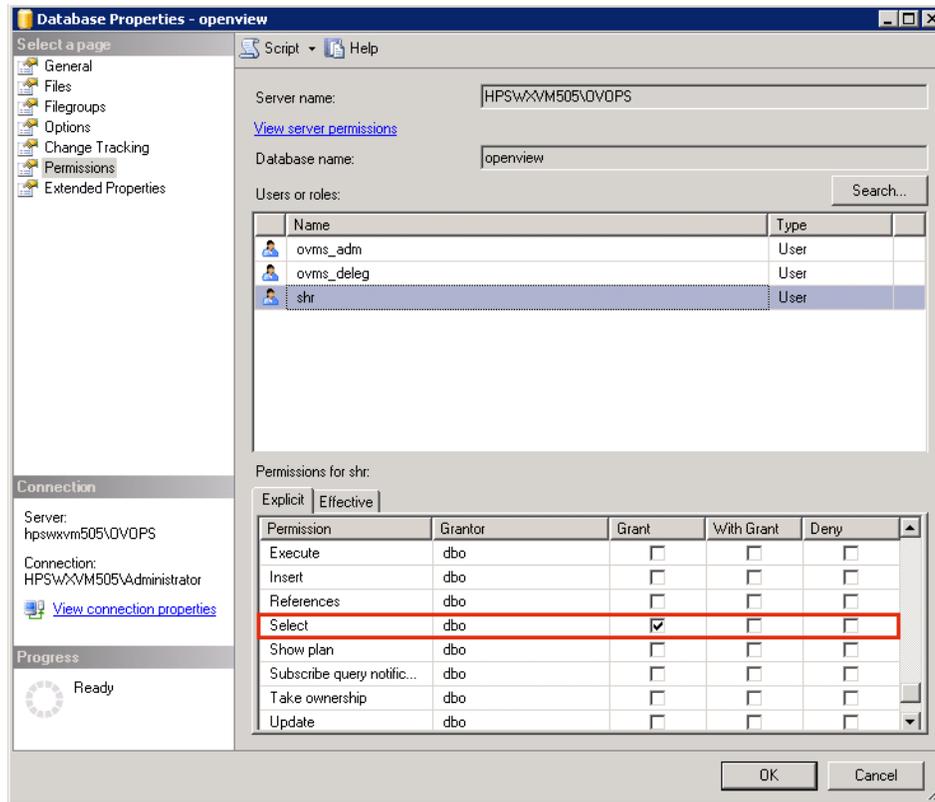
2. [openview] を右クリックしてから、[プロパティ] をクリックします。[データベースのプロパティ - openview] ダイアログボックスが開きます。



3. [ページの選択] ペインで、[権限] をクリックします。
4. [ユーザーまたはロール] の下で、新たに作成したユーザーアカウントをクリックします。
5. 新しく作成したユーザーの [明示的な権限] タブで、[CONNECT] 権限にスクロールダウンしてから、その権限に対する [許可] チェックボックスを選択します。



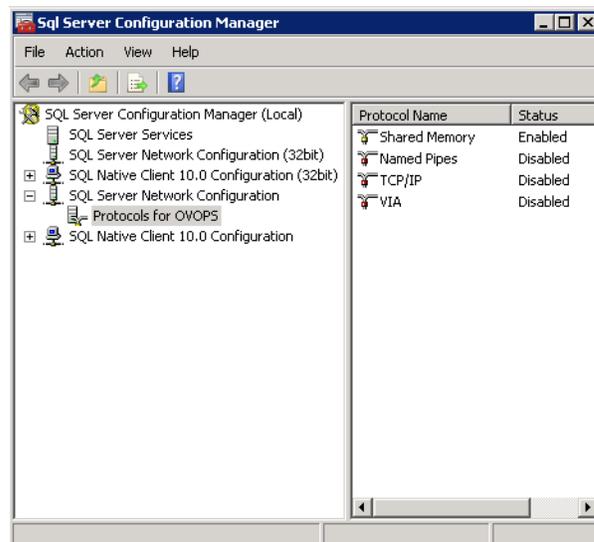
6. [SELECT] 権限にスクロールダウンし、その権限に対する [許可] チェックボックスを選択します。



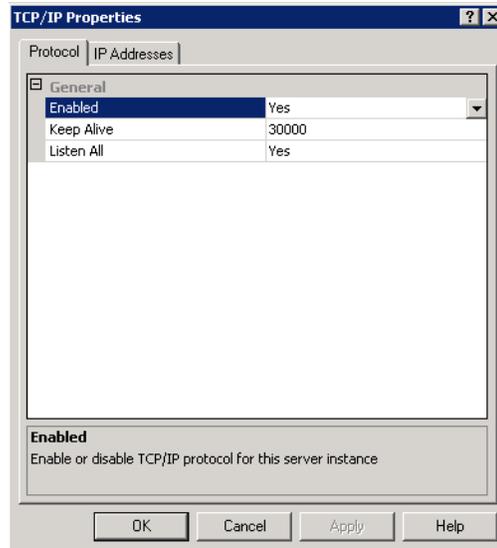
7. [OK] をクリックします。

タスク3:HPOMサーバーのポート番号のチェック

1. [スタート] > [プログラム] > [Microsoft SQL Server 2005] > [構成ツール] > [SQL Server 構成 マネージャ] をクリックします。[SQL Server 構成 マネージャ] ウィンドウが表示されます。
2. [SQL Server ネットワークの構成] を展開して [OVOPSのプロトコル] を選択します。インスタンス名を変更した場合、該当するインスタンス名を選択します。



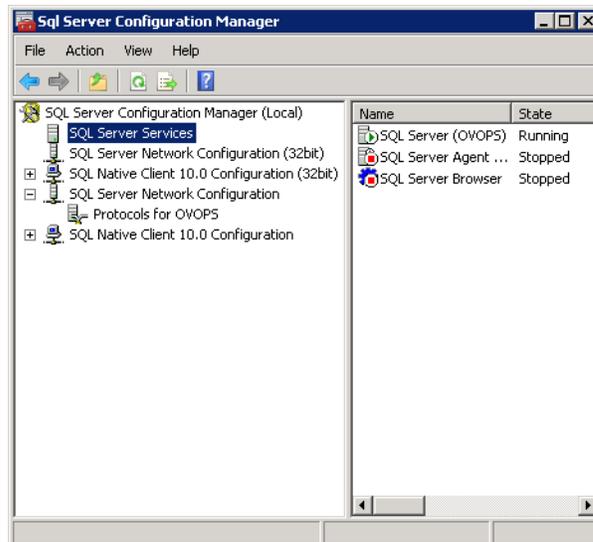
3. 右側のペインで、[TCP/IP]を右クリックしてから[有効化]をクリックします。
4. [TCP/IP]をもう一度右クリックし、[プロパティ]をクリックします。[TCP/IPのプロパティ]ダイアログボックスが開きます。



5. [IPアドレス]タブをクリックし、[IPAll]の下のポート番号を書き留めます。

タスク4:HPOMデータベースサーバーの再起動

1. [SQL Server 構成 マネージャ] ウィンドウで、[SQL Server のサービス] をクリックします。



2. 右側のペインで、[SQL Server (OVOPS)]を右クリックしてから[再起動]をクリックします。

管理コンソールでHPOMデータソース接続を設定するときに、新たに作成したユーザー名、パスワードおよび検出したインスタンス名とポート番号を使用できます。

注: コマンドプロンプトユーティリティosqlを使用して、この手順を実行できます。詳細につ

いては、次のURLのMicrosoftのWebサイトにアクセスしてください。

<http://support.microsoft.com>

HPOMサーバーのポート番号のチェック

Microsoft SQL ServerがHPOMにおけるデータベースタイプの場合、「[タスク3:HPOMサーバーのポート番号のチェック](#)」の手順を実行してください。

OracleがHPOMにおけるデータベースタイプの場合、以下の手順を実行して、ポート番号をチェックしてください。

1. Oracleサーバーにログオンします。
2. \$ORACLE_HOME/network/adminフォルダーまたは%ORACLE_HOME%\NET80\Adminフォルダーに移動します。
3. listener.oraファイルを開きます。HPOMサーバーのポート番号はこのファイルに一覧表示されています。

第5章:コンテンツパックのインストールおよびアンインストール

必要なコンテンツパックをインストールするため、HPE OBRには管理コンソールを介してデプロイメントマネージャーユーティリティが提供されています。このWebベースのインターフェイスでは、ドメイン、データを収集するデータソースアプリケーション、およびデータ収集用にインストールする特定のコンテンツパックコンポーネントに基づいてコンテンツパックが配置されるため、インストールプロセスが簡略化されます。

開始する前に

コンテンツパックのインストールを開始する前に、次の事項を確認してください。

- インストール後の設定。
- データソースの選択が完了していること。

データソースの可用性および整合性の確認

OBRでは、コンテンツパックをインストールする前にデータソースの可用性および整合性を確認できます。

1. 次のページを起動します。

`http://<OBRサーバーのFQDN>:<ポート>/BSMRApp/dscheck.jsf`

2. RTSMIに関連するデータソースを確認するには、**[RTSM]** をクリックします。

[表示] をクリックして、結果を表示します。結果には、不足している必須CIタイプおよび属性のリストが表示されます。

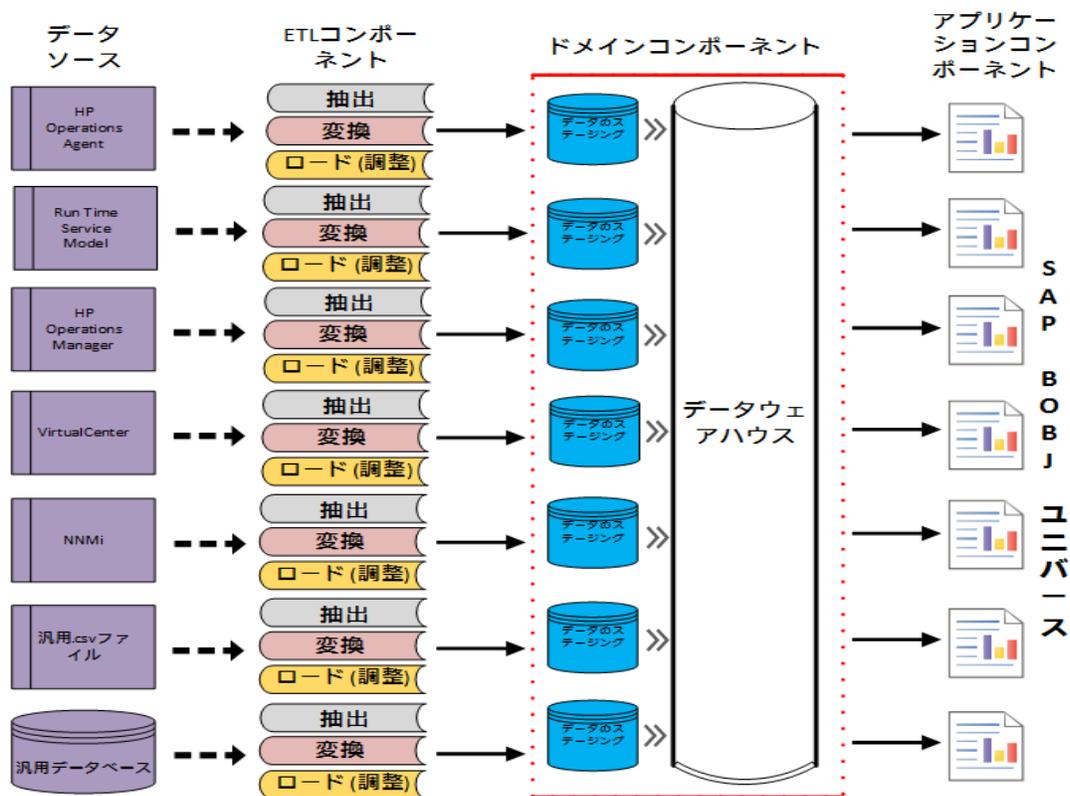
3. HP Operations Agentのデータソースを確認するには、**[PA]** をクリックします。

[表示] をクリックして、結果を表示します。結果には、ノードのステータスサマリーおよび不足しているポリシーが表示されます。

コンテンツパックコンポーネントの選択

コンテンツパックは、1つのデータマート (さまざまなソースから収集されたデータのリポジトリ) です。これは、システムのパフォーマンス、仮想環境のパフォーマンスなどの特定のドメインに関係しており、分析、コンテンツプレゼンテーション、使いやすさの点から見て、特定のグループの知識を持つユーザー固有の要求を満たしています。たとえば、System Performanceコンテンツでは、現在のITインフラストラクチャにあるシステムの可用性とパフォーマンスに関連するデー

タが提供されます。コンテンツパックには、1つのリレーショナルデータモデル(特定のドメインに対して収集されるデータの種 類を定義)、および収集したデータを表示するレポートセットも含まれています。



コンテンツパックは次の層またはコンポーネントによって構成されます。

- ドメインコンポーネント:**ドメインまたはコアドメインコンポーネントは、特定のコンテンツパックのデータモデルを定義します。これには、リレーショナルスキーマを生成するためのルールが含まれています。また、データベースへとデータを処理するためのデータ処理ルール(標準の事前集計ルールのセットを含む)も含まれています。ドメインコンポーネントには、1つまたは複数のレポートコンテンツパックコンポーネントで活用可能な、一般的に使用するディメンションとキューブを含めることができます。ドメインコンテンツパックコンポーネントは、設定済みのトポロジソースまたはデータの収集元であるデータソースに依存しません。
- ETL (抽出、変換と読込) コンポーネント:**ETLコンテンツパックコンポーネントは、収集ポリシーと、変換ルール、調整ルール、およびステージングルールを定義します。また、データ処理ステップの実行順序を定義するデータ処理ルールも提供します。

ETLコンテンツパックコンポーネントは、データソース依存型です。そのため、特定のドメインについて、各データソースアプリケーションは異なるETLコンテンツパックコンポーネントを持ちます。たとえば、HP Operations Agentからシステムパフォーマンスデータを収集する場合、SysPerf_ETL_PerformanceAgentコンポーネントをインストールする必要があります。HP SiteScopeからシステムパフォーマンスデータを収集する場合、SysPerf_ETL_SiS_API

(APIにログ記録されたソースデータ) または SysPerf_ETL_SiS_DB (BSMプロファイルデータベースにログ記録されたソースデータ) のいずれかをインストールする必要があります。

単一のデータソースアプリケーションは、複数のETLコンポーネントを持つことができます。たとえば、Performance Agentでサポートされる仮想技術 (Oracle Solaris Zones、VMware、IBM LPAR、Microsoft HyperVなど) ごとにETLコンポーネントを1つ持つことが可能です。ETLコンポーネントは、1つまたは複数のドメインコンポーネントに依存できます。また、同じドメインコンポーネントにデータをフィードする複数のETLコンポーネントを持つこともできます。

- **アプリケーションコンポーネント:** レポートコンテンツパックコンポーネントは、アプリケーション固有の集計ルール、ビジネスビュー、SAP BOBJユニバース、および特定のドメインに対するレポートを定義します。アプリケーションコンポーネントは、1つまたは複数のドメインコンポーネントに依存できます。また、このコンポーネントには、1つ以上のドメインコンポーネントで定義されるデータモデルを拡張する柔軟性も備えられています。

インストール可能なコンテンツパックコンポーネントのリストは、インストール後の設定段階で設定したトポロジソースに応じて異なります。トポロジソースが設定されると、デプロイメントマネージャは、コンテンツパックコンポーネントのリストをフィルタリングし、サポートされるデプロイメントシナリオにインストール可能なコンポーネントのみを表示します。たとえば、RTSMがトポロジソースとして設定されると、デプロイメントマネージャは、SaOBおよびAPMのデプロイメントシナリオにインストール可能なコンポーネントのみを表示します。

各コンテンツパックとそれらによって提供されるレポートの詳細については、HPE Operations Bridge Reporterユーザーオンラインヘルプを参照してください。

コンテンツパックコンポーネントのインストール

コンテンツパックコンポーネントをインストールするには、デプロイメントマネージャユーティリティを使用します。

コンテンツパックをインストールするには、次の手順を実行します。

1. Webブラウザで管理コンソールを起動します。
 - a. 次のURLにアクセスします。

```
https://<OBR_Serve_FQDN>:21412/BSMRApp
```

ここでの<OBRサーバーのFQDN> は、OBRのインストール先のシステムの完全修飾ドメイン名です。

- b. [ログイン名] フィールドに **administrator** と入力し、[パスワード] フィールドにパスワードを入力します。[ログイン] をクリックして続行します。[ホーム] ページが表示されます。

注: ほかのユーザーアカウントを使用して管理コンソールにアクセスする場合は、そのユーザーアカウントが管理者権限を持っていることを確認してください。

2. 左側のペインで [管理] をクリックし、[デプロイメントマネージャ] をクリックします。[デプロイメントマネージャ] ページが表示されます。

デプロイメントマネージャには、サポートされるデプロイメントシナリオにインストール可能なコンテンツパックコンポーネントが表示されます。選択肢を変更するには、選択しているコンテンツ、データソースアプリケーション、またはコンテンツパックコンポーネントをリストからクリアします。各デプロイメントシナリオに固有のコンテンツを次の表に示します。

コンテンツパックのリスト

コンテンツ	BSM/OMi	HP Operations Manager	Application Performance Management	VMware vCenter
デフォルト	✓	✓	✓	✓
Cross-Domain Operations Events	✓			
Health and Key Performance Indicators	✓		✓	
HPSA	✓	✓	✓	✓
IBM WebSphere Application Server	✓	✓		
Microsoft Active Directory	✓	✓		
Microsoft Exchange Server	✓	✓		
Microsoft SQL Server	✓	✓		
MSAppCore	✓	✓		

コンテンツ	BSM/OMi	HP Operations Manager	Application Performance Management	VMware vCenter
Network Performance ¹	✓	✓		
ネットワークコンポーネントヘルス	✓	✓		
ネットワークインターフェイスヘルス	✓	✓		
Operations Events	✓	✓		
Oracle	✓	✓		
Oracle WebLogic Server	✓	✓		
Real User Transaction Monitoring	✓		✓	
Synthetic Transaction Monitoring	✓		✓	
System Performance	✓	✓		✓
Virtual Environment Performance	✓	✓		✓

3. [インストール/アップグレード] をクリックし、コンテンツパックをインストールします。
 選択されたすべてのコンテンツパックについて、[ステータス] 列の色が変わります。インストール中のコンテンツパックの [ステータス] 列には、[インストールが開始しました] ステータスが

¹Network Node Manager i (NNMi) が BSM と統合されていない場合は、HPE OBR の RTSM デプロイメントの NetworkPerf_ETL_PerfiSPI_NonRTSM ETL コンテンツを使用する必要があります。

表示されます。[デプロイメントマネージャ] ページは自動的に更新され、最新のステータスが表示されます。インストールが完了した後、[インストールに成功しました] ステータスが表示されます。インストールに失敗すると、[インストールに失敗しました] ステータスが表示されます。

注: インストールおよびアンインストールの操作中、タイマーサービスは自動的に停止し、操作完了後に起動します。

4. インストールプロセスの詳細を参照するには、[ステータス] 列のリンクをクリックします。[コンテンツパックコンポーネントのステータス履歴] ウィンドウが開きます。このウィンドウには、コンテンツパックコンポーネントのインストールに関する現在および過去のステータスの詳細が表示されます。

注: インストールおよびアンインストールプロセスの実行中、デプロイメントマネージャではそのプロセスを中断することができません。[デプロイメントマネージャ] ページでその他の操作を実行するには、現在のプロセスが完了するまで待機する必要があります。

注: コンテンツパックのインストールの [ステータス] に1時間を超えて [インストールが開始しました] が表示され、インストールがハングした場合は、『HPE Operations Bridge Reportertラブルシューティングガイド』の「コンテンツパックのインストールのハング (Linuxのみ)」セクションを参照してください。

注: コンポーネントヘルスまたはインターフェイスヘルスコンテンツパックをインストールしている場合は、ネットワークデータの交換を行うようにHPE OBRおよびNNMiを設定する必要があります。設定手順については、「[第12章:Network Node Manager i \(NNMi\) と統合するためのHPE OBRの設定](#)」(132ページ)を参照してください。

コンテンツパックコンポーネントのアンインストール

コンテンツパックコンポーネントをアンインストールするには、デプロイメントマネージャユーティリティを使用します。

コンテンツパックをアンインストールするには、次の手順を実行します。

1. Webブラウザで管理コンソールを起動します。
 - a. 次のURLにアクセスします。
`http://<OBRサーバーのFQDN>:21411/BSMRApp`
 - b. [ログイン名] フィールドに `administrator` と入力し、[パスワード] フィールドにパスワードを入力します。[ログイン] をクリックして続行します。[管理コンソール] ページが表示されます。

注: ほかのユーザーアカウントを使用して管理コンソールにアクセスする場合は、そのユーザーアカウントが管理者権限を持っていることを確認してください。

2. 左側のペインで [管理] をクリックし、[デプロイメントマネージャ] をクリックします。[デプロイメントマネージャ] ページが表示されます。

デプロイメントマネージャに、サポートされるデプロイメントシナリオにインストールされているコンテンツパックコンポーネントが表示されます。コンテンツパックのリストについては、「[コンテンツパックのリスト](#)」(87ページ)を参照してください。

3. 必要なコンテンツパックをアンインストールするには、 アイコンをクリックします。サマリーメッセージが表示されます。

注: 一度にアンインストールできるのは、コンテンツパック1つと、それに依存するコンテンツパックのみです。

4. [OK] をクリックし、コンテンツパックをアンインストールします。[ステータス] 列にアンインストールのステータスが表示されます。

第6章:データソースの設定

コンテンツパックをインストールしたら、さまざまなデータコレクターから必要なデータを収集するようにHPE OBRを設定する必要があります。これらのデータコレクターは、HPE OBRインフラストラクチャーで内部的に稼働してデータを収集します。したがって、これらのコレクターを直接操作することはできません。その代わりに、管理コンソールを通して、コレクターのデータの収集先のデータソースを指定できます。

次のデプロイメントシナリオのタイプに基づいて、データソースを設定することができます。

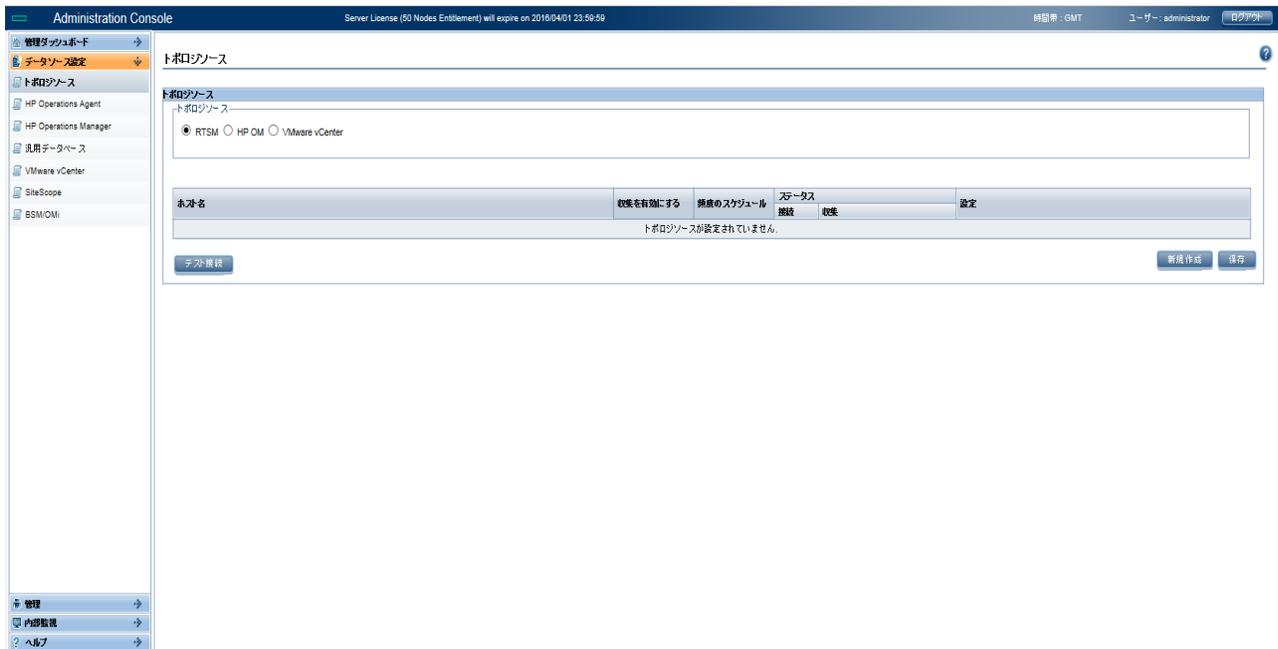
1. **BSM/OMi 9.2xデプロイメントシナリオ**
 - a. 管理およびプロファイルデータベースの設定
 - b. HP OMiデータソースの設定 (イベントデータベース)
 - c. HP Operations Agentデータソースの設定
 - d. HP Operations Managerデータソースの設定
 - e. ネットワークデータソースの設定 (汎用データベースの使用)
 - f. ネットワークデータソースの設定 (NNMiの使用)
 - g. VMware vCenterデータソースの設定
 - h. SiteScopeデータソースの設定
 - i. HP Server Automationデータソースの設定
2. **OMi 10デプロイメントシナリオ**
 - a. HP OMiデータソースの設定 (Operationsデータベース)
 - b. HP Operations Agentデータソースの設定
 - c. ネットワークデータソースの設定 (汎用データベースの使用)
 - d. ネットワークデータソースの設定 (NNMiの使用)
 - e. VMware vCenterデータソースの設定
 - f. SiteScopeデータソースの設定
 - g. HP Server Automationデータソースの設定
3. **HP Operations Managerデプロイメントシナリオ**
 - a. 管理およびプロファイルデータベースの設定
 - b. HP Operations Agentデータソースの設定
 - c. HP Operations Managerデータソースの設定
 - d. ネットワークデータソースの設定 (汎用データベースの使用)
 - e. ネットワークデータソースの設定 (NNMiの使用)

- f. VMware vCenterデータソースの設定
- g. HP Server Automationデータソースの設定
- 4. VMware vCenterデプロイメントシナリオ
 - a. VMware vCenterデータソースの設定
 - b. HP Server Automationデータソースの設定
- 5. その他のデプロイメントシナリオ
 - a. ネットワークデータソースの設定 (汎用データベースの使用)
 - b. ネットワークデータソースの設定 (NNMiの使用)
 - c. HP Server Automationデータソースの設定

コンテンツパックのETLのリストについては、「付録C」を参照してください。

トポロジソース

インストール後の設定でトポロジソースを設定していない場合は、[トポロジソース] ページでトポロジソースを設定することができます。ただし、インストール後の設定ですでにトポロジソースを設定している場合は、設定済みのトポロジソースの接続パラメーターをテストまたは変更することしかできません。



トポロジソースの設定の詳細については、「タスク6:トポロジソースの設定」(49ページ)を参照してください。

HP Operations Agentデータソースの設定

RTSMデプロイメントシナリオでは、HP Operations Agentの新規データソース接続を作成する必要はありません。デフォルトでは、トポロジ情報の収集時に、HP Operations Agentがインストールされているすべてのノードが自動的に検出されるからです。これらのデータソースまたはノードは、管理コンソールの[HP Operations Agentデータソース]ページにリストされます。

HP Performance Agentデータソースのリストを表示するには、次の手順を実行します。

1. [管理コンソール]で、[データソースの設定]>[HP Operations Agent]をクリックします。**[HP Operations Agentデータソース]**ページが表示されます。
2. HP Operations Agentデータソースの詳細を表示するには、**[HP Operations Agentデータソースのサマリー]**テーブル内のドメイン名または番号をクリックします。**[HP Operations Agentデータソースの詳細]**テーブルが表示されます。
3. 1つ以上のホストのデータ収集スケジュールを変更するには、**[ポーリング頻度のスケジュール]**列の**[時間]**ボックスに1~24時間のポーリング時間を指定します。
4. **[保存]**をクリックして変更を保存します。**[正常に保存しました]**というメッセージが情報メッセージパネルに表示されます。

HP Operations Agentのデータソース接続の設定については、『HPE Operations Bridge Reporter管理者用オンラインヘルプ』を参照してください。

HP Operations Managerデータソースの設定

HP Operations Manager (HPOM) コンテンツパックのインストールし、HPOM用のトポロジソース接続を[サービス定義]ページで作成すると、同じデータソース接続が[HP Operations Manager]ページに表示されます。新規のデータソース接続を作成する必要はありません。既存の接続をテストし、それを保存できます。

ただし、[サービス定義]ページでデータソース接続を更新しても、[Operations Manager]ページの接続の詳細は更新されません。

データベース接続を設定するには、次の手順を実行します。

1. [管理コンソール]で、[データソースの設定]>[HP Operations Manager]をクリックします。**[HP Operations Manager]**ページが開きます。
2. ホスト名の横のチェックボックスを選択してから、**[接続テスト]**をクリックして接続をテストします。
3. **[保存]**をクリックして変更を保存します。**[正常に保存しました]**というメッセージが情報メッセージパネルに表示されます。

追加のHPOMデータソースを設定するには、**[新規作成]**ボタンをクリックします。特定のデータソース接続を変更するには、**[設定]**をクリックします。

- 1つ以上のホストのHPOMデータ収集スケジュールを変更するには、**[頻度のスケジュール]**列で、**[時間]**ボックスに1~24時間の収集時間を指定します。
- [保存]**をクリックして変更を保存します。**[正常に保存しました]**というメッセージが情報メッセージパネルに表示されます。

ネットワークデータソースの設定 (汎用データベースの使用)

Networkコンテンツパックをインストールしたら、NNMiからネットワーク関連のデータを収集するようにHPE OBR (ローカルデータコレクター) またはリモートコレクターを設定する必要があります。NNMiは、ネットワークパフォーマンスデータのリポジトリとしてNPSを使用します。管理コンソールの**[汎用データベース]**ページを使用して、NPSから必要なデータを収集するようにHPE OBRを設定します。このページでは、データベースシステムとしてVertica、Oracle、またはSQL Serverを使用する汎用データベースへの接続を設定することもできます。

NPSデータソース接続を設定するには、次の手順を実行します。

- [管理コンソール]** で、**[データソースの設定]** > **[汎用データベース]** をクリックします。**[汎用データベース]** ページが表示されます。
- [新規作成]** をクリックし、NPSデータソース接続を作成します。**[接続パラメータ]** ダイアログボックスが表示されます。
- [接続パラメータ]** ダイアログボックスで、次の値を指定または入力します。

フィールド	説明
ホスト名	NPSデータベースサーバーのアドレス (IPまたはFQDN)。
ポート	NPSデータベースサーバーを照合するためのポート番号。
タイムゾーン	データベースインスタンスが設定されるタイムゾーン。
データベースタイプ	NPSデータベースを作成するために使用されるデータベースエンジンのタイプ。
ドメイン	選択されたデータベースタイプからHPE OBRがデータを収集するドメインを選択します。
URL	データベースインスタンスのURL。
ユーザー名	NPSデータベースユーザーの名前。
パスワード	NPSデータベースユーザーのパスワード。
収集ステーション	ローカルコレクターまたはリモートコレクターのどちらであるかを指定します。

ドメイン名は、NetworkPerf_ETL_PerfSPI_RTSMまたはNetworkPerf_ETL_PerfSPI9.20コンテンツパック、またはNetworkPerf_ETL_PerfSPI_NonRTSMをインストールした後にのみ表示されます。

4. **[OK]** をクリックします。
5. **[テスト接続]** をクリックし、接続をテストします。
6. **[保存]** をクリックして変更を保存します。**[正常に保存しました]** というメッセージが情報メッセージパネルに表示されます。
7. 1つ以上のホストのデータ収集スケジュールを変更するには、**[頻度のスケジュール]** 列で、**[時間]** ボックスに1~24時間の収集時間を指定します。
8. **[保存]** をクリックして変更を保存します。**[正常に保存しました]** というメッセージが情報メッセージパネルに表示されます。

新たに作成したすべてのデータソース接続に対するデータ収集は、デフォルトでは有効になります。ネットワークデータソース接続の設定については、『HPE Operations Bridge Reporter 管理者用オンラインヘルプ』を参照してください。

注: データソースとしてのSybase IQ

Sybase IQをデータソースとして設定していて、ネットワークデータソースを設定しても収集が実行されていない場合は、次の手順を実行してください。

1. Sybase IQサーバーからjconn4.jarを\$PMDB_HOME/libディレクトリにコピーします。
2. 収集サービスを再起動します。

VMware vCenterデータソースの設定

VMware vCenterをデータ収集ソースとして設定し、HPOMデプロイメントシナリオで仮想化メトリックを収集できます。

VMware vCenterを設定するには、次の手順を実行します。

1. **[管理コンソール]** で、**[データソースの設定]** > **[VMware vCenter]** をクリックします。**[VMware vCenterデータソース]** ページが表示されます。
2. **[新規作成]** をクリックし、接続をテストします。**[接続パラメータ]** ダイアログボックスが表示されます。
3. **[接続パラメータ]** ダイアログボックスで、次の値を入力します。

フィールド	説明
ホスト名	VMware vCenterアプリケーションサーバーのIPアドレスまたはFQDN。
ユーザー名	VMware vCenterアプリケーションユーザーの名前。

フィールド	説明
パスワード	VMware vCenterアプリケーションユーザーのパスワード。
収集ステーション	ローカルコレクターまたはリモートコレクターのどちらであるかを指定します。

注: 作成するそれぞれのVMware vCenter接続に対して、[109ページの手順2](#)を実行すると、追加のVMware vCenterデータソースを設定できます。

4. 1つ以上のホストのVMware vCenterデータ収集スケジュールを変更するには、**[頻度のスケジュール]**列で、**[分]**ボックスに5～60分の収集時間を指定します。
5. **[保存]**をクリックして変更を保存します。**[正常に保存しました]**というメッセージが情報メッセージパネルに表示されます。
6. VMware vCenterサーバーで、ユーザーに次の権限を付与します。
 - **[データストア]**権限を**[データストアの参照]**に設定します。
 - **[データストア]**権限を**[低レベルのファイル操作]**に設定します。
 - **[セッション]**権限を**[セッションの確認]**に設定します。
7. VMware vCenterサーバーで、統計値レベルを設定します。
 - a. vSphere Clientで、**[管理]** -> **[vCenter Server設定]**をクリックします。
 - b. **[vCenter Server設定]**ウィンドウで、**[統計情報]**をクリックします。**[統計間隔]**ページが表示されます。このページに、vCenter Server統計値が保存されるまでの時間間隔、統計値が保存される期間、および統計値レベルが表示されます。
 - c. **[編集]**をクリックします。
 - d. **[統計間隔の編集]**ウィンドウで、ドロップダウンリストから**[統計間隔]**を選択します。選択した統計値レベルについて、**[統計間隔の編集]**ウィンドウが表示されます。このウィンドウには、このレベルで収集される統計値のタイプが表示されます。最小統計値レベルを「2」に設定する必要があります。

SiteScopeデータソースの設定

SiteScopeページを使用して、環境内の複数のSiteScopeモニターからデータを収集する、SiteScopeデータソースを設定できます。このページを使用すると、データ収集を有効化または無効化したり、要件に応じてデータ収集接続を追加または削除することができます。さらに、このページを使用してSiteScopeサーバーのホスト名を検出することもできます。SiteScopeサーバーのホスト名のリストを表示するには、**[データソースの検出]**をクリックします。設定ウィザードで、メトリックのチャンネルとしてプロファイルデータベースを選択する場合、SiteScopeデータソースのコレクターを作成する必要があります。

新規SiteScopeデータソース接続を作成するには、次の手順を実行します。

1. [管理コンソール] で、[データソースの設定] > [SiteScope] をクリックします。[SiteScope] ページが表示されます。
2. [新規作成] をクリックします。[接続パラメータ] ダイアログボックスが表示されます。
3. [接続パラメータ] ダイアログボックスで、次の値を入力します。

フィールド	説明
接続設定	
ホスト名	SiteScopeサーバーのIPアドレスまたはFQDN。
ポート	SiteScopeサーバーを照会するためのポート番号。 注: SiteScopeサーバーへの接続用のデフォルトのポートは、ポート番号8080です。
SSLを使用	(任意):選択した場合、SiteScopeサーバーがSecure Sockets Layer (SSL) での通信をサポートするように有効化する必要があります。
ユーザー名	現在のSiteScopeユーザーの名前。
パスワード	SiteScopeユーザーのパスワード。
Init文字列	SiteScopeサーバーへの接続を確立するために使用される共有キー。 注: Init文字列を取得するには、SiteScopeサーバーに資格情報を入力してログインし、[一般的な設定] > [LW SSO] をクリックします。
収集ステーション	このオプションは、リモートシステムにインストールされているコレクターで使用します。
<p>一般的なデータ統合の設定: これらの設定はSiteScopeサーバーとHPE OBRサーバーとの間の汎用データ統合を作成します。接続が正常に確立すると、SiteScopeサーバーはデータをHPE OBRサーバーにプッシュします。</p> <p>また、レポート対象となるSiteScopeモニターに手動で適用しなくてはならないタグをHPE OBRで作成する必要があります。タグの適用の詳細については、SiteScopeのマニュアルを参照してください。</p>	
統合名	統合の名前を入力します。 注: 後で変更することはできません。
エンコーディング	HPE OBRとSiteScopeとの間の通信で使用するエンコーディン

フィールド	説明
	グのタイプ。
SSLを使用	(任意):選択した場合、SiteScopeサーバーがSecure Sockets Layer (SSL) での通信をサポートするように有効化する必要があります。
レポート間隔 (秒)	SiteScopeがデータをHPE OBRにプッシュする頻度。これは設定可能なパラメーターです。
要求のタイムアウト (秒)	接続がタイムアウトになるまでに待機する時間。ゼロ (0) の値にするとタイムアウト期間が無限になります。これは設定可能なパラメーターです。
接続タイムアウト (秒)	接続が再確立されるまでのタイムアウト。ゼロ (0) の値にするとタイムアウトは適用されません。これは設定可能なパラメーターです。
再試行回数	HPE OBRとの接続エラーの発生中にSiteScopeサーバーが試みる再試行の回数。
要求時に認証	(任意):選択した場合、Webサーバーのユーザー名とパスワードを使用して認証が実行されます。
認証ユーザー名	HPE OBRがBasic認証を使用するよう設定されている場合、サーバーにアクセスするためのユーザー名を指定します。
認証パスワード	HPE OBRがBasic認証を使用するよう設定されている場合、サーバーにアクセスするためのパスワードを指定します。
プロキシアドレス	SiteScope上でプロキシが有効な場合、プロキシアドレスを入力します。
プロキシユーザー名	プロキシサーバーのユーザー名を入力します。
プロキシパスワード	プロキシサーバーのパスワードを入力します。
タグの作成	選択すると、SiteScopeサーバーから手動で適用する必要がある、SiteScopeモニター用のタグを作成します。
タグ名	タグのユーザー定義名。

4. **[OK]** をクリックします。
5. **[保存]** をクリックします。
[正常に保存しました] というメッセージが情報メッセージパネルに表示されます。

新しく作成したSiteScopeデータソース接続に対するデータ収集はデフォルトで有効になっています。また、収集の頻度は15分ごとにスケジュール設定されています。

HP Server Automationデータソースの設定

[HPSA] ページを使用して、環境内の複数のSAからデータを収集する、HP Server Automationデータソースを設定できます。このページを使用すると、データ収集を有効化または無効化したり、要件に応じてデータ収集接続を追加または削除することができます。

新規HP Server Automationデータソース接続を作成するには、次の手順を実行します。

1. [管理コンソール] で、[データソースの設定] > [HPSA] をクリックします。[HPSA] ページが表示されます。
2. [新規作成] をクリックします。[接続パラメータ] ダイアログボックスが表示されます。
3. [接続パラメータ] ダイアログボックスで、次の値を入力します。

フィールド	説明
ホスト名	HPSAのIPアドレスまたはFQDN。
ポート	HPSAを照会するためのポート番号。
データベースインスタンス	HPSAデータベースインスタンスのシステム識別子 (SID)。
データベースタイプ	データベースのタイプ。
ユーザー名	HPSAユーザーの名前。
パスワード	HPSAユーザーのパスワード。
収集ステーション	このオプションは、リモートシステムにインストールされているコレクターで使用します。

4. [OK] をクリックします。
5. [保存] をクリックします。
[正常に保存しました] というメッセージが情報メッセージパネルに表示されます。

管理およびプロファイルデータベースの設定

以下のHP Business Service Managementデータリポジトリからデータを収集するように、HPE OBRを設定することができます。

- **管理データベース:**管理データベースでは、HP Business Service Management環境におけるシステム全体の管理関連メタデータが保管されます。
- **プロファイルデータベース:**プロファイルデータベースでは、HP Business Service

Managementデータコレクターから取得された未処理の集約済み測定データが保管されません。プロファイルデータベースでは、HPOM、OMi、BPM、RUM、およびService Healthから収集された測定値も保管されます。

HP BSMのデプロイメントでは、すべてのデータを1つのデータで保管しきれない場合にスケーリングの目的で複数のプロファイルデータベースを設定する場合があります。複数のプロファイルデータベースで重要なデータと重要でないデータを保管しなければならない場合があります。環境内にデプロイされているさまざまなプロファイルデータベースに関する情報は、管理データベースに保管されます。

複数のプロファイルデータベース接続を設定するには、[BSM/OMi] ページで管理データベースも設定する必要があります。

新しい管理データベースを設定するには、次の手順を実行します。

1. [管理コンソール] で、[データソースの設定] > [BSM/OMi] > [管理データベース] をクリックします。
2. [新規作成] をクリックします。[接続パラメータ] ダイアログボックスが表示されます。
3. トポロジソースに基づいて、[データソース] を [BSM] または [OMi] として選択します。
4. [接続パラメータ] ダイアログボックスに次の値を入力します。

フィールド	説明
ホスト名	管理データベースサーバーのIPアドレスまたはFQDN。 [Oracle RACのデータベース] を選択した場合には表示されません。
ポート	管理データベースサーバーに照会するためのポート番号。 [Oracle RACのデータベース] を選択した場合には表示されません。
データベースタイプ	管理データベースを作成するために使用されるデータベースエンジンのタイプ。[BSM] として [データソース] を選択した場合、データベースのタイプは [Oracle] または [MSSQL] になります。 [OMi] として [データソース] を選択した場合、データベースのタイプは [Oracle]、[MSSQL]、[PostgreSQL] のいずれかになります。
Windows認証	データベースタイプとして [MSSQL] を選択した場合、MSSQL に対するWindows認証を有効化するオプションがあります。つまり、ユーザーはデータベースをホスティングするWindowsシステムと同じ資格情報をSQL Serverへのアクセスで使用できます。
データベースインスタンス	管理データベースインスタンスのシステム識別子 (SID)。

フィールド	説明
ス	<p>[Oracle RACのデータベース]を選択した場合には表示されません。</p> <p>注: データベースのホスト名、ポート番号、およびSIDに関する詳細については、HP Business Service Management管理者にお問い合わせください。</p>
データベース名	データベースの名前。このフィールドは、データベースタイプとして [MSSQL] を選択した場合のみ表示されます。
Oracle RACのデータベース	このオプションは、データベースタイプとして [Oracle] を選択した場合にのみ表示されます。
サービス名	サービスの名前。このオプションは、[Oracle RACのデータベース] を選択した場合にのみ表示されます。
ORAファイル名	Oracle Real Application Clusterへの接続情報が含まれるORAファイル(\${PMDDB.HOME}/configフォルダーにあります)。このオプションは、[Oracle RACのデータベース] を選択した場合にのみ表示されます。
ユーザー名	<p>管理データベースユーザーの名前。これは、管理データベースのセットアップ時にBSM設定ウィザードで指定したものです。</p> <p>注: [Windows認証] オプションを選択した場合、このフィールドは無効になります。</p>
パスワード	<p>管理データベースユーザーのパスワード。これは、管理データベースのセットアップ時にBSM設定ウィザードで指定したものです。</p> <p>注: [Windows認証] オプションを選択した場合、このフィールドは無効になります。</p>

5. [OK] をクリックします。
6. [テスト接続] をクリックし、接続をテストします。
7. [データベースの検出] をクリックし、対応するプロファイルデータベースを自動的に検出します。

注: 管理データベースとプロファイルデータベースが同じシステム上にある場合、[データベースの検出] をクリックすると、対応するプロファイルデータベースが自動的に検出されます。データベースが異なるシステム上にある場合、[プロファイルデータベース] タブを

使用して、手動でプロファイルデータベースを設定する必要があります。

注: [Oracle RACのデータベース] オプションを選択して、管理データベースを設定し、テスト接続に成功した後で[データベースの検出]をクリックしても、対応するプロファイルデータベースは自動的に検出されません。[プロファイルデータベース] タブを使用して、手動でプロファイルデータベースを設定する必要があります。

8. [保存] をクリックして変更を保存します。[正常に保存しました] メッセージが情報メッセージペインに表示されます。

新しいプロファイルデータベースを設定するには、次の手順を実行します。

1. [管理コンソール] で、[データソースの設定] > [BSM/OMi] > [プロファイルデータベース] をクリックします。
2. [新規作成] をクリックします。[接続パラメータ] ダイアログボックスが表示されます。
3. [接続パラメータ] ダイアログボックスに次の値を入力します。

フィールド	説明
ホスト名	プロファイルデータベースサーバーのIPアドレスまたはFQDN。 [Oracle RACのデータベース] を選択した場合には表示されません。
ポート	プロファイルデータベースサーバーに照会するためのポート番号。 [Oracle RACのデータベース] を選択した場合には表示されません。
データベースタイプ	プロファイルデータベースを作成するために使用されるデータベースエンジンのタイプ。これは、OracleまたはMSSQLのいずれかです。
管理データベース	プロファイルデータベースを管理データベースにリンクします。 SiteScopeからのみデータを収集する場合は、管理データベースを選択する必要はありません。
ドメイン	データ収集を有効にするドメインを選択します。 注: データ収集を有効にする元となるドメインを選択する必要があります。インストール後の設定時にトポロジ設定をスキップして、コンテンツパックをインストールした場合は、ここに戻り、データ収集を有効にするドメインを次のドメインから選択する必要があります。

フィールド	説明
	<ul style="list-style-type: none"> • RUM • BPM • ServiceHealth • SM • SM_VMware_SiS
データベースインスタンス	<p>プロファイルデータベースインスタンスのシステム識別子 (SID)。 [Oracle RACのデータベース] を選択した場合には表示されません。</p> <p>注: データベースのホスト名、ポート番号、およびSIDに関する詳細については、HP Business Service Management管理者にお問い合わせください。</p>
Windows認証	<p>データベースタイプとして [MSSQL] を選択した場合、MSSQLに対するWindows認証を有効化するオプションがあります。つまり、ユーザーはデータベースをホスティングするWindowsシステムと同じ資格情報をSQL Serverへのアクセスで使用できます。</p>
データベース名	<p>データベースの名前。このフィールドは、データベースタイプとして [MSSQL] を選択した場合のみ表示されます。</p>
Oracle RACのデータベース	<p>このオプションは、データベースタイプとして [Oracle] を選択した場合にのみ表示されます。</p>
サービス名	<p>サービスの名前。このオプションは、[Oracle RACのデータベース] を選択した場合にのみ表示されます。</p>
ORAファイル名	<p>Oracle Real Application Clusterへの接続情報が含まれるORAファイル。このオプションは、[Oracle RACのデータベース] を選択した場合にのみ表示されます。</p>
ユーザー名	<p>プロファイルデータベースユーザーの名前。これは、プロファイルデータベースのセットアップ時にBSM設定ウィザードで指定したものです。</p> <p>注: [Windows認証] オプションを選択した場合、このフィールドは無効になります。</p>

フィールド	説明
パスワード	<p>プロファイルデータベースユーザーのパスワード。これは、プロファイルデータベースのセットアップ時にBSM設定ウィザードで指定したものです。</p> <p>注: [Windows認証] オプションを選択した場合、このフィールドは無効になります。</p>
収集ステーション	このオプションは、リモートシステムにインストールされているコレクターで使用します。

4. [OK] をクリックします。
5. [テスト接続] をクリックし、接続をテストします。
6. [保存] をクリックして、このページで行った変更を保存します。[正常に保存しました] メッセージが情報メッセージペインに表示されます。

新たに作成した管理データベース接続を保存した後、HPE OBR (ローカルコレクターまたはリモートコレクター) では、プロファイルデータベース情報が管理データベースのデータソースから取り出され、ページの [プロファイルデータベース] セクションの下に既存のすべてのプロファイルデータベースのデータソースがリストされます。

プロファイルデータベースのデータソースに対するデータ収集はデフォルトで有効になっています。さらに、収集の頻度は1時間ごとにスケジュールされています。

リモートコレクターの場合、ページの [プロファイルデータベース] セクションにある [データベースタイプ] ドロップダウンボックスから収集ステーションが選択されている必要があります。

プロファイルデータベースのデータソース接続の設定については、『HPE Operations Bridge Reporter 管理者用オンラインヘルプ』を参照してください。

サービス状況 CI に対する KPI データ収集の有効化

KPI は、CI のパフォーマンスと可用性の詳細インジケータです。ビジネスサービス、ビジネスアプリケーション、ビジネスプロセス、およびホストなどの特定の論理サービス状況 CI に属する KPI データは、デフォルトではプロファイルデータベースにログ記録されます。HPE OBR はそのデータをレポート用にデータベースから収集します。

ただし、その他の CI タイプの KPI データは、プロファイルデータベースに自動的にログ記録されません。そのような CI タイプの KPI データをログ記録するには、HP BSM において CI を設定する必要があります。詳細については、『HP Business Service Management - サービス状況の使用』ガイドの「永続データおよび履歴データ」の項を参照してください。このガイドは、Application Performance Management (BAC) 製品として、次の URL に用意されています。

<http://support.openview.hp.com/selfsolve/manuals>

HP OMiデータソースの設定

HP OMiコンテンツパックをインストールする場合、データ収集用のHP OMiデータベース接続を設定する必要があります。以下のOMiデータリポジトリからデータを収集するように、HPE OBRを設定することができます。

- **イベントデータベース:** イベントデータベースでは、OMi (バージョン9.x) データソースから取得されたデータが保管されます。
- **Operationsデータベース:** Operationsデータベースでは、OMi (10以降のバージョン) データソースから取得されたデータが保管されます。

新規のHP OMiデータソース接続を作成する場合は、その前に、管理データベース用のデータソース接続が [管理DB/プロファイルDB] ページに存在することを確認してください。このデータ接続は、管理データベースに保管されるHP OMi用の割り当て済みユーザーグループの情報を取り出すのに必要です。

環境内に1つ以上のOMiセットアップがある場合は、トポロジソースとして設定されたHP BSM RTSMIに属するOMiデータソースを設定する必要があります。

HP OMiデータソース接続を設定するには、次の手順を実行します。

1. [管理コンソール] で、[データソースの設定] > [BSM/OMi] > [OMi] をクリックします。
2. [新規作成] をクリックし、新規HP OMiデータソース接続を作成します。[接続パラメータ] ダイアログボックスが表示されます。
3. [接続パラメータ] ダイアログボックスで、次の値を指定または入力します。

フィールド	説明
データソース	イベントまたはOperations 注: OMiのバージョンが9.xの場合は [イベント]、OMi 10.x以降の場合は [Operations] を選択します。
ホスト名	HP OMiデータベースサーバーのアドレス (IPまたはFQDN)。
ポート	HP OMiデータベースサーバーに照会するためのポート番号。
データベースインスタンス	HP OMiデータベースインスタンスのシステム識別子 (SID)。MSSQLがデフォルト (名前未設定) のデータベースインスタンスを使用するように設定されている場合は、このフィールドを空白のままにしておきます。 データベースのホスト名、ポート番号、およびSIDに関する

フィールド	説明
	詳細は、HP OMiデータベース管理者にお問い合わせください。
データベースタイプ	HP OMiデータベースを作成するために使用されるデータベースエンジンのタイプ。[イベント]として[データソース]を選択した場合、データベースのタイプは[Oracle]または[MSSQL]になります。[Operations]として[データソース]を選択した場合、データベースのタイプは[Oracle]、[MSSQL]、[PostgreSQL]のいずれかになります。
Windows認証	データベースタイプとしてMSSQLを選択した場合、MSSQLに対するWindows認証を有効化するオプションがあります。つまりユーザーは、データベースをホスティングするWindowsシステムと同じ資格情報をSQL Serverへのアクセスで使用できます。
データベース名	データベースの名前。このフィールドは、データベースタイプとしてMSSQLを選択した場合のみ表示されます。
ユーザー名	HP OMiデータベースユーザーの名前。[Windows認証]オプションを選択した場合、このフィールドは無効になって空になります。
パスワード	HP OMiデータベースユーザーのパスワード。[Windows認証]オプションを選択した場合、このフィールドは無効になって空になります。
収集ステーション	ローカルコレクターまたはリモートコレクターのどちらであるかを指定します。

4. [OK] をクリックします。

注: 作成できるHP OMiデータソース接続は1つのみです。接続が作成された後、デフォルトでは[新規作成]ボタンは無効になります。正しい値を入力したことを確認してください。

- [テスト接続] をクリックし、接続をテストします。
- [保存] をクリックして変更を保存します。[正常に保存しました] というメッセージが情報メッセージパネルに表示されます。
- 1つ以上のホストのHP OMiデータ収集スケジュールを変更するには、[頻度のスケジュール] 列で、[時間] ボックスに1~24時間の収集時間を指定します。
- [保存] をクリックして変更を保存します。[正常に保存しました] というメッセージが情報メッセージパネルに表示されます。

第7章:保留中の設定

このページには、トポロジ設定、コンテンツパックコンポーネントのインストール、およびデータソース設定のステータスが表示されます。ステータスに基づいて、残りのコンテンツパックのインストールや、データソースの設定を決定できます。

保留中の設定	
トポロジ設定 トポロジソースが設定されていません	設定する場合は次をクリック Topology Source
コンテンツパックコンポーネントのインストール データソースの選択ページでの選択に基づき、すべての必要なコンテンツパックコンポーネントがインストールされます。	
データソース設定 以下のコンテンツパックコンポーネントについて必要なデータソースへの接続が設定されています:	
<ul style="list-style-type: none"> NetworkPerf_ETL_PerfSPI9_20_RTSM 	設定する場合は次をクリック Generic Database
以下のコンテンツパックコンポーネントについて必要なデータソースへの接続が設定されています:	
<ul style="list-style-type: none"> CrossOprEvent_ETL_OM_Extended CrossOprEvent_ETL_OM 	設定する場合は次をクリック OM
以下のコンテンツパックコンポーネントについて必要なデータソースへの接続が設定されていません:	
<ul style="list-style-type: none"> SysPerf_ETL_SIS_API 	設定する場合は次をクリック SiteScope
以下のコンテンツパックコンポーネントについて必要なデータソースへの接続が設定されていません:	
<ul style="list-style-type: none"> HIKPI_ETL_ServiceHealth VirtualEnvPerf_ETL_VMware_SiteScope SynTrans_ETL_BPM RealUserTrans_ETL_RUM 	設定する場合は次をクリック Profile Database
以下のコンテンツパックコンポーネントについて必要なデータソースへの接続が設定されていません:	
<ul style="list-style-type: none"> OprEvent_ETL_HPOM 	設定する場合は次をクリック HP Operations Manager

次の画像に示すように、選択したソースに基づき保留中の設定が表示されます。保留中の設定を完了するには、対応するリンクをクリックします。

Administration Console	
保留中の設定	
トポロジ設定 トポロジソースが設定されていません	設定する場合は次をクリック Topology Source
コンテンツパックコンポーネントのインストール データソースの選択ページでの選択に基づき、すべての必要なコンテンツパックコンポーネントがインストールされます。	
データソース設定 以下のコンテンツパックコンポーネントについて必要なデータソースへの接続が設定されています:	
<ul style="list-style-type: none"> NetworkPerf_ETL_PerfSPI9_20_RTSM 	設定する場合は次をクリック Generic Database
以下のコンテンツパックコンポーネントについて必要なデータソースへの接続が設定されていません:	
<ul style="list-style-type: none"> CrossOprEvent_ETL_OM_Extended CrossOprEvent_ETL_OM 	設定する場合は次をクリック OM
以下のコンテンツパックコンポーネントについて必要なデータソースへの接続が設定されていません:	
<ul style="list-style-type: none"> SysPerf_ETL_SIS_API 	設定する場合は次をクリック SiteScope
以下のコンテンツパックコンポーネントについて必要なデータソースへの接続が設定されていません:	
<ul style="list-style-type: none"> HIKPI_ETL_ServiceHealth VirtualEnvPerf_ETL_VMware_SiteScope SynTrans_ETL_BPM RealUserTrans_ETL_RUM 	設定する場合は次をクリック Profile Database
以下のコンテンツパックコンポーネントについて必要なデータソースへの接続が設定されていません:	
<ul style="list-style-type: none"> OprEvent_ETL_HPOM 	設定する場合は次をクリック HP Operations Manager

第III部 追加の設定

このセクションでは、HPE OBR用のセキュアな接続を設定するための手順と情報について記載しています。また、キーツールを使用したキーストアファイルの作成、データベースのバックアップのスケジュール設定、データベースのバックアップの復元についても説明します。

追加の設定の詳細については、『HPE Operations Bridge Reporter管理者ガイド』を参照してください。

第8章:セキュアモードでのデータ収集のための HP Operations Agentの設定

HP Operations Agentは、クライアントおよびサーバーアプリケーション間のデータアクセスに対して、HTTP 1.1ベースの通信インターフェイスをサポートします。ただし、セキュア (HTTPS) モードでのHP Operations Agent管理対象ノードからのデータ収集を設定することもできます。HTTPS通信は証明書をベースとするので、HPE OBRシステムおよび管理対象ノード上に証明書がインストールされていなければなりません。HPE OBRシステムは証明書クライアントとして稼働し、証明書サーバー (認証局) はHPOMから提供されます。

エージェントでSSL_SECURITYが有効化されている場合、そのエージェントからHPE OBRへの収集が「信頼済みの証明書が見つかりません」というエラーで失敗します。収集は、HTTPSプロトコルとインストール済みの正しい証明書を使用しなければ実行されません。データを取得するには、証明書サーバーから取得したそのエージェントに対応する証明書を、HPE OBRシステムまたはリモートコレクターにインストールしておく必要があります。

SSL_SECURITYが有効化されているかどうかを確認するには、次のコマンドを実行します。

```
ovconfigchg
```

SSL_SECURITYが [ALL] または [REMOTE] に設定されていれば、SSL_SECURITYは有効化されています。

サーバーからHPE OBRまたはリモートコレクターに証明書をインストールするには、次の手順を実行します。

タスク1:HPE OBRシステム上での設定

1. HPE OBRマシンにログオンします。
2. HPE OBRマシンにインストールされている証明書をリストするため、次のコマンドを実行します。

```
ovcert -list
```

3. HPE OBRマシンにインストールされている証明書を削除するため、次のコマンドを実行します。

```
ovcert -remove <証明書番号>
```

ここでの <証明書番号> は、証明書のエイリアス番号です。

4. プロンプトでYを入力して、証明書を削除します。ステータスメッセージが表示されます。
5. 証明書サーバーをOMサーバーに変更するため、次のコマンドを実行します。

```
ovconfchg -ns sec.cm.client -set CERTIFICATE_SERVER <OMサーバー>
```

ここでの <OMサーバー> は、OMシステムの名前です。

または

次のコマンドを実行して、証明書サーバーの値を手動で変更します。

```
ovconfchg -edit
```

6. 証明書を要求するため、次のコマンドを実行します。

```
ovcert -certreq
```

7. OMシステムにログオンし、次のコマンドを実行して証明書をリストします。

```
ovcm -listpending -l
```

8. 次のコマンドを実行して、HPE OBRマシンに対応する証明書IDを取得します。

```
ovcm -grant <証明書ID> -host <obrホスト名>
```

ここでの<証明書ID>は、HPE OBRシステムに対応する証明書のIDです。

<obrホスト名>は、HPE OBRシステムの名前です。

9. 次のコマンドを実行して、証明書が正しくインストールされていることを確認します。

```
ovcert -list
```

```
ovcert -check
```

10. HPE OBRシステムで次のコマンドを実行します。

```
ovcert -exporttrusted -file <ファイル名> -ovrg server
```

11. HPE OBRシステムで次のコマンドを実行します。

```
ovcert -importtrusted -file <ファイル名>
```

ここでの<ファイル名>は、前の手順で示したファイルの名前です。

12. 次のコマンドを実行して、OMサーバーのキーストアを信頼し、証明書をHPE OBRのローカルキーストアにインポートします。

```
ovcert -trust <OMサーバー> -ovrg server
```

ここでの<OMサーバー>は、OMサーバーの名前です。

13. 次のコマンドを実行してovcを再起動します。

```
ovc - restart
```

有効化されたエージェント、すなわちSSL_SECURITYがALLまたはREMOTEに設定されているエージェントから収集が実行されます。

注: 新しいリモートコレクター用にHTTPSを設定する場合は、「[タスク2a:新しいリモートコレクターでのHTTPSの設定](#)」(110ページ)の手順を実行します。既に存在するリモートコレクター用にHTTPSを設定する場合は、「[タスク2b:既存のリモートコレクターでのHTTPSの設定](#)」(111ページ)の手順を実行します。

タスク2a:新しいリモートコレクターでのHTTPSの設定

新しいリモートコレクターをインストールしたら、次の手順を実行します。

1. %PMDB_HOME%\bin\script (Windowsの場合) または\$PMDB_HOME/bin/script (Linuxの場合) に移動し、次のコマンドを実行してOMサーバーでポーラーを設定します。
perl configurePoller.pl <OMサーバー>
2. そのリモートコレクターをOMサーバーに追加済みで、証明書が受け入れられていることを確認します。
3. リモートコレクターで次のコマンドを実行して、証明書が正しくインストールされていることを確認します。
ovcert -list
ovcert -check
4. HPE OBRシステムにログオンし、次のコマンドを実行します。
C:\>ovcert -exporttrusted -file C:\trusted_cert -ovrg server
5. 上記の手順で生成された証明書を、新しいリモートコレクターにコピーします。
6. リモートコレクターで次のコマンドを実行して、信頼済み証明書ファイルをインポートします。
ovcert -importtrusted -file C:\trusted_cert
7. HPE OBRシステムからコアIDを取得するため、次のコマンドを実行します。
 - a. HPE OBRシステムにログオンし、次のコマンドを実行します。
ovcoreid
上記のコマンドにより表示されたコマンドIDを記録しておく必要があります。
8. リモートコレクターで次のコマンドを実行して、MANAGERおよびMANAGER_IDパラメーターを編集します。
ovconfchg -edit
MANAGERパラメーターに<OBRサーバー名>を設定し、MANAGER_IDパラメーターを、上記の手順で取得したコアIDに設定します。
9. ovcを再起動します。
10. 管理コンソールにログオンします。[管理者]>[コレクターの設定]に移動し、新しいリモートコレクターを設定します。
新しいリモートコレクターの設定については、"[Task 5: Configuring the Collectors Installed on Remote Systems](#)"を参照してください。

タスク2b:既存のリモートコレクターでのHTTPSの設定

1. リモートコレクターで次のコマンドを実行して、既存の証明書を確認し、削除します。
ovcert -list
ovcert -remove
2. 次のコマンドを実行して、証明書サーバーをHPE OBRからOMサーバーに変更します。
ovconfchg -ns sec.cm.client -set CERTIFICATE_SERVER <OMサーバー>
ここでの<OMサーバー>は、OMシステムの名前です。

または

次のコマンドを実行して、証明書サーバーの値を手動で変更します。

```
ovconfchg -edit
```

3. 証明書を要求するため、次のコマンドを実行します。

```
ovcert -certreq
```

4. OMシステムにログオンし、次のコマンドを実行して証明書をリストします。

```
ovcm -listpending -l
```

5. 次のコマンドを実行して、リモートコレクターに対応する証明書IDを取得します。

```
ovcm -grant <証明書ID> -host <リモートコレクターのホスト名>
```

ここでの<証明書ID>は、HPE OBRシステムに対応する証明書のIDです。

<リモートコレクターのホスト名>には、リモートコレクターのホスト名を入力します。

6. リモートコレクターで次のコマンドを実行して、証明書が正しくインストールされていることを確認します。

```
ovcert -list
```

```
ovcert -check
```

7. HPE OBRシステムにログオンし、次のコマンドを実行します。

```
ovcert -exporttrusted -file <ファイル名> -ovrg server
```

ここでの<ファイル名>は、信頼済み証明書のファイル名です。

8. 上記の手順で生成された証明書を、リモートコレクターにコピーします。

9. リモートコレクターで次のコマンドを実行して、信頼済み証明書ファイルをインポートします。

```
ovcert -importtrusted -file <ファイル名>
```

ここでの<ファイル名>は、手順7でエクスポートされた信頼済み証明書のファイル名です。

10. 管理コンソールにログオンします。

11. 正しい収集が実行されていることを確認するため、[管理者]>[コレクターの設定]に移動し、[テスト]をクリックしてから[保存]をクリックします。

第9章:レポートドリル機能設定の設定

HPE OBRには、作成後のレポートを表示するためのSAP BusinessObjects BI起動パッドポータルが備えられています。SAP BusinessObjects BI起動パッドには、日単位、月単位、および年単位レベルで情報を表示するのに使用できるドリル機能が備えられています。ただし、レポート内をドリルアップまたはドリルダウンしても、指定したレベル関連のデータがレポート内のセクションに表示されないことがあります。レポートのブロックが、レポート内の[ドリル]オプション間で同期を喪失します。レポートに必ず正しいデータが表示されるようにするには、SAP BusinessObjects BI起動パッドの[基本設定]の設定を設定しなおすことにより、同期を再確立する必要があります。

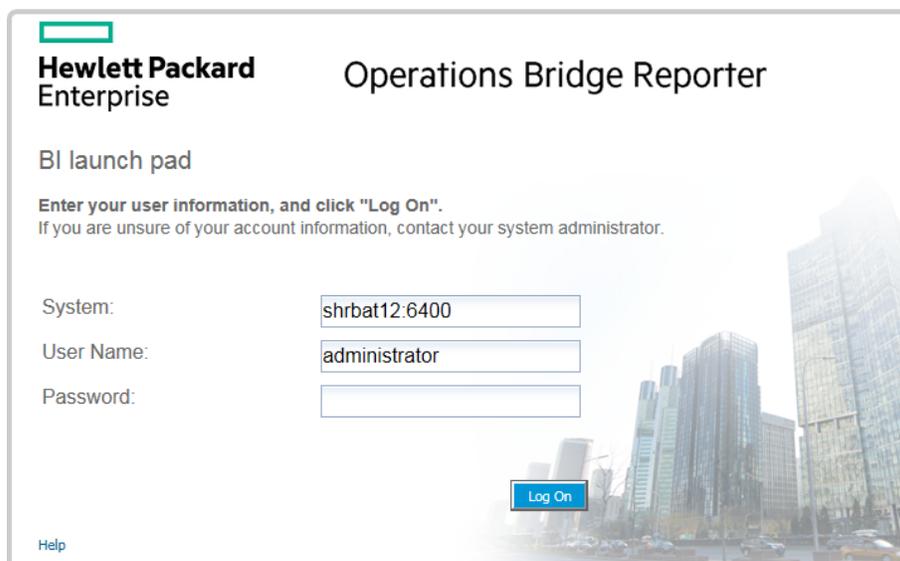
1. 次のURLを使用して、Webブラウザで管理コンソールを起動します。

`http://<OBRサーバーのFQDN>:21411/BSMRApp`

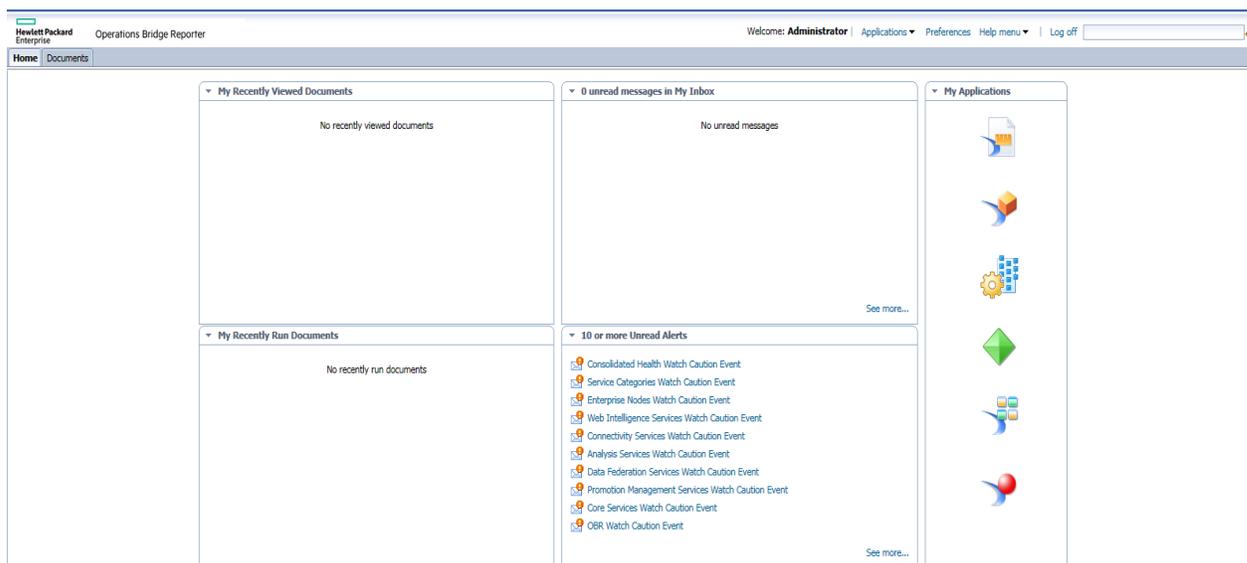
ここでの<OBRサーバーのFQDN>は、OBRのインストール先のシステムの完全修飾ドメイン名です。

ログオンページが表示されます。

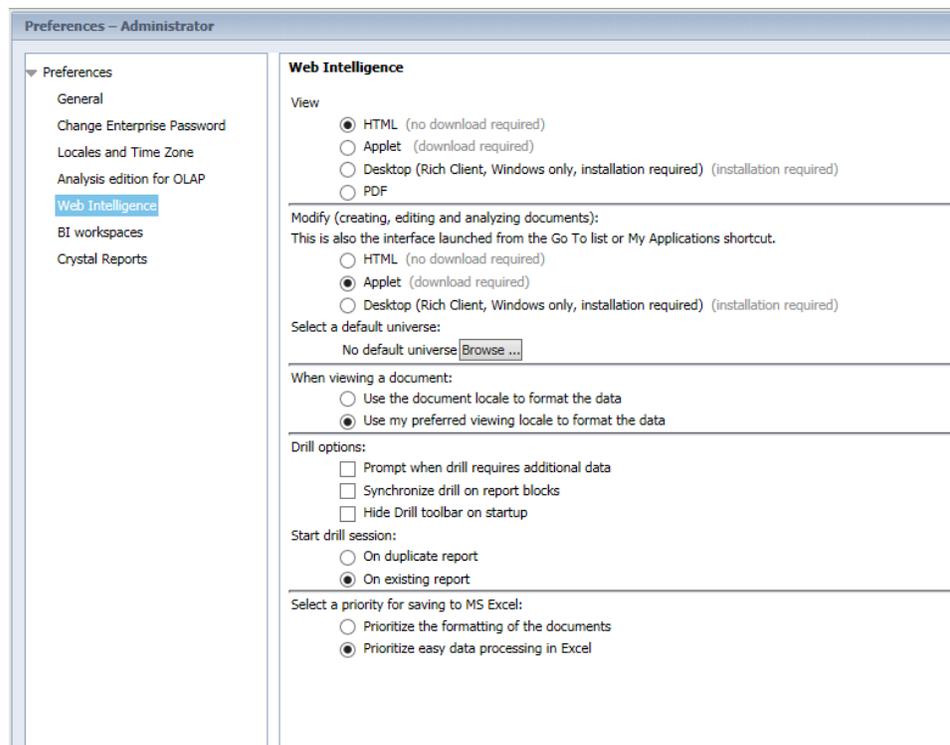
2. [ユーザー名] フィールドに「**administrator**」と入力し、[パスワード] フィールドにパスワードを入力します。
3. [ログオン] をクリックします。
[ホーム] ページが表示されます。
4. 管理コンソールで、[管理] > [SAP BOBJ] をクリックします。
[SAP BOBJ] ページが表示されます。
5. [BI起動パッドの起動] をクリックします。SAP BusinessObjects BI起動パッドのログオンページが表示されます。



6. [ユーザー名] フィールドに「administrator」と入力し、[パスワード] フィールドにパスワードを入力します。
7. [ログオン] をクリックします。SAP BusinessObjects Bi起動パッドの[ホーム] ページが表示されます。



8. [基本設定] をクリックします。[基本設定] ページが開きます。



9. [Web Intelligence] をクリックします。
10. [ドリルオプション] の下の [レポートのブロックのドリルを同期化] オプションを選択し、[保存して閉じる] をクリックします。
11. Webブラウザを閉じます。

第10章:内部アラートサービスの設定

管理コンソールの[ホーム]ページでは、接続性ステータス、ランタイムファイルの配布、コンテンツヘルスのサマリー、収集ステータス、アラートが表示されます。HPE OBRシステムに障害が発生した際にトラップまたは電子メールを送信するよう、HPE OBRを設定することができます。また、HPE OBRの管理コンソールにアラートを表示することもできます。アラートは、サービスが停止した際や、データ処理で障害が発生した際に送信されます。

内部アラートはHPE_PMDB_Platform_IAサービスによって管理されます。内部アラート (IA) は、HPE OBRの一部が動作していない場合にアラートを送信するためのサポートabilityツールです。IAでは、下記のようなサービスの現在のステータスに対してもアラートを送信できます。IAから送信されるアラートのタイプを次に示します。

- 電子メール
- SNMPトラップ
- 管理コンソールのヘルスアラート

IAによって、次のサービスが監視されます。

1. 収集設定
2. 重複ディメンション
3. ディスク上のサーバー実行時データ
4. ディスク上のコレクター実行時データ
5. データ遅延
6. サービスダウン
7. 接続性
8. コレクターの証明書
9. システムリソース

スケジュールされた実行

サービスダウンとシステムリソースの監視は、1時間ごとに行われます。他のすべての機能の監視は、毎日、現地時間の午前8時に行われます。

内部アラートサービスの設定

内部アラートサービスを設定するには、次の手順を実行します。

1. %PMDB_HOME%\data (Windowsの場合) または\$PMDB_HOME/data (Linuxの場合) にあるIA_Config.prpファイルをテキストエディターで開きます。

電子メールを設定するには、次の手順を実行します。

- a. email.toパラメーターに、アラートを受け取る電子メールのIDを入力します。
- b. email.fromパラメーターに、HPE OBRがインストールされているシステムのドメイン名を入力します。
- c. email.hostパラメーターに、メールサーバーのドメイン名を入力します。

サードパーティーのSNMPトラップ受信者にSNMPトラップを送信するようHPE OBRを設定するには、次の手順を実行します。

注: %PMDB_HOME%\config (Windowsの場合) および\$PMDB_HOME/config (Linuxの場合)にあるhp-shr.mibファイルおよびhp-nnmi.mibファイルを、SNMPトラップ受信者がインストールされているシステムにコピーします。これらの.mibファイルをSNMPトラップ受信者にロードします。

- a. snmp.TargetHostパラメーターに、SNMPトラップ受信者がインストールされているシステムのIPアドレスを入力します。
 - b. snmp.TargetPortパラメーターに、SNMPトラップ受信者がインストールされているシステムのポート番号を入力します。
2. IA_Config.prpファイルを保存して閉じます。
 3. HPE OBRがインストールされているシステムで、コマンドプロンプトを開き、内部アラートサービスを有効にするための次のコマンドを実行します。

```
enableIA
```

4. **HPE_PMDB_Platform_IA**サービスを再起動します。
- 管理コンソールでHPE OBRのヘルスアラートを表示することもできます。

1. 管理コンソールにログオンします。[ホーム] ページが表示されます。
2. [ヘルスアラート] タブをクリックして内部アラートを表示します。

アラート



ディスクの空き領域のしきい値の変更

ディスク領域の空き領域が15%未満になると、アラートが送信されます。ディスク領域の空き領域が15%未満になったことを示すアラートを受信した場合は、{PMDB_HOME}/data/にあるconfig.prp内のim.disk.space.warnLimit (空き領域のしきい値) パラメーターを変更して、しきい値をリセットします。

第 11 章 : HPE OBR 用のクライアント 認証 証明書

HPE OBRでは、証明書ベースのクライアント認証を使用できます。HPE OBRは、証明書を検証することによってIDを確認し、SAP BusinessObjectsを使用してユーザーを認証します。

認証と承認

HPE OBRは、認証と承認にSAP BusinessObjectsを使用します。SAP BusinessObjects ユーザーアカウントは、SAP BusinessObjects 中央管理コンソールによって管理されます。HPE OBR管理コンソールにアクセスするには、SAP BusinessObjects管理者である必要があります。HPE OBRは、デフォルトではユーザー名/パスワードに基づいた認証メカニズムを使用します。また、管理コンソールの場合は「[HPE OBR管理コンソールの設定](#)」、SAP BusinessObjects BI起動パッドの場合は「[SAP BusinessObjects BI起動パッドの設定](#)」に記載された手順に従って、クライアント証明書に基づいた認証を使用するようにHPE OBRを設定することもできます。HPE OBRは、証明書を検証することによってユーザーのIDを確認し、SAP BusinessObjectsを使用してユーザーを認証します。

証明書に基づいた認証の前提条件

証明書に基づいた認証を設定する前に、次の前提条件を満たしていることを確認してください。

タスク1:HPE OBRサーバー証明書とプライベートキーが含まれたキーストアファイルの作成

キーストアファイルはパスワードで保護されます。HPE OBRでは、keystorepathプロパティおよびkeystorepasswdプロパティを使用してキーストアの場所およびパスワードを設定することが可能です。keystorepathは、「[タスク4:証明書に基づいた認証の設定](#)」(123ページ)(管理コンソール)、および「[タスク5:証明書に基づいた設定のセットアップ](#)」(128ページ)(SAP BusinessObjects BI起動パッド)で説明されているプロパティファイルで指定する必要があります。Keystoretypeプロパティにより、キーストアのタイプの指定が可能です。サポートされる値は **JKS**と**PKCS12**です。キーストア内の証明書のエイリアスは、次の表で示しているように keyaliasプロパティを使用して指定されます。

プロパティ名	例
Keystorepath	\\/certs\serverkeystore.jks (Linux) C:\\certs\\serverkeystore.jks (Windows)
Keystorepasswd	changeit

プロパティ名	例
Keyalias	shserver
Keystoretype	JKS

タスク2: 認証局 (CA) 証明書が含まれたキーストアファイルの作成

HPE OBRサーバーによって信頼されるCA証明書が含まれたキーストアファイルを作成する必要があります。このファイルはパスワードで保護されます。HPE OBRを使用して、truststorepathプロパティ、truststorepasswdプロパティ、およびtruststoretypeプロパティを次の表で示している値に設定することで、トラストストアを設定できます。truststorepathは「[タスク4: 証明書に基づいた認証の設定](#)」および「[タスク5: 証明書に基づいた設定のセットアップ](#)」で説明されているプロパティファイルで指定する必要があります。

プロパティ名	値の例
truststorepath	\\certrelated\Trustkeystore (Linux) C:\\certrelated\\Trustkeystore (Windows)
truststorepasswd	changeit
truststoretype	JKS

タスク3: 証明書取り消しチェックを有効にする必要があるかどうかを決定

証明書取り消しチェックを有効にするには、com.sun.net.ssl.checkRevocationをtrueに設定する必要があります。HPE OBRは取り消された証明書のチェックについて2つの方法をサポートしています。

- 証明書取り消しリスト (CRL) - CRLには取り消された証明書に関する情報が記載され、CAからダウンロードされます。HPE OBRは、証明書からCRL分布点URLを抽出します。この確認を有効にするには、com.sun.security.enableCRLDPをtrueに設定する必要があります。
- オンライン証明書ステータスプロトコル (OCSP) - OCSPとは、OSCPレスポnderと呼ばれるオンラインサービスを使用して単一の証明書の取り消しをチェックするためのプロトコルです。OCSPプロトコルを使用した取り消しチェックを有効にするには、ocsp.enableをtrueに設定する必要があります。HPE OBRは、証明書からOCSP URLを抽出して証明書を検証します。ローカルOCSPレスポnderサービスを設定する場合、HPE OBRでocsp.responderURLプロパティを使用して設定できます。

HPE OBR管理コンソールで証明書の取り消し、CRL、OCSPを有効にする方法の詳細については、「[HPE OBR管理コンソールの設定](#)」の「[タスク4: 証明書に基づいた認証の設定](#)」を参照してください。

SAP BusinessObjects BI起動パッドで証明書の取り消し、CRL、OSCPを有効にする方法の詳細については、「[SAP BusinessObjects BI起動パッドの設定](#)」の「[タスク4: 証明書に基づいた設定のセットアップ](#)」を参照してください。

タスク4:HPE OBRサーバーとインターネットの間にプロキシが存在する場合のプロキシサーバーアドレスの決定

プロキシサーバーが存在する場合、CRLをダウンロードするためにHPE OBRサーバーを有効にするように設定する必要があります。プロキシサーバーは次のように設定できます。

http.proxyHost	httpプロキシのホスト名を設定します
http.proxyPort	httpプロキシのポート番号を設定します
https.proxyHost	httpsプロキシのホスト名を設定します
https.proxyPort	httpsプロキシのポート番号を設定します

詳細については、「[HPE OBR管理コンソールの設定](#)」の「[タスク4: 証明書に基づいた認証の設定](#)」を参照してください。

タスク5:ユーザー名抽出メカニズムの決定

ユーザー名抽出メカニズムは、証明書の形式に依存します。証明書から抽出されたユーザー名は、SAP BusinessObjectsで設定したユーザー名に一致する必要があります。HPE OBRでは、SubjectDNおよびサブジェクトの別名 (SAN) メカニズムを使用してユーザー名を抽出することが可能です。

ユーザー名抽出メカニズムを設定するには、server.xmlのプロパティを次の表のように設定します。

プロパティ	値
field	SubjectDN
entry	CNに設定するとCNをユーザー名として指定します または OUに設定するとOUをユーザー名として指定します

以下に例を示します。

```
<Realm className="com.hp.bto.bsmr.SHRSecureAuth.auth.SHRRealm"
field="SubjectDN" entry="CN" Type="" oid="" pattern=""
useSubjectDNonMatchFail="true"/>
```

- SubjectDNからユーザー名を抽出するには、次の値をプロパティに設定する必要があります
entryプロパティでは、SubjectDNにおけるユーザー名としてみなす必要のあるエントリを指定できます。entryパラメータを使用する代わりにパターンを使用して、SubjectDNからユー

ザ一名を抽出することもできます。SubjectDNからユーザー名を抽出するパターンを設定するには、patternパラメータを使用します。たとえば、パターンがEMAILADDRESS=(.+@)として設定され、abc@hp.comがemailaddressフィールドの値である場合、abcがユーザー名として抽出されます。

- サブジェクトの別名 (SAN) からユーザー名を抽出するには、次の手順を実行します。
fieldプロパティの値をSANに設定します。Typeプロパティを使用して、SANユーザー名の rcf822NameまたはotherNameの部分を設定できます。
rcf822Nameを設定するには、Typeプロパティの値をrcf822Nameに設定します。
otherNameを設定するには、Typeプロパティの値をotherNameに設定し、オブジェクト識別子 (OID) をOIDに設定します。

デフォルトでは、HPE OBRはSubjectDNのCNからユーザー名を抽出します。

ユーザーがスマートカードのみを使用してログオンできるようにHPE OBRを設定できます。スマートカードログオンを有効にするには、smartcard.enableプロパティをtrueに設定する必要があります。

server.xmlファイルの場所は、次の表で示しています。

設定	パス
管理者コンソール	\$PMDB_HOME/adminserver/conf (Linuxの場合) %PMDB_HOME%\adminserver\conf (Windowsの場合)
SAP BusinessObjects BI 起動パッド	\$PMDB_HOME/BOWebServer/conf (Linuxの場合) %PMDB_HOME%\BOWebServer\conf (Windowsの場合)

タスク6:証明書のインポートおよびブラウザーの設定

- ルートCAによって発行された証明書をHPE OBRサーバーにインポートします。Internet Explorerにある[信頼されたルート証明機関]タブを使用して、Webブラウザーにインポートします。詳細については、Internet Explorerヘルプを参照してください。
- プロトコルTLSv1を受け入れるようにWebブラウザーを設定します。ここで、v1はバージョンを示しています。

注: 高可用性の場合、両方のサーバーを設定します。

HPE OBRでは、管理コンソールおよびSAP BusinessObjects BI起動パッド用に証明書に基づいた認証を設定できます。

ユーザー名抽出方法の設定

ユーザー名抽出は、server.xmlファイルを編集して設定できます。詳細については、「[タスク5:ユーザー名抽出メカニズムの決定](#)」の説明を参照してください。

HPE OBR管理コンソールの設定

続行する前に、HPE OBRのインストール後の設定が正常に完了していることを確認してください。証明書に基づいた認証を行うためにHPE OBR管理コンソールを設定するには、次の手順を実行します。

タスク1:信頼された認証の設定

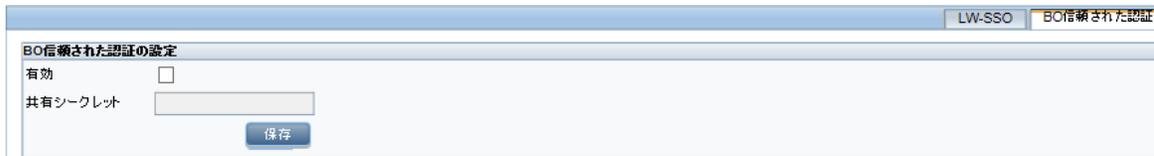
共有シークレットは、信頼された認証を確立するために使用されます。共有シークレットは、文字形式のみで入力する必要があります。

1. ブラウザーで`https://<OBRサーバーのFQDN>:21412/BSMRApp`と入力し、HPE OBRの管理コンソールにログオンします。

ここでの<OBRサーバーのFQDN>は、OBRのインストール先のシステムの完全修飾ドメイン名です。

2. [管理] > [セキュリティ] > [BO信頼された認証] に移動します。

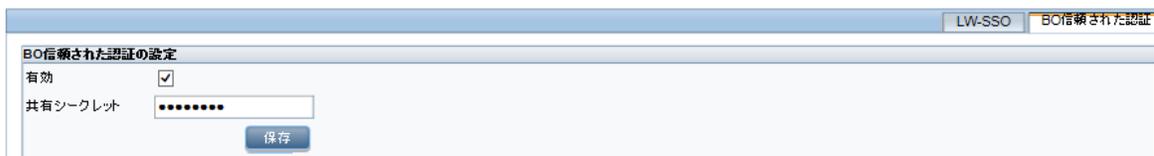
セキュリティ



3. [有効] チェックボックスを選択します。
4. [共有シークレット]に入力します。
5. [保存]をクリックします。

設定が正常に完了したら、次のメッセージが表示されます。

セキュリティ



タスク2:HPE_PMDB_Platform_Administratorサービスの停止

• Windowsの場合

HPE_PMDB_Platform_Administratorサービスを停止するには、次の手順を実行します。

- a. [スタート] > [ファイル名を指定して実行] をクリックします。[ファイル名を指定して実行] ダイアログボックスが開きます。

- b. [名前] フィールドに `services.msc` と入力し、**Enter** キーを押します。[サービス] ウィンドウが開きます。
- c. 右側のペインで、`HPE_PMDB_Platform_Administrator` を右クリックし、**[停止]** をクリックします。

• Linuxの場合

`/etc/init.d` に移動し、次のコマンドを実行します。

```
service HPE_PMDB_Platform_Administrator stop
```

タスク3: config.prpファイルの設定

`%PMDB_HOME%\data` フォルダー (Windowsの場合) または `$PMDB_HOME/data` (Linuxの場合) にある `config.prp` ファイルで、次に示すようにフィールドに値を設定します。

フィールド	値
<code>shr.loginMethod</code>	<code>certbased</code>
<code>shr.auth.classess</code>	<code>com.hp.bto.bsmr.security.auth.BOTrustedAuthenticator</code>

タスク4: 証明書に基づいた認証の設定

`$PMDB_HOME/data` (Linuxの場合) および `%PMDB_HOME%\data` フォルダー (Windowsの場合) にある `adminserverclientauth.prp` ファイルで次のパラメーターを指定します。次のフィールドを編集し、次の説明に従って値を設定します。

フィールド	説明
<code>truststorepath</code>	トラストストアファイルのフルパス。クライアント証明書を検証するために使用されます。
<code>truststorepasswd</code>	トラストストアにアクセスするためのパスワード。
<code>truststoretype</code>	トラストストアに使用されるキーストアのタイプ。
<code>keystorepath</code>	ロードされるサーバー証明書を保存したキーストアファイルのフルパス。
<code>keystorepasswd</code>	指定したキーストアファイルからサーバー証明書にアクセスするために使用されるパスワード。
<code>keystoretype</code>	サーバー証明書に使用されるキーストアファイルのタイプ。
<code>keyAlias</code>	キーストア内のサーバー証明書に使用されるエイリアス

フィールド	説明
smartcard.enable	スマートカードログオンを有効にする場合はtrueに設定し、スマートカードログオンを無効にする場合はfalseに設定します。
http.proxyHost	HTTPプロキシのホスト名。
http.proxyPort	HTTPプロキシのポート番号。
https.proxyHost	HTTPSプロキシのホスト名。
https.proxyPort	HTTPSプロキシのポート番号。
com.sun.net.ssl.checkRevocation	取り消しを有効にする場合はtrueに設定し、取り消しを無効にする場合はfalseに設定します。
com.sun.security.enableCRLDP	CRLの取り消しを有効にする場合はtrueに設定し、無効にする場合はfalseに設定します。
crlFile	CRLファイルパスを入力します。
ocsp.enable	OSCPに基づいた取り消しを有効にする場合はtrueに設定し、無効にする場合はfalseに設定します。
ocsp.responderURL	OCSPレスポナーURLを設定します。

注: CRLに基づいた取り消しをtrueに設定する場合はOSCPに基づいた取り消しをfalseに設定し、OSCPに基づいた取り消しをtrueに設定する場合はCRLに基づいた取り消しをfalseに設定する必要があります。

プロパティ値を設定した後で、次の手順を実行します。

• Windowsの場合

- a. %PMDB_HOME%\binフォルダーに移動します。
- b. 次のコマンドを実行します。

```
perl adminserverclientauth.pl -authType clientcert -configFile <
設定ファイルの場所 >
```

ここで、<設定ファイルの場所>とはadminserver.prpファイルのフルパスです。

たとえば、%PMDB_HOME%\data\adminserverclientauth.prpです。

• Linuxの場合

- a. \$PMDB_HOME/binフォルダーに移動します。
- b. 次のコマンドを実行します。

```
perl adminserverclientauth.pl -authType clientcert -configFile <
設定ファイルの場所>
```

ここで、<設定ファイルの場所>とはadminserver.prpファイルのフルパスです。

たとえば、\$PMDB_HOME/data/adminserverclientauth.prpです。

タスク5:ユーザー名抽出の設定

SubjectDNフィールドのCNエントリがHPE OBRによってユーザー名として抽出されることを確認してください。異なるユーザー名抽出メカニズムが必要な場合は、server.xmlファイルを変更します。この手順については「[タスク5:ユーザー名抽出メカニズムの決定](#)」の説明を参照してください。

タスク6:HPE_PMDB_Platform_Administratorサービスの開始

HPE_PMDB_Platform_Administratorサービスを開始するには、次の手順を実行します。

• Windowsの場合

- a. [スタート]>[ファイル名を指定して実行]をクリックします。[ファイル名を指定して実行]ダイアログボックスが開きます。
- b. [名前]フィールドにservices.mscと入力し、**Enter**キーを押します。[サービス]ウィンドウが開きます。
- c. 右側のペインで、HPE_PMDB_Platform_Administratorを右クリックし、[開始]をクリックします。

• Linuxの場合

/etc/init.dに移動し、次のコマンドを実行します。

```
service HPE_PMDB_Platform_Administrator start
```

タスク7:証明書に基づいた認証の確認

1. Webブラウザでhttps://<OBRサーバーのFQDN>:21412/BSMRAppと入力し、HPE OBRの管理コンソールにログオンします。
ここでの<OBRサーバーのFQDN>は、OBRのインストール先のシステムの完全修飾ドメイン名です。
2. [デジタル証明書でログオン]をクリックします。

SAP BusinessObjects BI起動パッドの設定

注: リモートSAP BusinessObjectsシステムを使用したHPE OBRのカスタムインストールで、<インストールディレクトリ>/PMDB/adminServer/confからSAP BusinessObjectsがインストールされているシステム上の<インストールディレクトリ>/PMDB/BOWebServer/confにSHRTrustedPrinciple.confをコピーします。

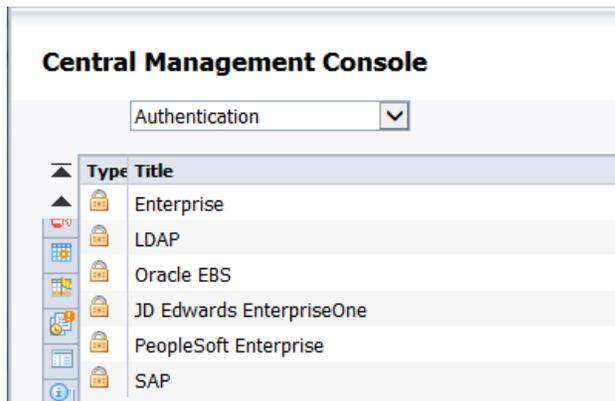
タスク1:信頼された認証の設定

1. 中央管理コンソール(CMC)にログオンします。

[System Configuration Wizard] が表示されます。[Close] をクリックして、ウィザードを閉じます。[Central Management Console] ページが表示されます。

注: CMCへのログオン時に毎回 [System Configuration Wizard] が表示されないようにするには、[Don't show this wizard when cms is started] のチェックボックスをオンにします。

2. [Authentication] を選択し、[Enterprise] をダブルクリックします。



[Enterprise] ウィンドウが表示されます。

3. [Trusted Authentication] で、次の手順を実行します。

- a. [Trusted Authentication is enabled] を選択します。

- b. [New Shared Secret] をクリックします。

共有シークレットが生成され、ダウンロード可能であることを示すメッセージが表示されます。

- c. [Download Shared Secret] をクリックします。

共有シークレットは、クライアントとCMSが信頼を確立するために使用します。最初にサーバーに信頼された認証を設定してから、クライアントに設定する必要があります。

[File Download] ダイアログボックスが表示されます。

- d. [Save] をクリックし、次のディレクトリのいずれかにTrustedPrincipal.confファイルを保存します。

Windowsの場合:

- <SAPのインストールディレクトリ>\SAP BusinessObjects Enterprise XI 4.0\win64_x64\

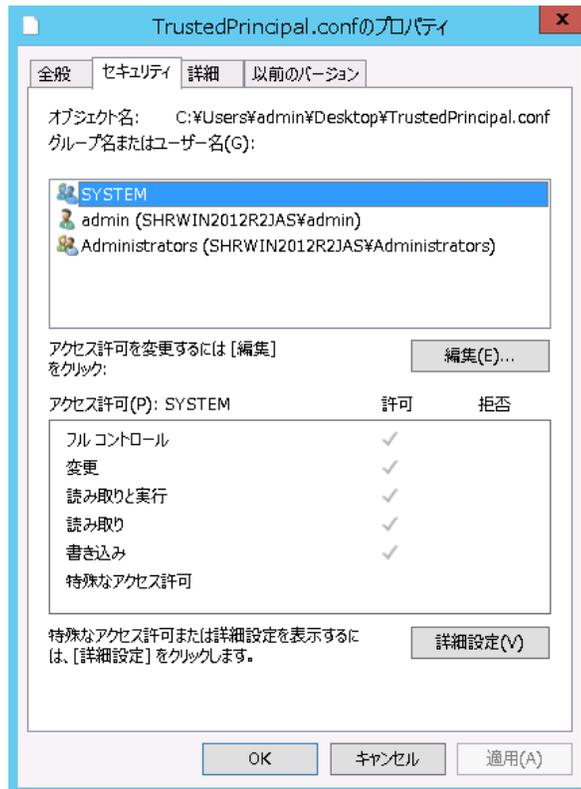
Linuxの場合:

- <SAPのインストールディレクトリ>/sap_bobj/enterprise_xi40/linux_x86

- e. TrustedPrincipal.confファイルに777権限を付与します。

Windowsの場合:

- TrustedPrincipal.confファイルを保存した場所に移動します。
- ファイルを右クリックし、[プロパティ]をクリックします。[TrustedPrincipal.confのプロパティ] ウィンドウが表示されます。
- [セキュリティ]をクリックし、[グループ名またはユーザー名]から[Administrator]を選択し、[編集]をクリックしてアクセス許可を変更します。



- [読み取り]、[書き込み]、[読み取りと実行] オプションのチェックボックスをオンにし、[OK]をクリックします。

Linuxの場合:

- TrustedPrincipal.confファイルを保存した場所に移動します。
- 次のコマンドを実行して完全な権限を与えます。

```
chmod 777 TrustedPrincipal.conf
```

4. [Update]をクリックします。
5. [Log Off]をクリックして、中央管理コンソールを終了します。

タスク2:SAP BusinessObjects Webserverサービスの停止

注: HPE OBRのカスタムインストールでは、SAP BusinessObjectsがインストールされているシステムでこのタスクを実行します。

• Windowsの場合

SAP BusinessObject WebServerサービスを停止するには、次の手順を実行します。

- a. 管理者としてホストシステムにログオンします。
 - b. [スタート]>[ファイル名を指定して実行]をクリックします。[ファイル名を指定して実行]ダイアログボックスが開きます。
 - c. [名前]フィールドにservices.mscと入力し、Enterキーを押します。[サービス]ウィンドウが開きます。
 - d. **Business Object WebServer**サービスを右クリックし、[停止]を選択してサービスを停止します。
- **Linuxの場合**
 - a. /opt/HP/BSM/PMDB/BOWebServer/binに移動します。
 - b. 次のコマンドを実行します。

```
./shutdown.sh
```

タスク3:HPE_PMDB_Platform_Administratorサービスの停止

- **Windowsの場合**

HPE_PMDB_Platform_Administratorサービスを停止するには、次の手順を実行します。

 - a. [スタート]>[ファイル名を指定して実行]をクリックします。[ファイル名を指定して実行]ダイアログボックスが開きます。
 - b. [名前]フィールドにservices.mscと入力し、Enterキーを押します。[サービス]ウィンドウが開きます。
 - c. 右側のペインで、HPE_PMDB_Platform_Administratorを右クリックし、[停止]をクリックします。
- **Linuxの場合**

/etc/init.dに移動し、次のコマンドを実行します。

```
service HPE_PMDB_Platform_Administrator stop
```

タスク4:config.prpファイルの編集

%PMDB_HOME%\dataフォルダー (Windowsの場合)または\$PMDB_HOME/data (Linuxの場合)にあるconfig.prpファイルで、指定された値をフィールドに設定します。

フィールド	値
bo.protocol	https

タスク5:証明書に基づいた設定のセットアップ

注: HPE OBRのカスタムインストールでは、SAP BusinessObjectsがインストールされているシステムでこのタスクを実行します。

\$PMDB_HOME/data (Linuxの場合) および%PMDB_HOME%\dataフォルダー (Windowsの場合) にあるBOclientauth.prpファイルの次のフィールドを、下記の説明で指定している値に設定します。

フィールド	説明
truststorepath	truststoreファイルへのフルパス
truststorepasswd	トラストストアにアクセスするためのパスワード
truststoretype	トラストストアに使用されるキーストアのタイプ
keystorepath	ロードされるサーバー証明書を保存したキーストアファイルのフルパス。
keystorepasswd	指定したキーストアファイルからサーバー証明書にアクセスするために使用されるパスワード。
keystoretype	サーバー証明書に使用されるキーストアファイルのタイプ。
keyAlias	キーストア内のサーバー証明書に使用されるエイリアス。
smartcard.enable	スマートカードログオンを有効にする場合はtrueに設定し、無効にする場合はfalseに設定します。
http.proxyHost	HTTPプロキシのホスト名
http.proxyPort	HTTPプロキシのポート番号
https.proxyHost	HTTPSプロキシのホスト名
https.proxyPort	HTTPSプロキシのポート番号
com.sun.net.ssl.checkRevocation	取り消しを有効にする場合はtrueに設定し、無効にする場合はfalseに設定します。
com.sun.security.enableCRLDP	CRLの取り消しを有効にする場合はtrueに設定し、無効にする場合はfalseに設定します。
crlFile	CRLファイルパスを入力します。
ocsp.enable	OSCPに基づいた取り消しを有効にする場合はtrueに設定し、無効にする場合はfalseに設定します。
ocsp.responderURL	OSCPレスポナーURLを設定します。

注: CRLに基づいた取り消しをtrueに設定する場合はOSCPに基づいた取り消しをfalseに設定し、OSCPに基づいた取り消しをtrueに設定する場合はCRLに基づいた取り消しをfalseに設定する必要があります。

プロパティを設定したら、次の手順を実行します。

• Windowsの場合

- a. %PMDB_HOME%\binフォルダーに移動します。
- b. 次のコマンドを実行します。

```
perl B0clientauth.pl -authType clientcert -configFile <設定ファイルの場所>
```

ここで、<設定ファイルの場所>とはB0clientauth.prpファイルのフルパスです。たとえば、%PMDB_HOME%\data\B0clientauth.prpです。

• Linuxの場合

- a. \$PMDB_HOME/binフォルダーに移動します。
- b. 次のコマンドを実行します。

```
perl B0clientauth.pl -authType clientcert -configFile <設定ファイルの場所>
```

ここで、<設定ファイルの場所>とはB0clientauth.prpファイルのフルパスです。

たとえば、\$PMDB_HOME/data/B0clientauth.prpです。

タスク6:SAP BusinessObjects WebServerサービスの開始

注: HPE OBRのカスタムインストールでは、SAP BusinessObjectsがインストールされているシステムでこのタスクを実行します。

• Windowsの場合

- a. 管理者としてホストシステムにログオンします。
- b. [スタート]>[ファイル名を指定して実行]をクリックします。
- c. [名前]フィールドにservices.mscと入力し、**Enter**キーを押します。[サービス]ウィンドウが開きます。
- d. **SAP BusinessObject WebServer**サービスを右クリックし、[開始]を選択してサービスを開始します。

• Linuxの場合

- a. /opt/HP/BSM/PMDB/B0WebServer/binフォルダーに移動します。
- b. ./startup.shコマンドを実行します。

タスク7:HPE_PMDB_Platform_Administratorサービスの開始

• Windowsの場合

HPE_PMDB_Platform_Administratorサービスを開始するには、次の手順を実行します。

- a. [スタート]>[ファイル名を指定して実行]をクリックします。[ファイル名を指定して実行]ダイアログボックスが開きます。
- b. [名前]フィールドにservices.mscと入力し、Enterキーを押します。[サービス]ウィンドウが開きます。
- c. 右側のペインで、HPE_PMDB_Platform_Administratorを右クリックし、[開始]をクリックします。

- **Linuxの場合**

/etc/init.dに移動し、次のコマンドを実行します。

```
service HPE_PMDB_Platform_Administrator start
```

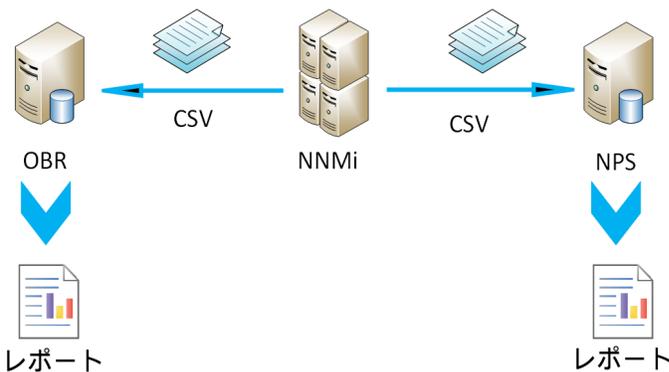
タスク8:証明書に基づいた認証の確認

1. Webブラウザでhttps://<ホスト名>:8443/BIと入力し、HPE OBRのBI起動パッドにログオンします。
2. ログオンページが表示されます。[Login with Digital Certificate]をクリックし、デジタル証明書を使用してBI起動パッドにログオンします。

第12章:Network Node Manager i (NNMi) と統合するためのHPE OBRの設定

注: 以下の設定手順は、Component Healthおよび/またはInterface Healthコンテンツパックをインストールした場合にのみ実行する必要があります。

HPE OBRは、NNMiと統合してネットワークパフォーマンスデータを収集します。NNMiは、HPE OBRとNetwork Performance Server (NPS) の両方に、.csvファイルの形式でネットワークパフォーマンスデータを渡します。HPE OBRはNNMiから受け取ったこれらの.csvファイルをデータウェアハウスに保存して、レポートを生成します。



前提条件

設定手順を実行する前に、次の前提条件が満たされていることを確認する必要があります。

- NNMiとNPSが正しくインストールおよび設定されている。
- HPE OBRと一緒にComponent Healthおよび/またはInterface Healthコンテンツパックがインストールされている。
- **HPE_PMDB_Platform_NRT_ETL** サービスが稼働している。

注: インストーラーで、既存の「Network」コンテンツパックと新しいNRT ETLベースのネットワークコンテンツが同時にインストールされないよう注意してください。

HPE OBRとNNMiの統合を設定してネットワークデータを収集できるようにするには、次の手順を実行します。

タスク1:NNMiシステムの設定

HPE OBRとNNMiの統合を設定するために、次の手順を確認してください。

1. NNMiとNPSが稼働していることを確認します。
2. 共有ドライブの詳細が必要です。
詳細を入手するには、システム管理者に問い合わせるか、/opt/OV/newconfigフォルダー (**Linuxの場合**) およびC:\Program Files (x86)\HP\HP BTO Software\newconfigフォルダー (**Windowsの場合**) で、nnmenableperfspi.ovplスクリプトの最近の出力を確認してください。
最も新しく作成されたnnmEnableNps.20xxxxxxxxxxxxx.cfgというファイル名のファイルを探します。
ここでのxxx は、最新のタイムスタンプです。
3. \$OvDataDir/shared/perfSpi/conf/nmsAdapter.confのexportToSHRプロパティをTRUEに設定し、NNMiを再起動します。

タスク2:HPE OBRシステムの設定

NNMiが収集したネットワークパフォーマンスデータを取得するようにHPE OBRを設定するには、次の手順を実行します。

Windowsの場合:

1. **HPE_PMDB_Platform_NRT_ETL**プロパティを編集します。このプロパティを編集するには、次の手順を実行します。
 - a. [スタート]>[ファイル名を指定して実行]をクリックします。[ファイル名を指定して実行]ダイアログボックスが表示されます。
 - b. [名前]フィールドにservices.mscと入力し、**Enter**キーを押します。[サービス]ウィンドウが表示されます。
 - c. 右のペインで、**HPE_PMDB_Platform_NRT_ETL**を右クリックし、[停止]をクリックします。
 - d. **HPE_PMDB_Platform_NRT_ETL**を右クリックし、[プロパティ]をクリックします。[**HPE_PMDB_Platform_NRT_ETL Service**のプロパティ]ダイアログボックスが表示されます。
 - e. [ログオン]タブで、[アカウント]を選択します。
 - f. フィールドに**DOMAIN\Administrator**と入力します (ここで、管理者は管理者権限を持つローカルユーザーです)。
 - g. ユーザーパスワードを [パスワード] フィールドに入力します。
 - h. パスワードを [パスワードの確認入力] フィールドに再度入力します。
 - i. [適用]をクリックし、[OK]をクリックします。
2. コマンドラインインターフェイスで次のスクリプトを実行します。

```
perl %PMDB_HOME%\bin\mountSharedDirectory.ovpl -n <ホスト名>
```

ここでの<ホスト名>は、NNMiシステムのホスト名です。
リモート共有ディレクトリがHPE OBRシステムにマウントされます。

3. %PMDB_HOME%\config\NRT_ETL\rconfig\NNMPerformanceSPI.cfgファイルを編集します。
PRSPI_NNMDIR //NNMHOSTNAME/PerfSpiパラメーターで、NNMHOSTNAMEをNNMiシステムの実際のホスト名に置き換えます。
たとえば、PRSPI_NNMDIR //IWFtest.hpswlab.s.adapps.hp.com/PerfSpiのようになります。
4. [サービス] ウィンドウの右のペインで、**HPE_PMDB_Platform_NRT_ETL**を右クリックして**[開始]**をクリックし、サービスを開始します。

Linuxの場合:

1. コマンドラインインターフェイスで次のスクリプトを実行します。

```
perl $PMDB_HOME/bin/mountSharedDirectory.ovpl -n <ホスト名>
```

ここでの<ホスト名>は、NNMiシステムのホスト名です。
リモート共有ディレクトリがHPE OBRシステムにマウントされます。
2. \$PMDB_HOME/config/NRT_ETL/rconfig/NNMPerformanceSPI.cfgファイルを編集します。
PRSPI_NNMDIR /mnt/NNMHOSTNAME/PerfSpiパラメーターで、NNMHOSTNAMEをNNMiシステムの実際のホスト名に置き換えます。
たとえば、PRSPI_NNMDIR /mnt/IWFtest.hpswlab.s.adapps.hp.com/PerfSpiのようになります。
3. 次のコマンドを実行してETLを開始します。

```
perl $PMDB_HOME/bin/startETL.ovpl
```

注: ETLのステータスを確認するには、`perl $PMDB_HOME/bin/statusETL.ovpl` スクリプトを実行します。ETLサービスを開始および停止するには、それぞれ`perl $PMDB_HOME/bin/startETL.ovpl`および`perl $PMDB_HOME/bin/stopETL.ovpl`を実行します。

サービスのステータスでDEADが返された場合は、ETLサービスを停止してから開始します。

\$PMDB_HOME/NRT_ETL.logファイルで詳細を確認することができます。

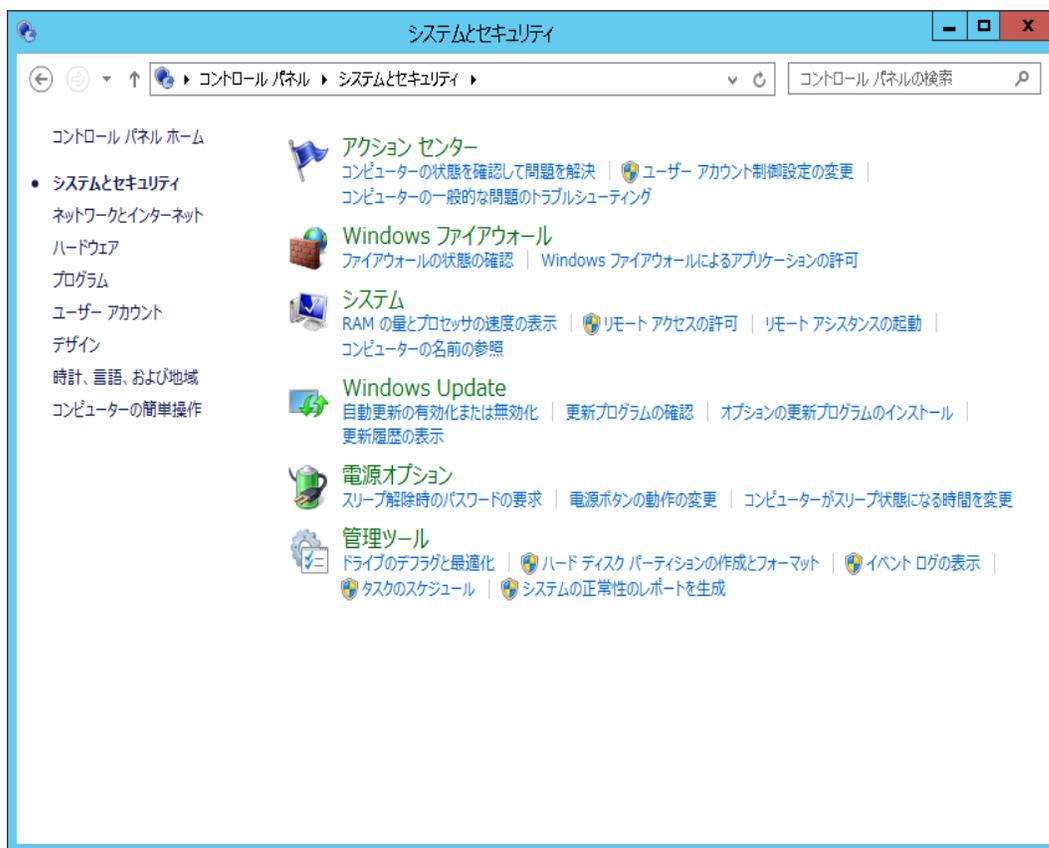
注: 収集が開始されない場合は、サービスを手動で再起動する必要があります。

これで、NNMiシステムと統合するためのHPE OBRの設定が完了しました。

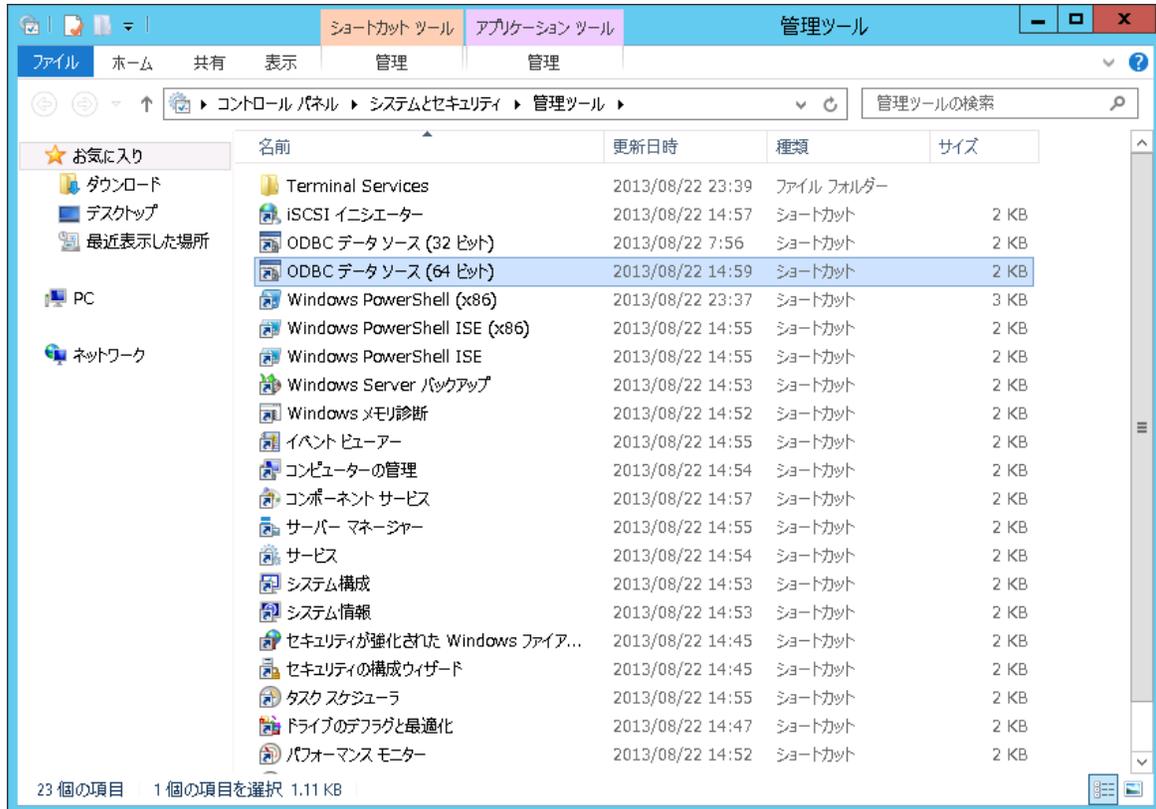
第13章:Verticaデータベース接続用のWindows上のDSNの設定

Verticaデータベースへの接続用のDSNを作成するには、次の手順を実行します。

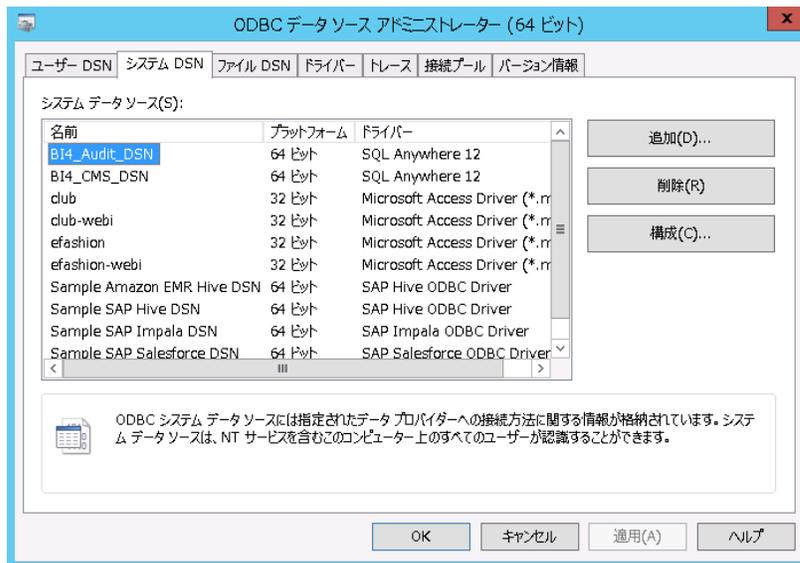
1. WindowsにインストールされているHPE OBRシステムにログオンします。
2. [スタート]>[コントロールパネル]をクリックし、[システムとセキュリティ]をクリックします。[システムとセキュリティ]ウィンドウが表示されます。



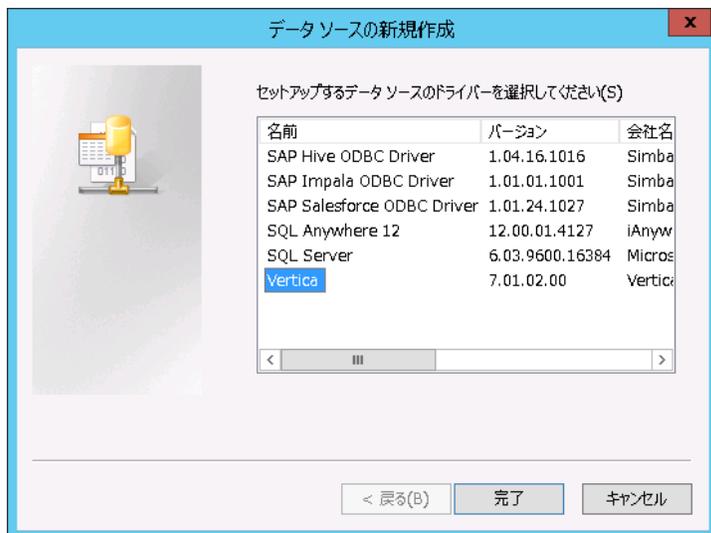
3. [管理ツール]をクリックします。[管理ツール]ウィンドウが表示されます。



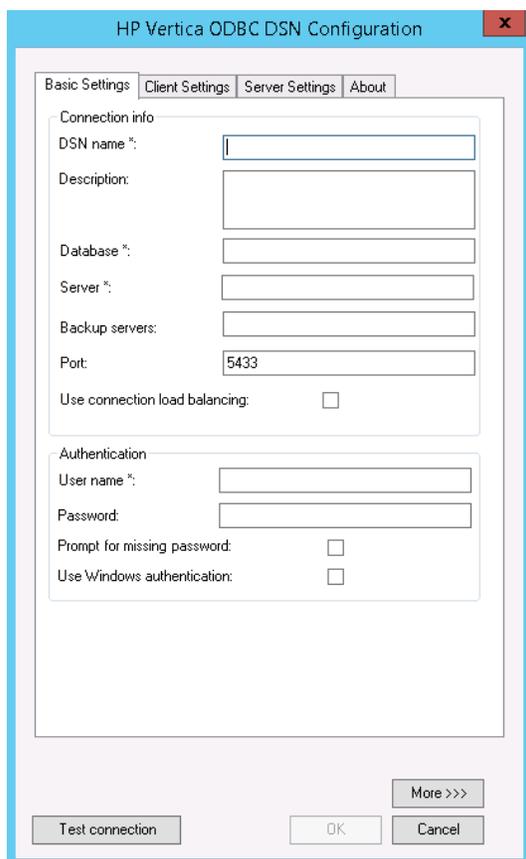
4. [ODBC データソース (64 ビット)] をダブルクリックします。[ODBC データソース アドミニストレーター (64 ビット)] ウィンドウが表示されます。



5. [システム DNS] タブをクリックしてから、[追加] をクリックします。[データソースの新規作成] ウィンドウが表示されます。



6. **[Vertica]** をクリックして **[完了]** をクリックするか、**[Vertica]** をダブルクリックします。**[HP Vertica ODBC DSN 設定]** ウィンドウが表示されます。



7. **[DSN 名]** に「**SHRDB**」と入力します。
8. **[データベース]** に「**pmdb**」と入力します。
9. **[サーバー]** にデータベースのホスト名を入力します。
10. **[ユーザー名]** にVerticaデータベースのユーザー名を入力します。

11. [パスワード]にVerticaデータベースのパスワードを入力します。
12. [接続のテスト]をクリックしてから[OK]をクリックします。
HPE OBRシステムとVerticaデータベースとの間にDSNが確立されます。

第14章:複数のプロファイルデータベースの設定

OBRは、HP BSM/OMi環境内にデプロイされた複数のプロファイルデータベースからのデータ収集の設定をサポートします。

注: トポロジソースがRTSMである場合のみ、次の手順を実行します。

注: OMi 10 (およびそれ以降のバージョン) の場合は、Operationsデータベースのサポート用にこのタスクを実行した後、データベースを設定します。Operationsデータベースの設定については、「[HP OMiデータソースの設定](#)」(105ページ)を参照してください。

すべての既存のプロファイルデータベースがOBRによって確実に識別されて管理コンソールに表示されるようにするには、次の手順を実行します。

タスク1: HPE_PMDB_Platform_Verticaサービスの開始

1. VerticaがインストールされているLinuxシステム上で、次のコマンドを実行します。

```
cd /etc/init.d
service HPE_PMDB_Platform_Vertica status
```

2. HPE_PMDB_Platform_Verticaサービスのステータスがstoppedであった場合は、次のコマンドを実行して、HPE_PMDB_Platform_Verticaデータベースサービスを開始します。

```
service HPE_PMDB_Platform_Vertica start
```

タスク2: BSMホストシステムからHPE OBRシステムへの設定ファイルのコピー

1. リモートアクセスを使用してHP BSMホストシステムにログオンします。

注: HP BSMのセットアップが分散型である場合、データ処理サーバーに加えてゲートウェイサーバーを経由してアクセスできます。HPは、ゲートウェイサーバーを使用することを推奨します。

2. %topaz_home%\Confフォルダーを参照します。
3. OBRシステム上で次のファイルを%topaz_home%\Confフォルダーから%PMDB_HOME%\configフォルダーにコピーします。
 - a. encryption.properties
 - b. seed.properties

注: Oracle RACで管理/プロファイルデータベースを設定する場合、HPE OBRシステム上でbsm-tnsnames.oraファイルも%PMDB_HOME%\configフォルダーにコピーする必要があります。

ファイルをコピーしたら、HPE_PMDB_Platform_Verticaサービスを再起動します。

タスク3:HPE OBRシステムでのHPE_PMDB_Platform_Verticaサービスの再起動

Windowsの場合:

1. [スタート] > [ファイル名を指定して実行] をクリックします。[ファイル名を指定して実行] ダイアログボックスが表示されます。
2. [名前] に `service.msc` と入力します。[サービス] ウィンドウが表示されます。
3. 右側のペインで、[HPE_PMDB_Platform_Vertica] サービスを右クリックしてから [再起動] をクリックします。
4. [サービス] ウィンドウを閉じます。

Linuxの場合:

1. コマンドプロンプトに次のコマンドを入力します。

```
service HPE_PMDB_Platform_Vertica restart
```

注意: 後で復元が必要になる場合に備えて、必ずHPE OBRのバックアップを取得するようにしてください。データのバックアップを取得できない場合、データを永久に消失するリスクが生じます。詳細については、「[第IV部 データベースのバックアップとリカバリ](#)」(146ページ)を参照してください。

第15章:管理者ユーザーのデフォルトパスワードの変更

注: 次の手順は、以下の場合にのみ適用可能です。

- 管理コンソールに初めてログオンした。
- ユーザーが**administrator**である。
- デフォルトのパスワードを変更する。

管理者ユーザー名のデフォルトのパスワードを変更するには、次の手順を実行します。

1. 次のURLを使用して、Webブラウザで管理コンソールを起動します。

`https://<OBR_Serve_FQDN>:21412/BSMRApp`

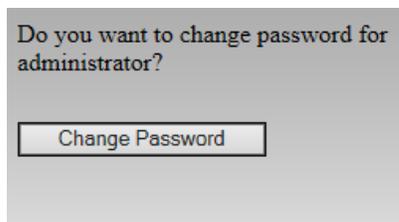
ここでの<OBRサーバーのFQDN>は、OBRのインストール先のシステムの完全修飾ドメイン名です。

HPE Operations Bridge Reporter 管理コンソールログオンページが表示されます。



© 2015 Hewlett Packard Enterprise Company, L.P.

2. ユーザー名フィールドに「**administrator**」と入力し、パスワードフィールドにデフォルトのパスワードを入力します。[Login] をクリックします。
パスワード変更ページが表示されます。



3. パスワードを変更するには、[**Change Password**] をクリックします。次のページが表示されます。
 - a. [**Old Password**] フィールドにデフォルトのパスワードを入力します。
 - b. [**New Password**] フィールドに新しいパスワードを入力します。

注: 新しく入力するパスワードは、6文字以上である必要があります。

- c. 新しいパスワードを [**Confirm Password**] フィールドに再度入力します。[**Change Password**] をクリックします。次のメッセージが表示されます。

パスワードは正常に変更されました

Click [here](#) to go to the login page

4. リンクをクリックして、新しいパスワードで管理コンソールにログオンします。

第16章:管理者ユーザーのパスワードの変更

デフォルトの管理者ユーザー名のパスワードを作成する場合は、次の手順を実行します。

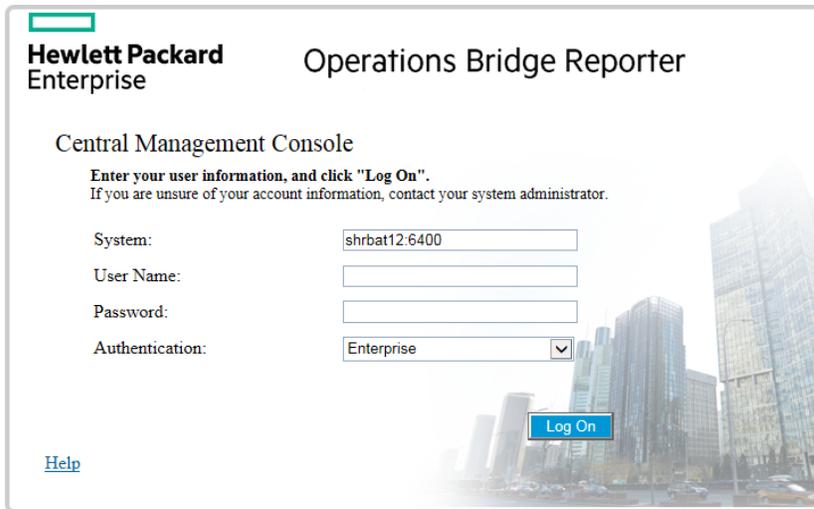
1. 次のURLを使用して、Webブラウザで管理コンソールを起動します。

`https://<OBR_Serve_FQDN>:21412/BSMRApp`

ここでの<OBRサーバーのFQDN>は、OBRのインストール先のシステムの完全修飾ドメイン名です。

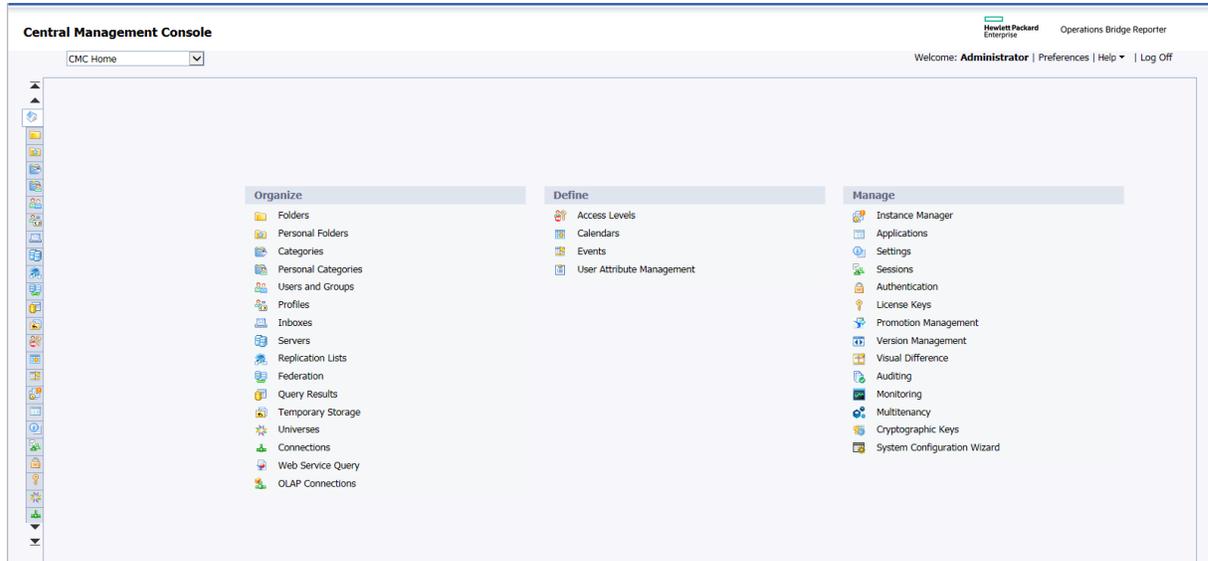
HPE Operations Bridge Reporter 管理コンソールログオンページが表示されます。

2. ユーザー名フィールドに「**administrator**」と入力し、パスワードフィールドにデフォルトのパスワードを入力します。
3. **[Login]** をクリックします。
[ホーム] ページが表示されます。
4. 管理コンソールで、**[管理]** > **[SAP BOBJ]** をクリックします。
[SAP BOBJ] ページが表示されます。
5. **[CMCの起動]** をクリックします。[中央管理コンソールへのログオン] ページが表示されます。

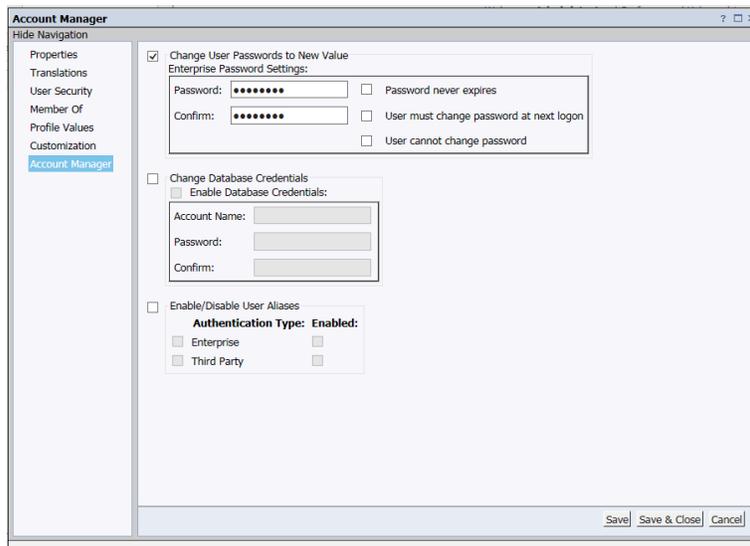


6. **[ユーザー名]** フィールドに「**administrator**」と入力し、**[パスワード]** フィールドにデフォルトのパスワードを入力します。
7. **[ログオン]** をクリックします。
[System Configuration Wizard] が表示されます。**[Close]** をクリックして、ウィザードを閉じます。**[Central Management Console]** ページが表示されます。

注: CMCへのログオン時に毎回 [System Configuration Wizard] が表示されないようにするには、[Don't show this wizard when cms is started] のチェックボックスをオンにします。



8. [ユーザーとグループ] をクリックします。[ユーザーとグループ] 画面が表示されます。
9. 右側のペインで、[Administrators] をダブルクリックします。
10. [Administrator] を右クリックしてから、[プロパティ] をクリックします。[アカウントマネージャー] ダイアログボックスが表示されます。
11. ナビゲーションパネルで、[アカウントマネージャー] をクリックします。



12. [ユーザーパスワードを新しい値に変更する] > [Enterpriseパスワード設定] > [パスワード] フィールドで、新しいパスワードを入力します。
13. [確認] フィールドに、確認のためにパスワードを再入力します。

14. [保存して閉じる] をクリックして変更を受け入れます。
15. [ログアウト] をクリックして、中央管理コンソールを終了します。

注: このタスクは、HPE OBRがシステムにインストールされている場合にのみ、有効です。

第IV部 データベースのバックアップとリカバリ

このセクションでは、HPE OBRデータベースのバックアップと復元について説明します。また、HPE OBRで、データベースバックアップオプションを使ってバックアップを計画する方法についても説明します。

第 17 章: データベースのバックアップとリカバリ

OBRを使用して、データベースに不具合が起きた時にデータが失われないように、データベースのバックアップおよびリカバリを行うことができます。実働環境でOBRの使用を開始する前に、データベースを定期的にバックアップすることをお勧めします。

OBRのディザスターリカバリには、HPE OBRデータベースの定期的なバックアップの計画、重要な設定ファイルおよびライセンスファイルのバックアップの作成が含まれます。HPE OBRでは、SAP BusinessObjectsデータベースとSAP BusinessObjectsファイルストアのバックアップおよび復元を行うことができ、ディザスター発生時のデータ損失を防ぐことができます。

HPE OBRでは、完全バックアップスクリプトが提供されます。完全バックアップスクリプトを使用すると、次のHPE OBRコンポーネント（データベースファイルおよびトランザクションログを含む）の完全なバックアップを取得することができます。

- SAP BusinessObjects (ファイルストア)
- SAP BusinessObjects中央管理コンソール(CMC) データベース (SQL Anywhere)
- 管理データベーステーブル (PostgreSQL)
- 設定ファイル

ヒント: 完全バックアップの取得はより迅速でディスク領域の消費も少ないため、毎日完全バックアップを取得することをお勧めします。

重要な考慮事項

- バックアップと復元の計画を立てる前の重要な考慮事項として、HPE OBR管理ユーザーおよびSAP BusinessObjects中央管理コンソール(CMC) データベース (SQL Anywhere) のデフォルトパスワードの変更について確認する必要があります。

デフォルトパスワードの変更については、『HPE Operations Bridge Reporter管理ガイド』の「デフォルトパスワードの変更」セクションを参照してください。

- 定期的な間隔で実行するように完全バックアップをスケジュールする必要があります。
- バックアップは、毎日とることをお勧めします。

バックアップを毎日行うようスケジュールした場合、バックアップが取得された曜日を表す3文字のプレフィックスを含むバックアップファイルが保存されます。たとえば、月曜日にバックアップスクリプトが実行されると、バックアップファイル名は/`<バックアップパス>/_DR_FullBackup/Mon`となります。ただし、この場合、バックアップは次の週のバックアップファイルによって上書きされます。同様に、12時間ごとのバックアップをスケジュールした場合、次のバックアップスクリプトが同じ日に実行されるとファイルが上書きされる可能性があります。古いバックアップを保持したい場合は、このようなインスタンスのための個別のフォルダーを作成する必要があります。

- データベースに不具合が起きた場合には、バックアップ場所からOBRデータベースをリカバリできます。バックアップシステムとプライマリシステムでは、ハードウェア仕様、オペレーティングシステム、HPE OBRバージョン、ファイルパス、トポロジ、インストール後の設定、デプロイされたコンテンツパックが同じである必要があります。
- 設定ファイルの内容を変更している場合 (たとえば、CAC)、プライマリのセットアップでパフォーマンスを調整し、それに伴うすべての変更をディザスターリカバリのセットアップで実行します。

注意: OBRには、静的IPアドレスが必要です。永久的なライセンスを復元するには、プライマリOBRサーバーと同じIPアドレスおよび相似のホスト名を使用して、OBRディザスターリカバリ環境を設定する必要があります。OBRの復元では、追加のライセンスは必要ありません。

このガイドで使用される用語

このガイドで使用される用語を次に示します。

用語	説明
SIA	Server Intelligence Agent
CMC	中央管理コンソール
CCM	Central Configuration Manager
HPE OBR server1	既存データのバックアップが取得される1つ目のHPE OBRシステム。
HPE OBR server2	データの復元先となる、HPE OBRがインストールされた新しいシステム。
SHR_DR_Backup	バックアップファイルの名前。

HPE OBRコンポーネントのバックアップ

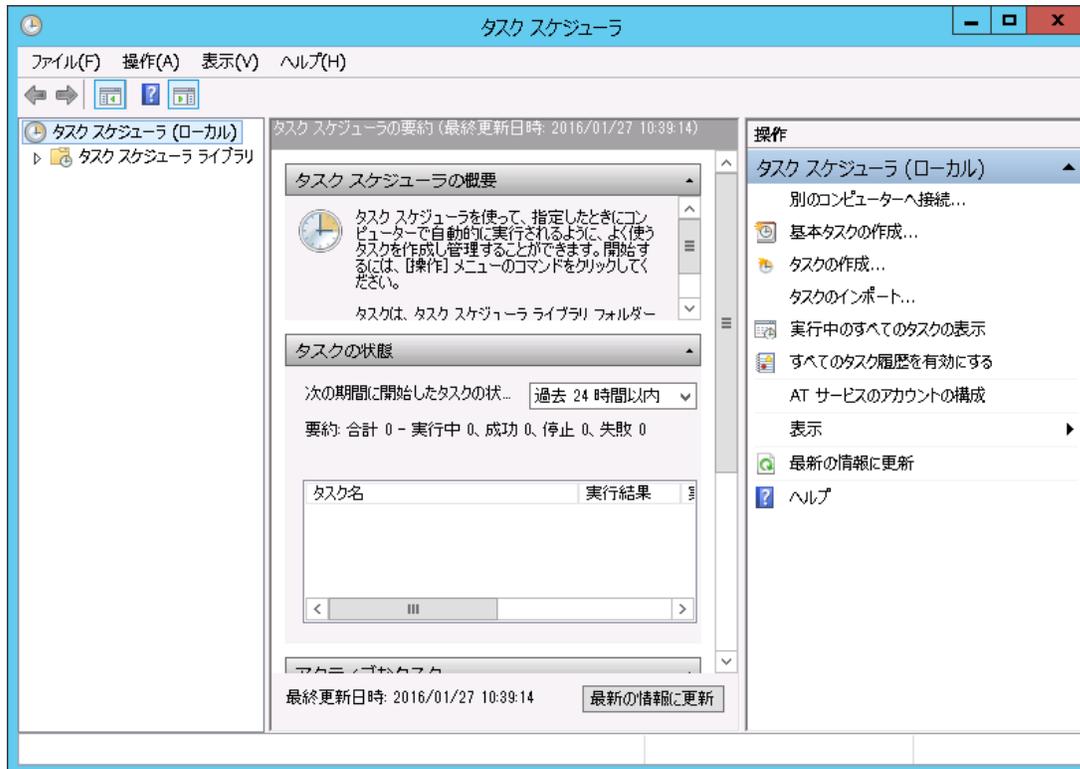
HPE OBRコンポーネントのバックアップを定期的に行うことをお勧めします。

Windows上でのHPE OBRの完全バックアップの作成

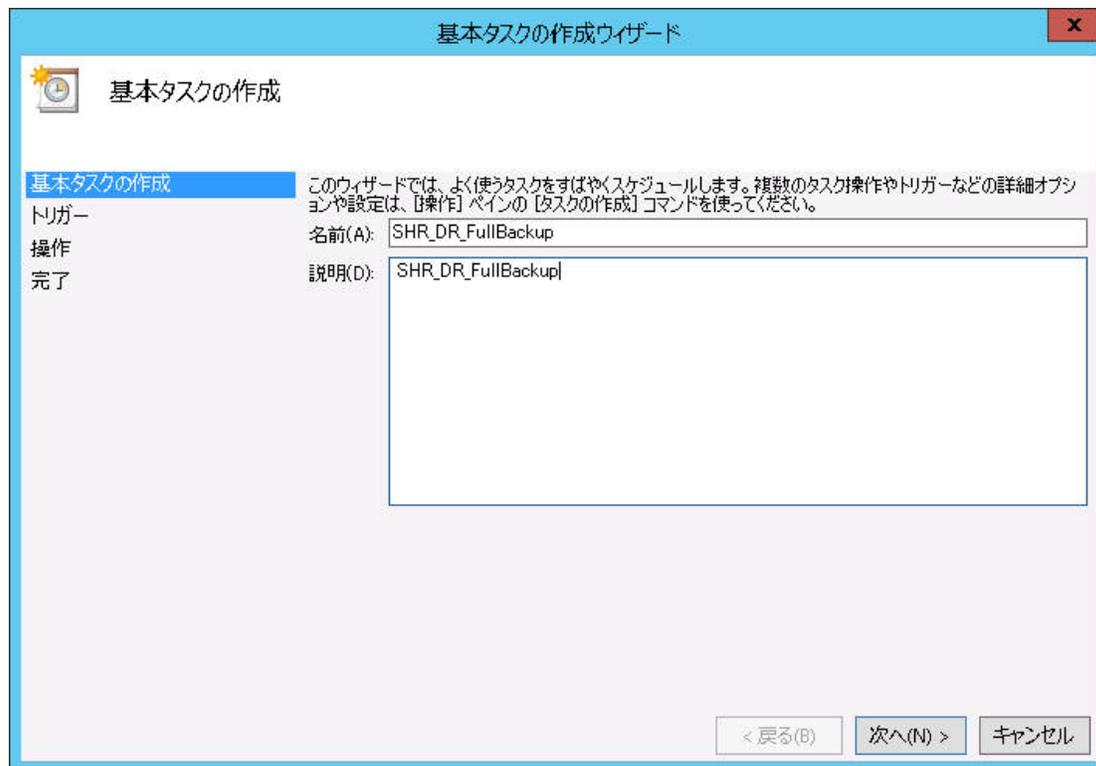
%PMDB_HOME%\DR\SHR_full_Backup.plスクリプトを使用すると、HPE OBRコンポーネントの完全バックアップを作成できます。このスクリプトによって、%PMDB_HOME%\logに%PMDB_HOME%\logファイルが作成されます。

HPE OBRコンポーネントのバックアップをスケジュール設定するには、次の手順を実行します。

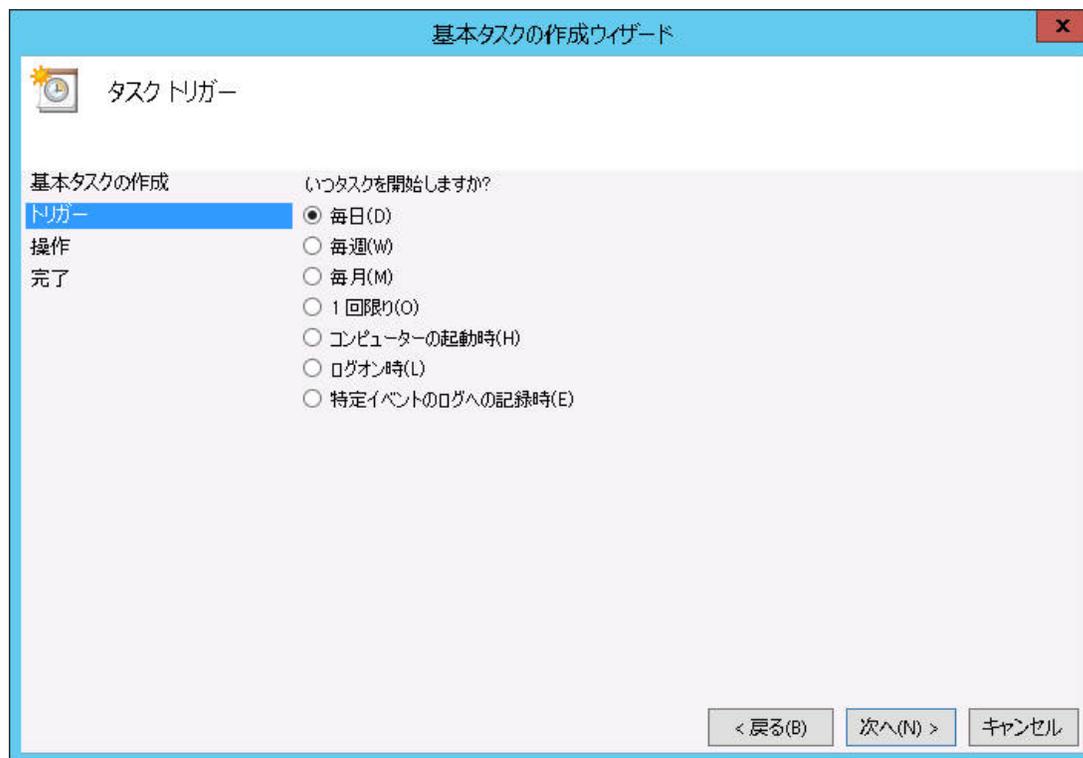
1. [スタート] > [プログラム] > [管理ツール] > [タスクスケジューラ] をクリックするか、[スタート] をクリックし、[検索] に [タスクスケジューラ] と入力して、[タスクスケジューラ] をダブルクリックします。[タスクスケジューラ] ウィンドウが表示されます。



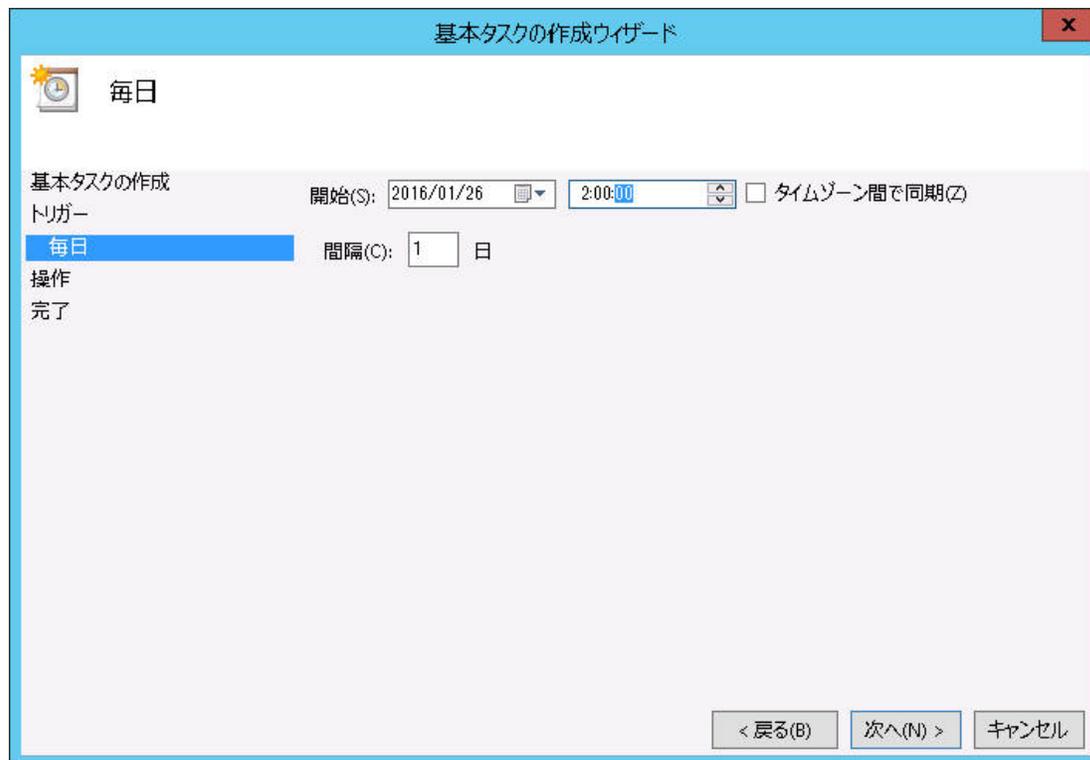
2. [タスクスケジューラ] ウィンドウで、[基本タスクの作成] をクリックします。[基本タスクの作成] ウィザードが表示されます。
3. [名前] と [説明] に「SHR_DR_FullBackup」と入力し、[次へ] をクリックします。



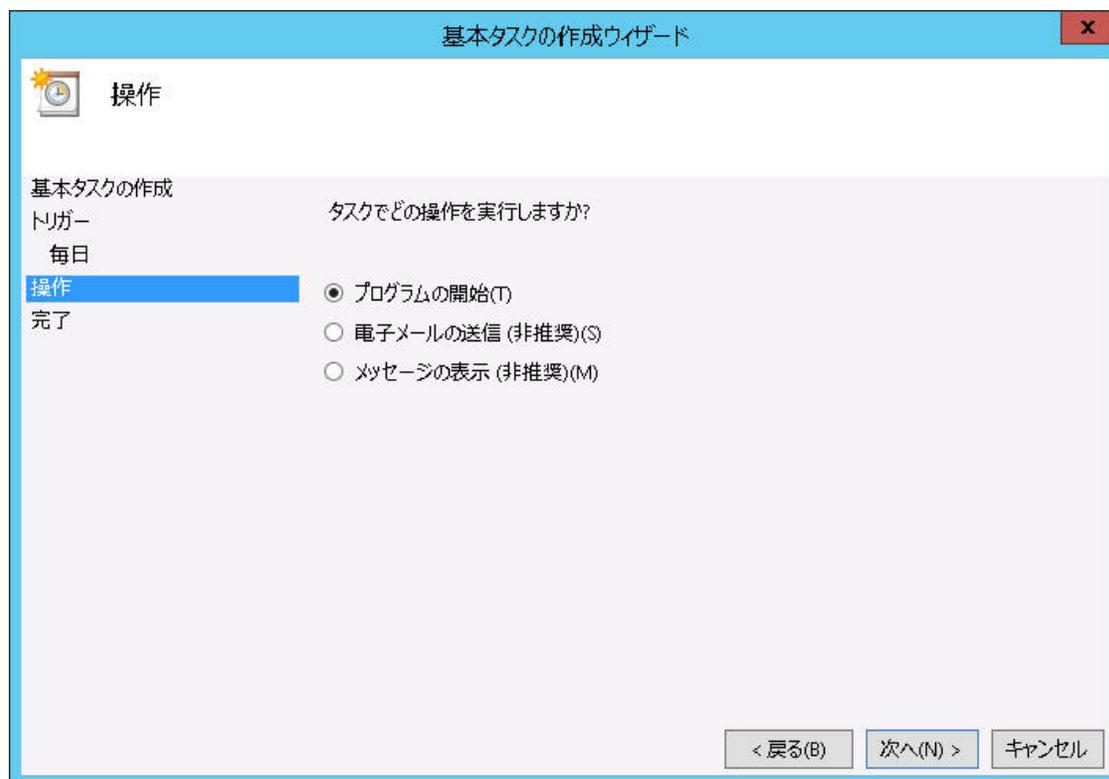
4. [トリガー] で [毎日] を選択し、[次へ] をクリックします。



5. [毎日] で、開始時間を選択し、[間隔] テキストボックスに1を入力して、[次へ] をクリックします。



6. [操作] で [プログラムの開始] を選択し、[次へ] をクリックします。



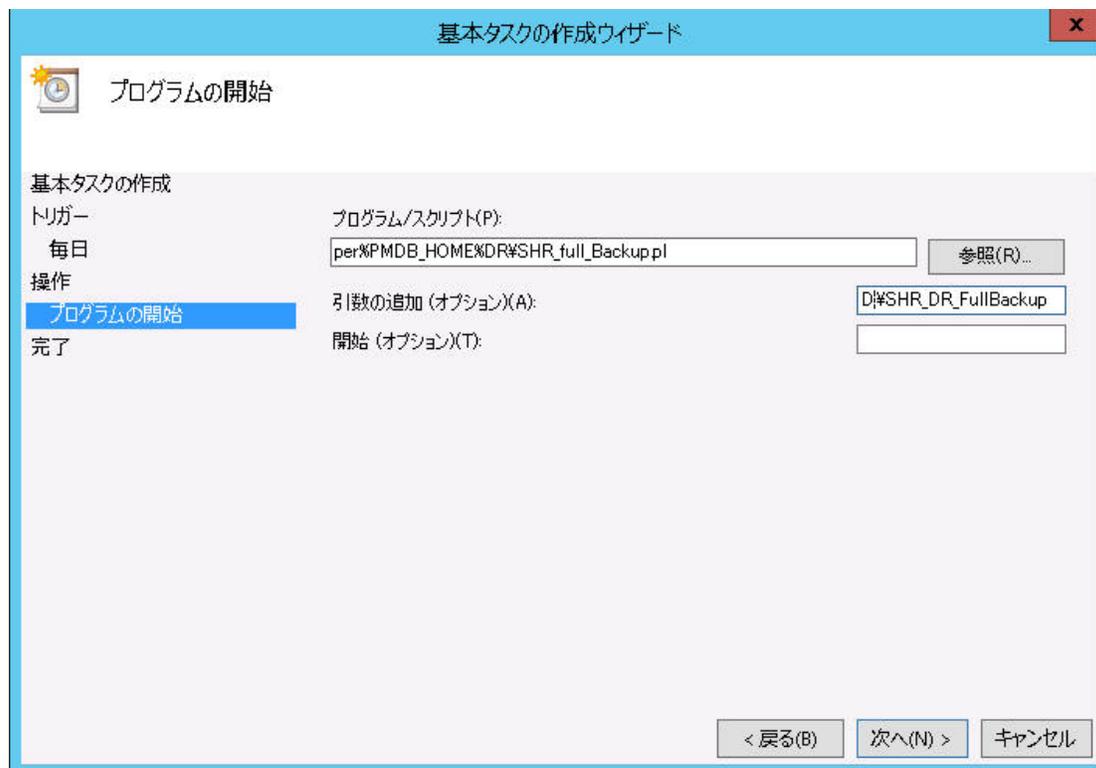
7. [プログラム/スクリプト] で per1 と入力し、[参照] をクリックして %PMDB_HOME%\DR に移動します。

8. [SHR_full_Backup.pl] を選択し、[次へ] をクリックします。

[引数の追加 (オプション)] で、バックアップファイルとデータを格納したいカスタムフォルダーの場所を入力することもできます。

以下に例を示します。E:\SHR_Full_Backup

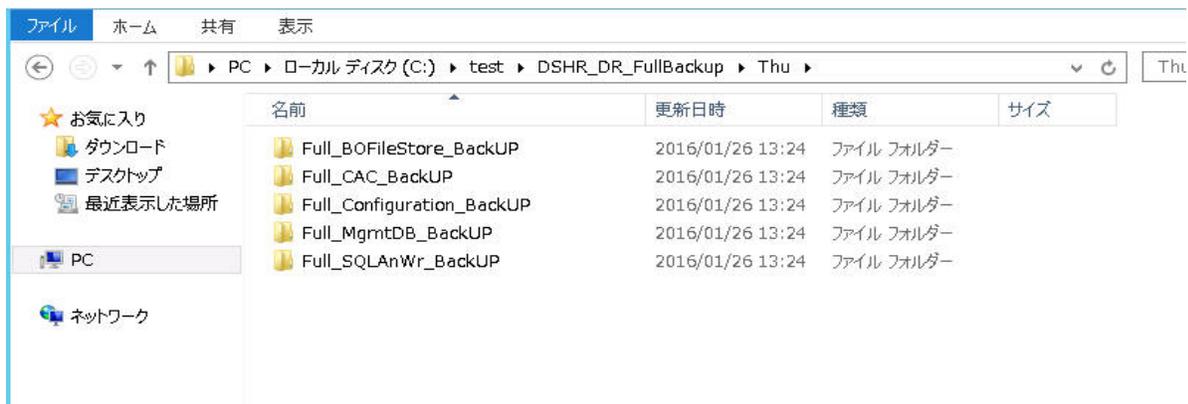
注: [引数の追加 (オプション)] テキストボックスに入力する前にカスタムフォルダーが作成済みである必要があります。



9. [タスクスケジューラメッセージ] で [はい] をクリックし、[要約] ページで [完了] をクリックします。

[タスクスケジューラ] ウィンドウの [アクティブなタスク] で作成したタスクを確認できます。

次の画像は、SHR_DR_FullBackupで作成されたバックアップファイルの例を示しています。



Linux上でのHPE OBRの完全バックアップの作成

\$PMDB_HOME/DR/SHR_full_Backup.plスクリプトを使用すると、HPE OBRコンポーネントの完全バックアップを作成できます。このスクリプトによって、\$PMDB_HOME/logにDR.logファイルが作成されます。

バックアップをスケジュール設定するには、OBRコンポーネントをインストールしたOBR server1にログオンし、次の手順を実行します。

1. rootとしてOBRシステムにログオンします。
2. コマンドプロンプトで次のコマンドを実行してcrontabファイルを編集します。

```
crontab -e
```

3. crontabファイルに次の形式で行を追加して、/opt/HP/BSM/PMDB/DR/SHR_full_Backup.plスクリプトを一日一回起動します。

<タイムスケジュール> </opt/OV/nonOV/perl/a/bin/perl> <スクリプトの場所> <バックアップのパス>

ここでの<タイムスケジュール>は、スクリプトが起動される時刻です。

<スクリプトの場所>は、完全バックアップスクリプト (SHR_full_Backup.pl) の場所です。

<バックアップのパス>はバックアップファイルおよびデータの保存先の場所です。

以下に例を示します。

```
0 15 * * /opt/OV/nonOV/perl/a/bin/perl /opt/HP/BSM/PMDB/DR/SHR_full_Backup.pl /root/SHR_DR_FullBackup
```

上記の例では、週の最初の日15:00時に/opt/HP/BSM/PMDB/DR/Execute_BO_FullBackup.shスクリプトが起動します。バックアップファイルは/root/SHR_DR_FullBackupに保存されます。

4. crontabファイルを保存します。
crontabのすべてのログファイルは/var/mail内にあります。
5. スケジュール設定されたバックアップが完了したら、管理DBのバックアップサブフォルダーとファイルを書き留めておきます。

<バックアップのパス>/SHR_DR_FullBackup/<バックアップの日付>/Full_MgmtDB_BackUP

<バックアップのパス>/SHR_DR_FullBackup/<バックアップの日付>/Full_MgmtDB_BackUP/Mgmt_backup_AGGREGATE_CONTROL.dat

以下に例を示します。

```
/root/SHR_DR_FullBackup/SHR_DR_FullBackup/Thu/Full_MgmtDB_BackUP
```

```
/root/SHR_DR_FullBackup/SHR_DR_FullBackup/Thu/Full_MgmtDB_
Backup/Mgmt_backup_AGGREGATE_CONTROL.dat
```

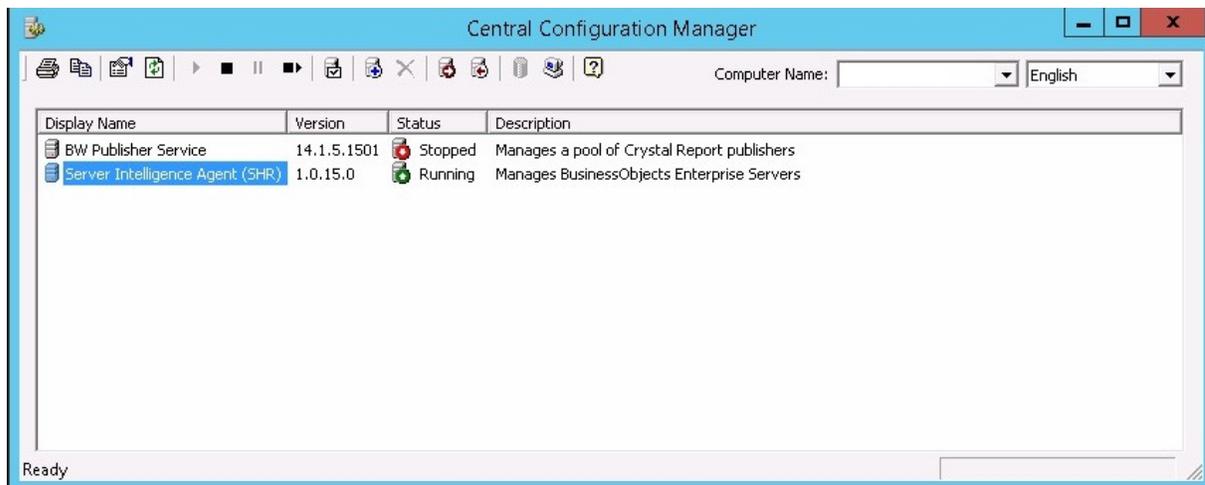
HPE OBRコンポーネントの復元

Windows上でのHPE OBRのバックアップの復元

SAP BusinessObjectsデータベースおよびファイルストアの場合

HPE OBRコンポーネントのバックアップを復元するには、次の手順を実行します。

1. OBRコンポーネントをインストールしたOBR server2システムにログオンします。
2. バックアップファイルSHR_DR_FULLBACKUPを、OBR server1のバックアップ場所から、バックアップを復元するOBR server2にコピーします。
3. システムにログオンし、SAP BusinessObjects Central Configuration Managerを開きます。**[Central Configuration Manager]** ウィンドウが表示されます。



4. **[Server Intelligence Agent (OBR)]** を右クリックし、**[Stop]** をクリックします。
5. **[スタート]** > **[ファイル名を指定して実行]** をクリックします。**[ファイル名を指定して実行]** ダイアログボックスが表示されます。
6. **[名前]** フィールドにservices.mscと入力し、**Enter**キーを押します。**[サービス]** ウィンドウが表示されます。
7. **[サービス]** ウィンドウで、**[SQL Anywhere for SAP Business Intelligence]** サービスをクリックして、**[停止]** をクリックします。
8. 既存のファイルストアフォルダーの名前を変更します。

このファイルストアのデフォルトの場所は、<BusinessObjectsがインストールされたドライブ>:\Program Files (x86)\BusinessObjects\BusinessObjects

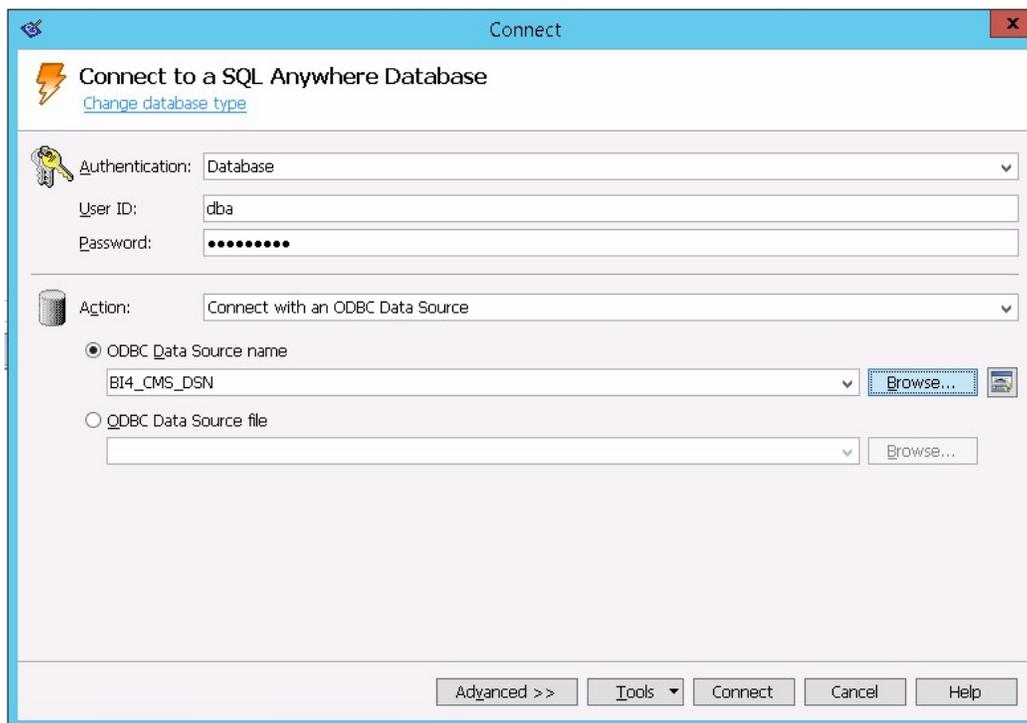
Enterprise 12.0\FileStoreです。たとえば、その名前をFileStore_oldに変更します。

9. 既存のSQL Anywhereデータベースを、デフォルトの場所から別の場所に移動します。SQL Anywhereのデフォルトの場所は、<BusinessObjectsがインストールされたドライブ>:\Program Files (x86)\SAP BusinessObjects\sqlanywhere\databaseです。
10. 復元スクリプトを実行するため、次の手順に従います。
 - a. [スタート]>[ファイル名を指定して実行]をクリックします。[ファイル名を指定して実行]ダイアログボックスが表示されます。
 - b. cmdと入力して、**Enter**キーを押します。コマンドプロンプトが表示されます。
 - c. 次のコマンドを実行します。

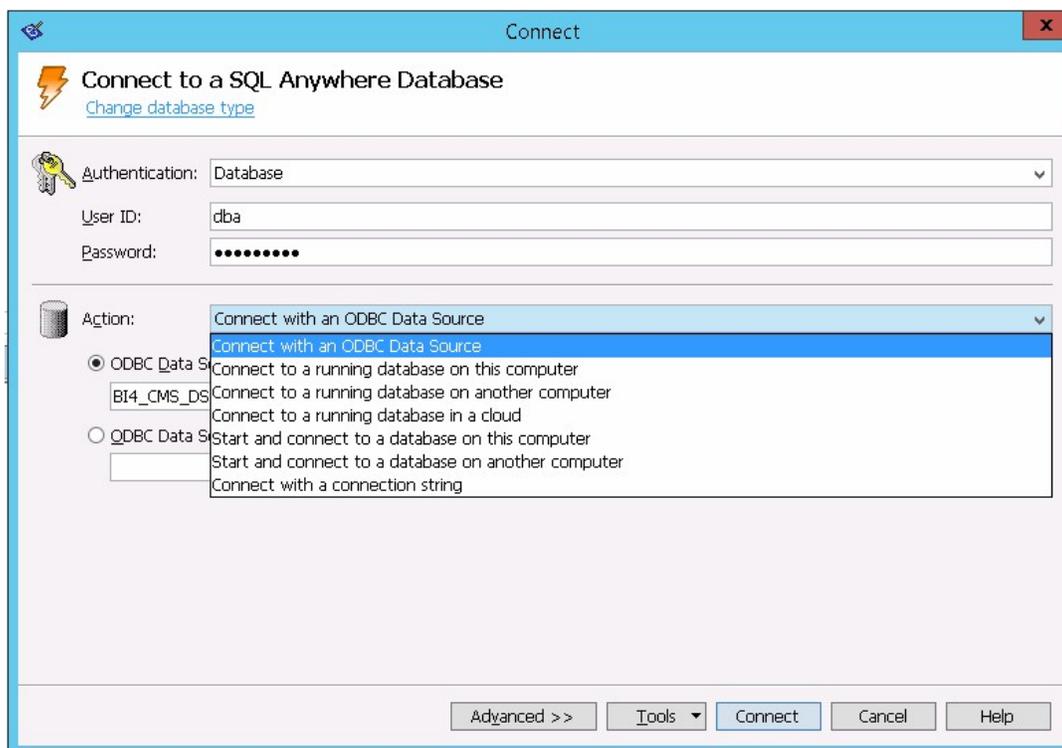
```
Per1 <復元スクリプトの場所> <バックアップファイルの場所>
```

ここで<復元スクリプトの場所>は、復元スクリプトが保存されている場所です。<バックアップファイルの場所>は、復元したい特定の日のバックアップファイルがある場所です。
以下に例を示します。

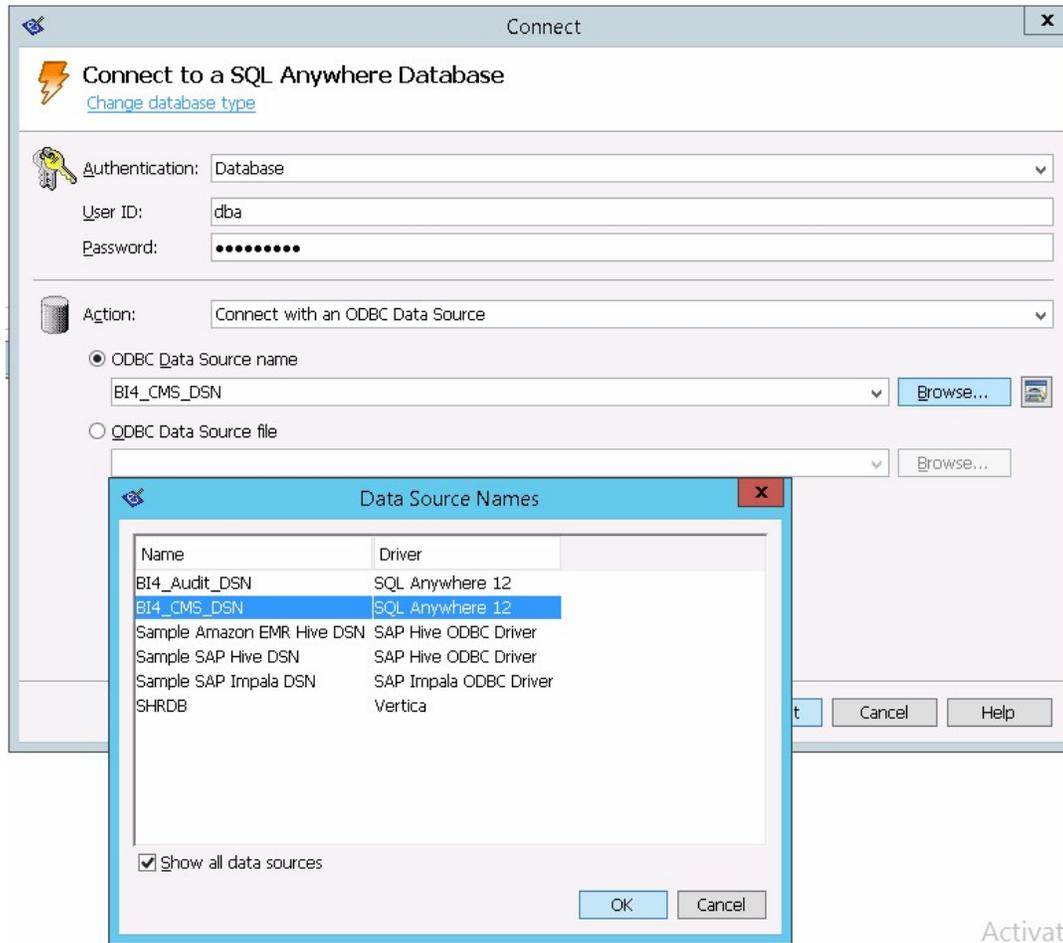
```
per1 %PMDB_HOME%\DR\SHR_full_Restore.pl E:\SHR_Backup\SHR_DR_FullBackup\Thu
```
11. SQL Anywhereサーバーに接続するため、次の手順を実行します。
 - a. コマンドプロンプトを開き、dbisqlcと入力して、**Enter**キーを押します。[SQL Anywhereに接続]ウィンドウが表示されます。



- b. [ユーザーID] フィールドに `dba` と入力し、[パスワード] フィールドにパスワードを入力します。
- c. [アクション] で、ドロップダウンから [ODBC データソースを使用した接続] を選択します。

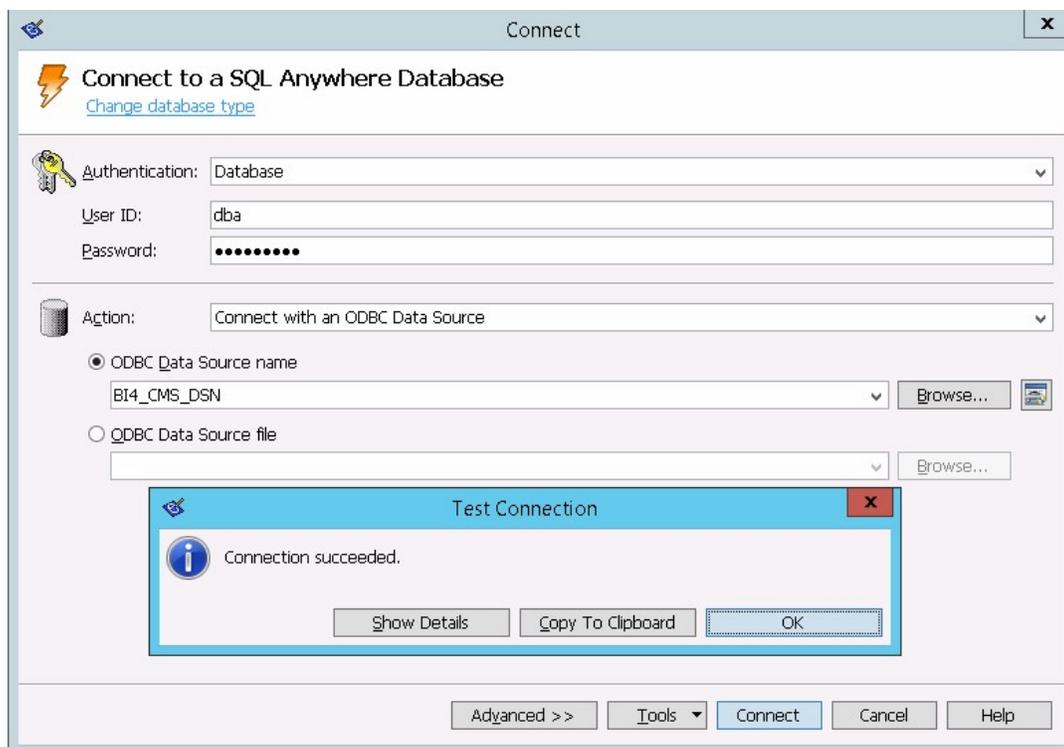


- d. [ODBC データソース名] オプションを選択して [参照] をクリックし、ソース名 `BI4_CMS_DSN` を選択します。



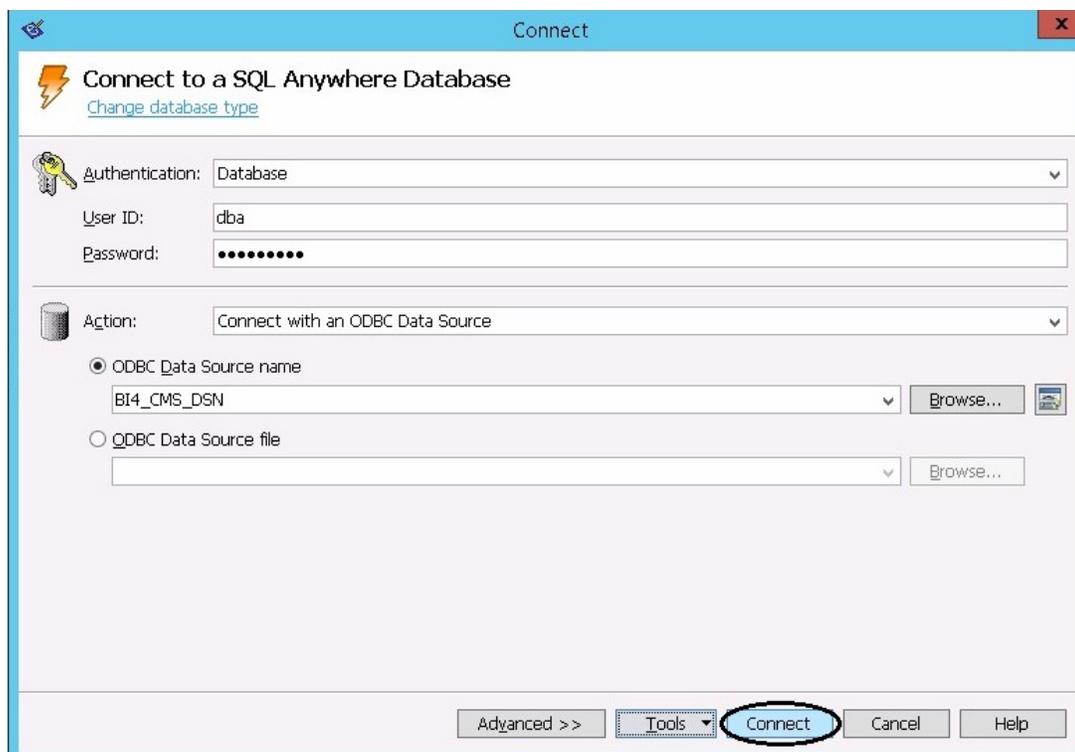
e. 次の画像に示すように、接続を確認します。

Activate



接続が成功したことを示すダイアログボックスが表示されます。[OK] をクリックします。

f. [接続] をクリックします。

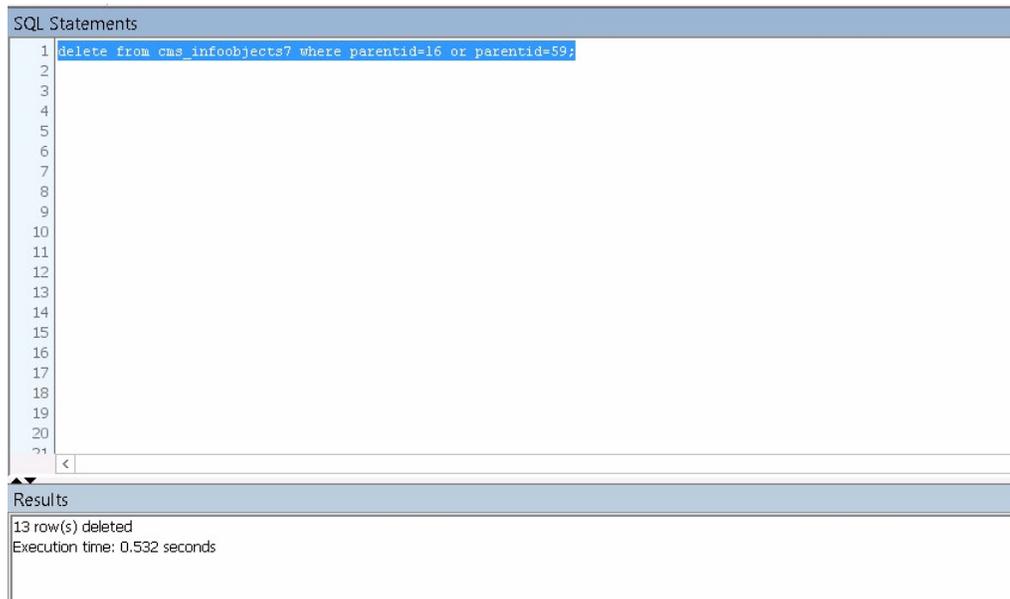


SQLステートメントペインが表示されます。

- g. SQLステートメントペインで、次のクエリを入力します。

```
delete from cms_infoobjects7 where parentid=16 or parentid=59;
```

- h. **[実行]** をクリックします。次の画像に示すように、削除されたレコードの数を示すメッセージが表示されます。



- i. クエリの実行を確定して、**[SQL Anywhereに接続]** ウィンドウを閉じます。
12. **[スタート]** > **[ファイル名を指定して実行]** を開き、services.mscと入力してEnterキーを押します。**[サービス]** ウィンドウが表示されます。
13. **[サービス]** ウィンドウで、**[SQL Anywhere for SAP Business Intelligence]** サービスをクリックして、**[開始]** をクリックします。



14. 新規のServer Intelligence Agent (SIA) を作成するには、次の手順を実行します。

注: 次の手順に進む前に、SIAが停止されていることを確認してください。

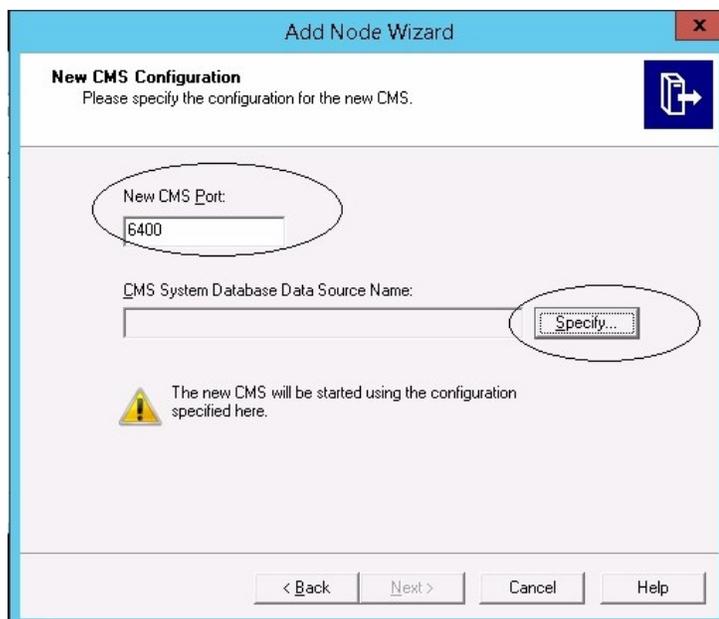
- a. システムにログオンし、SAP BusinessObjects Central Configuration Managerを開きます。**[Central Configuration Manager]** ウィンドウが表示されます。
- b.  をクリックして、新規SIAノードを作成します。**[Add Node Wizard]** が表示されます。
- c. **[次へ]** をクリックします。**[Node name and SIA Port Configuration]** ページが表示されます。

The screenshot shows the 'Add Node Wizard' dialog box with the title 'Node Name and SIA Port Configuration'. The subtitle reads 'Enter the new node name and Server Intelligence Agent port.' There are two text input fields: 'Node Name' containing 'SHR' and 'SIA Port' containing '6410'. Below these fields is a section titled 'Select one of the following:' with four radio button options: 'Add node with no servers', 'Add node with CMS', 'Add node with default servers', and 'Recreate node'. The 'Recreate node' option is selected and circled. At the bottom, there are four buttons: '< Back', 'Next >', 'Cancel', and 'Help'.

- d. [Node Name] にSHRと入力し、[SIA Port] に6410と入力します。
- e. [Recreate Node] を選択し、[Next] をクリックします。
警告メッセージが表示されます。
- f. [次へ] をクリックします。[Select a CMS] ペインが表示されます。
- g. [Start a new temporary CMS] を選択し、[Next] をクリックします。

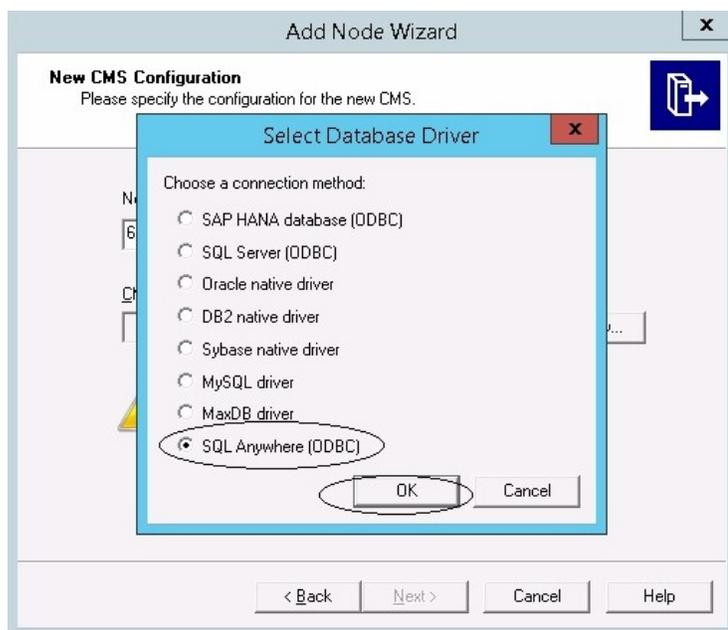
The screenshot shows the 'Add Node Wizard' dialog box with the title 'Select a CMS'. The subtitle reads 'Select a CMS that will be used to add the node.' There are two radio button options: 'Use existing running CMS' and 'Start a new temporary CMS'. The 'Start a new temporary CMS' option is selected and circled. Below this option is a descriptive text: 'Select when cluster has no running CMSs. A temporary CMS will be automatically started. Upon completion, it will be stopped.' At the bottom, there are four buttons: '< Back', 'Next >', 'Cancel', and 'Help'.

- [New CMS Configuration] ペインが表示されます。
- h. [New CMS Port] に6400と入力し、[Specify] をクリックします。



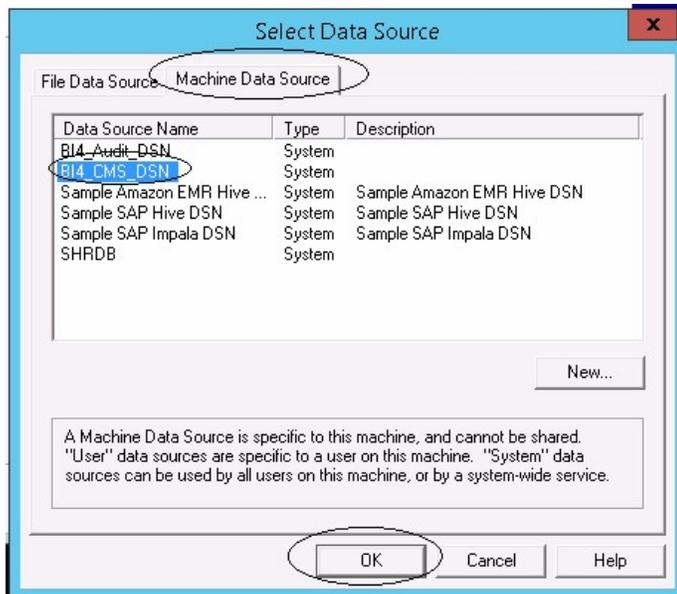
[Select Database Driver] ウィンドウが表示されます。

- i. [SQL Anywhere (ODBC)] を選択し、[OK] をクリックします。

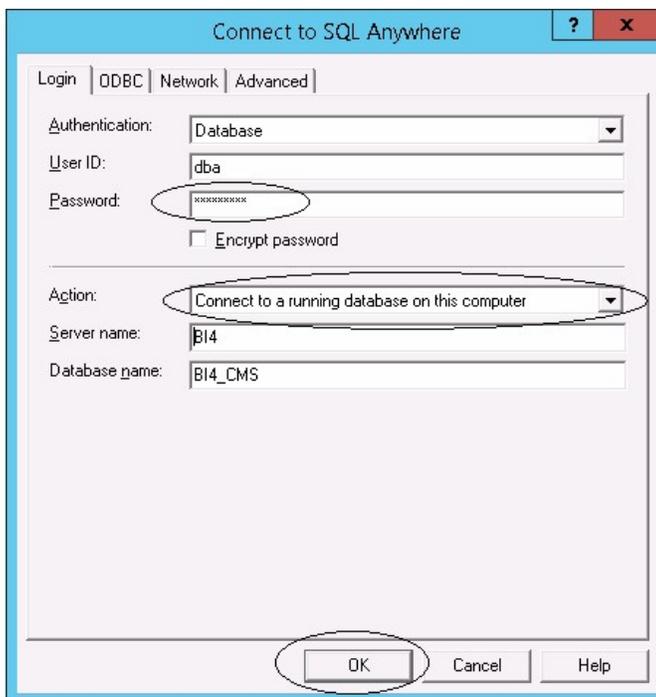


[Select Data Source] ウィンドウが表示されます。

- j. [Machine Data Source] タブをクリックして [BI4_CMS_DSN] を選択し、[OK] をクリックします。



- k. コマンドプロンプトを開き、dbisqlcと入力して、**Enter**キーを押します。[SQL Anywhereに接続] ウィンドウが表示されます。
- l. [ユーザーID] フィールドにdbaと入力し、[パスワード] フィールドにパスワードを入力します。
- m. [アクション] で、[このコンピューターで実行中のデータベースに接続する] を選択し、[OK] をクリックします。



[Specify Cluster Key] ウィンドウが表示されます。

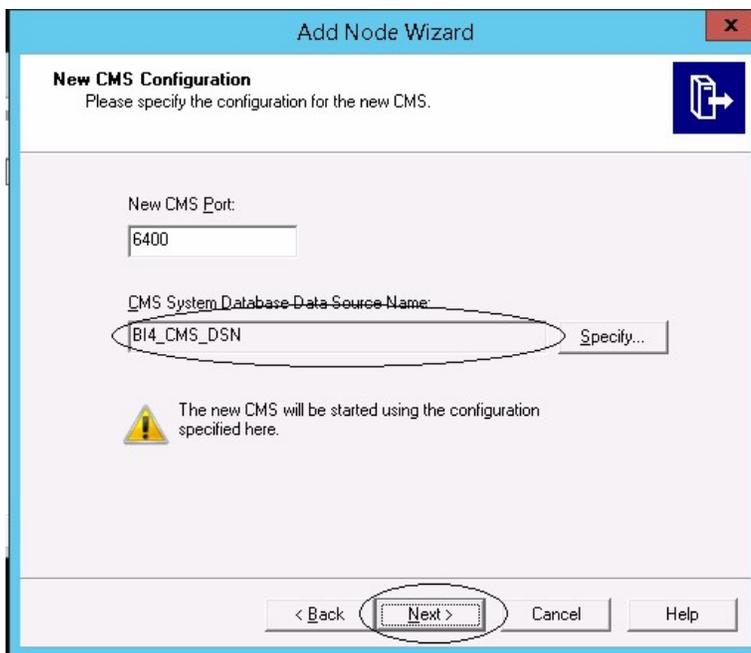
- n. [Enter the cluster key] で1ShrAdminと入力し、[OK] をクリックします。

注: デフォルトのクラスターキーは1ShrAdminです。クラスターキーを変更した場合は、変更後のクラスターキーの値を入力してください。



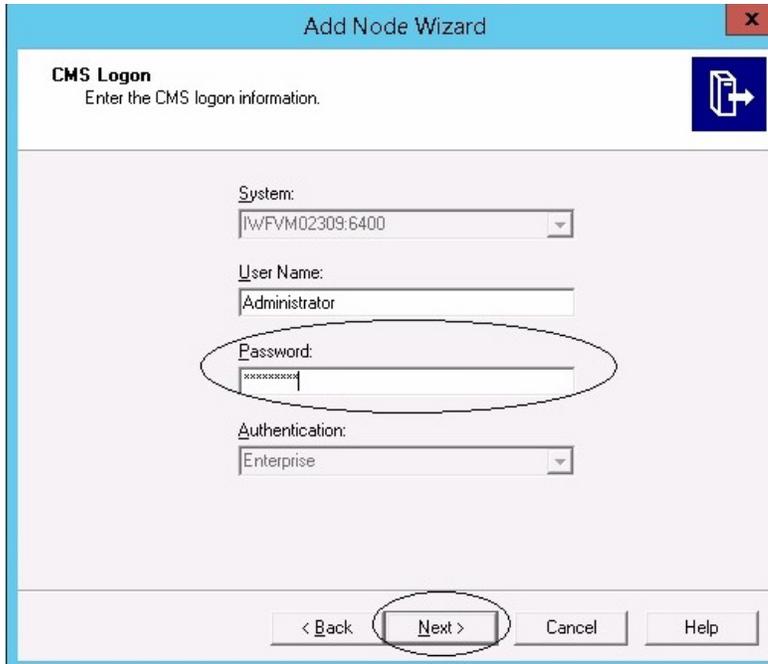
[New CMS Configuration] ペインが表示されます。

- o. [CMS System Database Data Source Name] が有効になっています。[次へ] をクリックします。



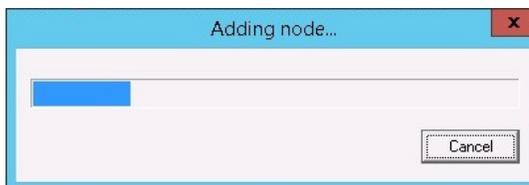
[CMS Logon] ペインが表示されます。

- p. [Password] フィールドにパスワードを入力し、[Next] をクリックします。



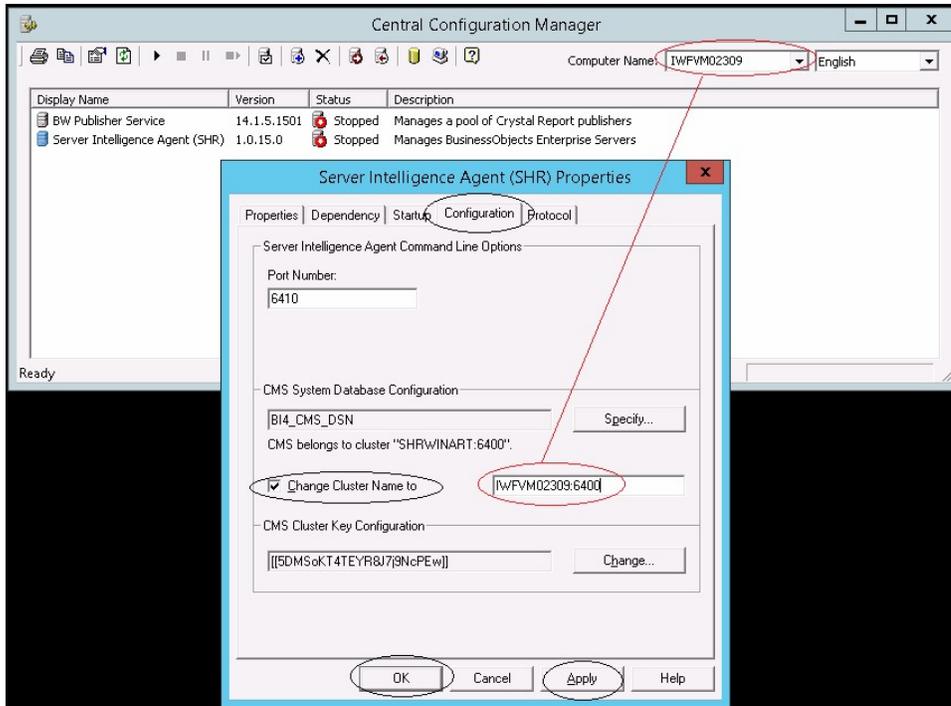
確認 ウィンドウが表示されます。

- q. [完了] をクリックします。新しく作成されたノードが追加されます。プロセスが完了するまで待機します。



確認のダイアログボックスが表示されます。[OK] をクリックします。

- r. [Central Configuration Manager] ウィンドウで、[Server Intelligence Agent (SIA)] を右クリックして [Properties] を選択します。
[Server Intelligence Agent (OBR) Properties] ダイアログボックスが表示されます。
- s. [Configuration] タブをクリックし、[Change Cluster Name to] チェックボックスを選択します。
- t. 次の形式でクラスター名を入力します。<クラスター名>:6400
ここでの<クラスター名>は、[Central Configuration Manager] ウィンドウに表示されている [Computer Name] と同じです。
次の画像は、クラスター名の例を示しています。



u. [適用] をクリックし、[OK] をクリックします。

v. [Central Configuration Manager] ウィンドウで、[Server Intelligence Agent (SIA)] を右クリックして [Start] を選択します。

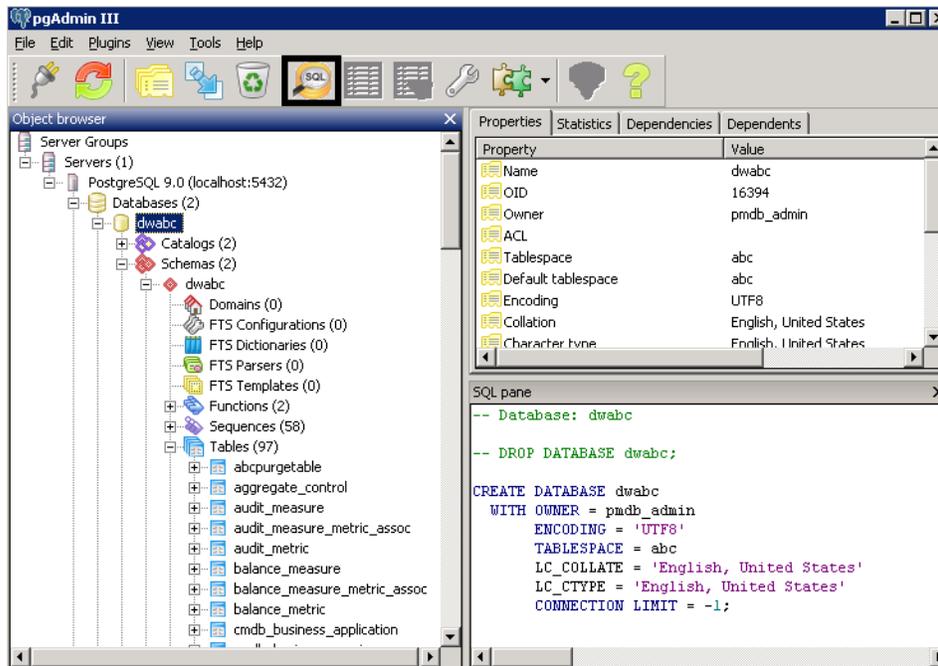
Server Intelligence Agentが開始されます。

15. 中央管理コンソール(CMC)にログオンして、バックアップが正常に復元されたかどうかを確認します。

管理データベーステーブルの場合

管理データベーステーブルを復元するには、次の手順を実行します。

1. HPE OBRシステムにログオンします。
2. [スタート] > [プログラム] > [PostgreSQL 9.3] > [pgAdmin III] に移動するか、[スタート] > [検索] でpgAdmin IIIと入力し、pgAdmin IIIをダブルクリックして開きます。
3. パスワードを入力してデータベースに接続し、SQLアイコンをクリックしてsqlクエリアナライザーを起動します。



4. データベーステーブルを復元するには、次のクエリを実行します。

```
Delete From dwabc.aggregate_control
```

```
COPY dwabc.aggregate_control from '<バックアップファイルのパス>\\backup_
AGGREGATE_CONTROL.dat'
```

ここで<バックアップファイルのパス>は、管理データベースのバックアップファイルを置いたディレクトリです。

以下に例を示します。

```
COPY dwabc.aggregate_control from 'E:\SHR_DR_FullBackup\\backup_
AGGREGATE_CONTROL.dat'
```

Linux上でのHPE OBRのバックアップの復元

SAP BusinessObjectsデータベースおよびファイルストアの場合

HPE OBRコンポーネントのバックアップを復元するには、次の手順を実行します。

1. OBRコンポーネントをインストールしたOBR server2システムにログオンします。
2. バックアップファイルSHR_DR_FULLBACKUPを、OBR server1のバックアップ場所から、バックアップを復元するOBR server2にコピーします。
3. ルートとしてシステムにログオンします。
4. 次のコマンドを実行して、Webサーバーを停止します。

```
sh /opt/HP/BSM/BOE4/sap_bobj/tomcatshutdown.sh
```

5. OBR server2の次の場所にあるSQL Anywhereデータベースファイルを、任意の別の場所

に移動します。

```
$PMDB_HOME/../../BOE4/sqlanywhere/database/*BI4*
```

同様に、次の場所にあるfrsinputおよびfrsoutputディレクトリの名前を変更します。

```
$PMDB_HOME/../../BOE4/sap_bobj/data
```

6. 次のコマンドを実行して、SAP BusinessObjects管理者に切り替えます。

```
su - shrboadmin
```

7. 次のコマンドを実行して、すべてのServer Intelligence Agentサーバーを停止します。

```
sh $PMDB_HOME/../../BOE4/sap_bobj/stopservers
```

8. 次のコマンドを実行して、SQL Anywhereデータベースサービスを停止します。

```
sh $PMDB_HOME/../../BOE4/sap_bobj/sqlanywhere_shutdown.sh
```

パスワードを求められたら、SQL Anywhereデータベースのパスワードを指定します。

9. 次のコマンドを実行して、rootユーザーに切り替えます。

```
su root
```

10. 「[Linux上でのHPE OBRの完全バックアップの作成](#)」(153ページ)で取得したバックアップファイルをコピーし、次の手順を実行します。

```
Perl <復元スクリプトの場所> <バックアップファイルの場所>
```

ここでの<復元スクリプトの場所>は、復元スクリプトが保存されている場所です。

<バックアップファイルの場所>は、復元したい特定の日のバックアップファイルがある場所です。

以下に例を示します。

```
perl $PMDB_HOME/DR/SHR_full_Restore.pl /root/SHR_DR_FullBackup/Thu
```

11. 次のコマンドを実行して、rootユーザーではなく、SHRBOADMINユーザーに切り替えます。

```
su - shrboadmin
```

12. 次のコマンドを実行して、SQL Anywhereデータベースサービスを開始します。

```
sh $PMDB_HOME/../../BOE4/sap_bobj/sqlanywhere_startup.sh
```

13. /opt/HP/BSM/BOE4/sap_bobj/enterprise_xi40/odbc.iniに示されているCMSデータベースのODBCデータソース名を書き留めます。

たとえば、次の画像の場合、CMSデータベースのODBCデータソース名はBI4_CMS_DSN_1435083599です。

```
[ODBC Data Sources]
BI4_OMS_DSN_1435083599=SQLAnywhere 12.0
BI4_Audit_DSN_1435083599=SQLAnywhere 12.0

[BI4_OMS_DSN_1435083599]
UID=dba
DatabaseName=BI4_OMS
ServerName=BI4_1435083599
Host=localhost:2638
Driver=/opt/HP/BSW/BOE4/sqlanywhere/lib64/libdbodbc12.so

[BI4_Audit_DSN_1435083599]
UID=dba
DatabaseName=BI4_Audit
ServerName=BI4_1435083599
Host=localhost:2638
Driver=/opt/HP/BSW/BOE4/sqlanywhere/lib64/libdbodbc12.so
```

14. 次のコマンドを実行して、新しいServer Intelligence Agent (SIA) を作成します。

```
sh $PMDB_HOME/./BOE4/sap_bobj/serverconfig.sh
```

コマンドラインコンソールにSAP BusinessObjectsウィザードが表示されます。

15. 1を入力し、**Enter**キーを押します。

```
-----
                SAP BusinessObjects
What do you want to do?

1 - Add node
2 - Delete node
3 - Modify node
4 - Move node
5 - Back up server configuration
6 - Restore server configuration
7 - Modify web tier configuration
8 - List all nodes

[quit(0)]
-----
[8]1
```

16. 新しいノードの名前を入力し、**Enter**キーを押します。

```
-----  
SAP BusinessObjects  
  
* Node Configuration *  
Enter the name of the new node.  
  
[back(1)/quit(0)]  
-----  
[IWFVM02570]SHRM2
```

17. ポート番号として6410を入力し、**Enter**キーを押します。

```
-----  
SAP BusinessObjects  
  
* Node Configuration *  
Enter the port of the new Server Intelligence Agent.  
  
[back(1)/quit(0)]  
-----  
[ ]6410
```

18. 3を入力してデフォルトサーバー(「Add node with default servers」)を選択し、**Enter**キーを押します。

```
-----  
SAP BusinessObjects  
  
* Node Configuration *  
Select one of the following:  
no servers (Add node with no servers)  
cms (Add node with CMS)  
default servers (Add node with default servers)  
recreate (Recreate node)  
  
[no servers(5)/cms(4)/default servers(3)/recreate(2)/back(1)/quit(0)]  
-----  
[no servers]3
```

19. 2を入力して一時CMSを選択し、**Enter**キーを押します。

```
-----  
SAP BusinessObjects  
  
* Select a OMS *  
Select a OMS that will be used to add the node.  
  
existing  
  (Select when at least one OMS is running.)  
temporary  
  (Select when cluster has no running OMSs. A temporary OMS will be automatically started. Upon completion, it will be stopped.)  
[existing(3)/temporary(2)/back(1)/quit(0)]  
-----  
[existing]2
```

20. 新しいCMSのポート番号として6400と入力し、**Enter**キーを押します。

```
-----  
SAP BusinessObjects  
  
* New OMS Configuration *  
Enter the port of the new OMS.  
  
Warning: The new OMS will start using the configuration specified here.  
  
[back(1)/quit(0)]  
-----  
[default (6400)]6400
```

21. 2を入力してSQL Anywhereを選択し、**Enter**キーを押します。

```
-----  
SAP BusinessObjects  
  
* New OMS Configuration *  
Specify new OMS database connection information.  
  
Select the type of database connection from the following:  
[SAPHANA(8)/Oracle(7)/DB2(6)/Sybase(5)/MySQL(4)/MaxDB(3)/SQLAnywhere(2)/back(1)/quit(0)]  
-----  
[SAPHANA]2
```

22. 手順13で書き留めたODBCデータソース名を入力し、**Enter**キーを押します。

```
-----  
SAP BusinessObjects  
  
* New OMS Configuration *  
Specify new OMS database connection information.  
  
Enter the ODBC data source name (DSN) for connecting to your SQL Anywhere database.  
  
[back(1)/quit(0)]  
-----  
[BI4_OMS_DSN_1434393679]
```

23. ユーザー名を入力し、**Enter**キーを押します。

注: バックアップを取得したSAP BusinessObjectsサーバーで使用されているものと同じユーザー名を入力する必要があります。

```
-----  
SAP BusinessObjects  
  
* New OMS Configuration *  
Specify new OMS database connection information.  
  
Enter the user name for connecting to your SQLAnywhere database.  
  
[back(1)/quit(0)]  
-----  
[dba]dba
```

24. パスワードを入力し、**Enter**キーを押します。

```
-----  
SAP BusinessObjects  
  
^ New OMS Configuration ^  
Specify new OMS database connection information.  
  
Enter the password for connecting to your SQLAnywhere database.  
  
[back(1)/quit(0)]  
-----  
[ ]
```

25. クラスターキーを入力し、**Enter**キーを押します。

注: デフォルトのクラスターキーは1ShrAdminです。クラスターキーを変更した場合は、変更後のクラスターキーの値を入力してください。

```
-----  
SAP BusinessObjects  
  
* New OMS Configuration *  
Enter the cluster key.  
  
[back(1)/quit(0)]  
-----  
[ ]
```

26. CMSに接続するため、ユーザー名をAdministratorと入力し、**Enter**キーを押します。

```
-----  
SAP BusinessObjects  
  
* CMS Logon *  
  
Enter the user name to connect to this CMS.  
  
Note that only Enterprise authentication is supported.  
  
[back(1)/quit(0)]  
-----  
[Administrator]█
```

27. パスワードを入力し、**Enter**キーを押します。

```
-----  
SAP BusinessObjects  
  
* CMS Logon *  
  
Enter the password to connect to this CMS.  
  
[back(1)/quit(0)]  
-----  
[ ]█
```

28. **yes**と入力して新しいノードを追加することに同意し、**Enter**キーを押します。

```
-----  
SAP BusinessObjects  
  
* Confirmation *  
  
The following information will be used to create the new node.  
  
OVS Name: IWFVM02570:6400  
Node Name: SHRM2  
Server Intelligence Agent Port: 6410  
Node Option: Create default servers  
OVS Port: 6400  
OVS Data Source: BI4_OVS_DSN_1434393679  
  
Results will be stored in the log file: /opt/HP/BSM/BOE4/sap_bobj//logging/addnode_20150616_224929.log  
  
Do you want to create the node?  
  
[yes(3)/no(2)/back(1)/quit(0)]  
-----  
  
[yes]
```

確認メッセージが表示されます。新しいノードが正常に追加されたら、**Enter**キーを押します。

```
-----  
SAP BusinessObjects  
  
* Confirmation *  
  
The following information will be used to create the new node.  
  
OVS Name: IWFVM02570:6400  
Node Name: SHRM2  
Server Intelligence Agent Port: 6410  
Node Option: Create default servers  
OVS Port: 6400  
OVS Data Source: BI4_OVS_DSN_1434393679  
  
Results will be stored in the log file: /opt/HP/BSM/BOE4/sap_bobj//logging/addnode_20150616_224929.log  
  
Do you want to create the node?  
  
[yes(3)/no(2)/back(1)/quit(0)]  
-----  
  
[yes]  
Adding node...  
.....Successfully added node.  
View the log file for more details: /opt/HP/BSM/BOE4/sap_bobj//logging/addnode_20150616_224929.log  
  
Press Enter to continue...  
█
```

SAP BusinessObjectsメニューが表示されます。

29. 0を入力して終了し、**Enter**キーを押します。

```
-----  
SAP BusinessObjects  
What do you want to do?  
1 - Add node  
2 - Delete node  
3 - Modify node  
4 - Move node  
5 - Back up server configuration  
6 - Restore server configuration  
7 - Modify web tier configuration  
8 - List all nodes  
  
[quit(0)]  
-----  
[8]0
```

30. 1を入力して終了を確定し、**Enter**キーを押します。
31. /opt/HP/BSM/BOE4/sap_bobj/ccm.configのバックアップを取得します。
32. 次の画像に示すように、SHRLAUNCHセクションを削除します。

```

#!/bin/sh
BOBJDIR="/opt/HP/BSW/BOE4/sap_bobj/"
BOBJDIR_ALLLOCAL="User"
BOBJDIR_A="bin"
BOBJDIR_CS_SCRIPTS="DC00U-1WUVE3M-710XUC4-Gb200MC-7D"
BOBJDIR_SERVER_WMR="shrboadmin"
BOBJDIR_VERSION="XJ_4.0"
CLUSTER_LUNWESERVER=""
CLUSTERPORT_LMBE="6400"
OWSCLUSTER="no"
OWS_LUNWESERVER="IMFWM02570"
OWS_PORT_LMBE="6400"
OWS_SELECTOR_PORT="8080"
OWS_DATABASE="dba"
OWS_TYPE_AUDIT="sqlanywhere"
OWS_TYPE="sqlanywhere"
DEFAULT_LUNWESERVER="no"
INSTALL_DIR="/opt/HP/BSW/BOE4/sap_bobj/"
LOCAL_LUNWESERVER="IMFWM02570"
LUNWESERVER="IMFWM02570"
PRODUCT_ID_NAME="BusinessObjects"
PRODUCT_ID_VERSION="14.0"
REDIRECT_PORT="8448"
REGFILE="/opt/HP/BSW/BOE4/sap_bobj/data/.bobj"
REINIT="yes"
SERVICE_WMR_AUDIT="BI4_Audit"
SERVICE_WMR="BI4_OIS"
SERVICE_PORT="no"
SHUTDOWN_PORT="8005"
SIACCS_DATABASE="SHR"
SIAPORT_LMBE="6410"
SIAPSWDataVal="undefined"

SHR_LAUNCH="/opt/HP/BSW/BOE4/sap_bobj/enterprise_xi40/generic/bobjrestart.sh" -protect "/opt/HP/BSW/BOE4/sap_bobj/enterprise_xi40/generic/java launch.sh" "--dbobj
j.product.languages.dir=/opt/HP/BSW/BOE4/sap_bobj/enterprise_xi40/Languages/" -bjava.net.preferIPv4Stack=false -bjava.awt.headless=true -bcom.sap.vm.tag=SHR "-
oms64m" "-Xmx256m" "-XX:+ExitVMOnOutOfMemoryError" "-XX:+HeapDumpOnOutOfMemoryError" "-XX:+PrintGCDateStamps" "-XX:+PrintGCOptions" "-XX:LogGCMaxFileCount=3" "-
XX:LogGCMaxFileSize=5m" "-XX:HeapDumpPath=/opt/HP/BSW/BOE4/sap_bobj/logging/" "-XtraceFiles:/opt/HP/BSW/BOE4/sap_bobj/logging/SHR_jvm_@PID.log" "-XX:GCHistoryF
ileName=/opt/HP/BSW/BOE4/sap_bobj/logging/SHR_gc.prfl" "-Xloggc:/opt/HP/BSW/BOE4/sap_bobj/logging/SHR_gc.log" "-XX:ErrorFiles=/opt/HP/BSW/BOE4/sap_bobj/logging/S
HR_dump_@PID.log" -jar "/opt/HP/BSW/BOE4/sap_bobj/enterprise_xi40/java/lib/SIA.jar" -boot "/opt/HP/BSW/BOE4/sap_bobj/enterprise_xi40/linux_x64/_boe_SHR_bootstr
ap" -port "6410" -pidFile "/opt/HP/BSW/BOE4/sap_bobj/serverpids/SHR.pid" -loggingPath "/opt/HP/BSW/BOE4/sap_bobj/logging/" -traceinipath "/opt/HP/BSW/BOE4/sap
_bobj/enterprise_xi40/conf/BO_trace.ini" -name "SHR" -dbinfo "/opt/HP/BSW/BOE4/sap_bobj/enterprise_xi40/linux_x64/_boe_SHR_dbinfo" -piddir "/opt/HP/BSW/BOE4/sap
_bobj/serverpids/" -noauditor

SHRM2_LAUNCH="/opt/HP/BSW/BOE4/sap_bobj/enterprise_xi40/generic/bobjrestart.sh" -protect "/opt/HP/BSW/BOE4/sap_bobj/enterprise_xi40/generic/java launch.sh" "--db
obj.product.languages.dir=/opt/HP/BSW/BOE4/sap_bobj/enterprise_xi40/Languages/" -bjava.net.preferIPv4Stack=false -bjava.awt.headless=true -bcom.sap.vm.tag=SHRM
2 "-Xmx64m" "-Xmx256m" "-XX:+ExitVMOnOutOfMemoryError" "-XX:+HeapDumpOnOutOfMemoryError" "-XX:+PrintGCDateStamps" "-XX:+PrintGCOptions" "-XX:LogGCMaxFileCount=
3" "-XX:LogGCMaxFileSize=5m" "-XX:HeapDumpPath=/opt/HP/BSW/BOE4/sap_bobj/logging/" "-XtraceFiles:/opt/HP/BSW/BOE4/sap_bobj/logging/SHRM2_jvm_@PID.log" "-XX:GCH
istoryFileName=/opt/HP/BSW/BOE4/sap_bobj/logging/SHRM2_gc.prfl" "-Xloggc:/opt/HP/BSW/BOE4/sap_bobj/logging/SHRM2_gc.log" "-XX:ErrorFiles=/opt/HP/BSW/BOE4/sap_bobj
/logging/SHRM2_dump_@PID.log" -jar "/opt/HP/BSW/BOE4/sap_bobj/enterprise_xi40/java/lib/SIA.jar" -boot "/opt/HP/BSW/BOE4/sap_bobj/enterprise_xi40/linux_x64/_boe
_SHRM2_bootstrap" -port "6410" -pidFile "/opt/HP/BSW/BOE4/sap_bobj/serverpids/SHRM2.pid" -loggingPath "/opt/HP/BSW/BOE4/sap_bobj/logging/" -traceinipath "/opt/
HP/BSW/BOE4/sap_bobj/enterprise_xi40/conf/BO_trace.ini" -name "SHRM2" -dbinfo "/opt/HP/BSW/BOE4/sap_bobj/enterprise_xi40/linux_x64/_boe_SHRM2_dbinfo" -piddir
"/opt/HP/BSW/BOE4/sap_bobj/serverpids/" -noauditor

```

以下のマークされた行を削除

33. 次の画像に示すように、SHRLAUNCHセクションを削除した後のファイルを保存します。

```

#!/bin/sh
BOBJDIR="/opt/HP/BSM/BOE4/sap_bobj/"
BOBJINSTALLLOCAL="user"
BOBJLANG="en"
BOBJLICENSEKEY="D000U-1WJVE3M-710XUC4-Gb20WC-7D"
BOBJSERVNAME="shrbodadmin"
BOBJVERSION="XI 4.0"
CLUSTER_NAME_SERVERS=""
CLUSTERPORTNAME="6400"
CMSCLUSTER="no"
CMSNAME_SERVERS="IWFWM02570"
CMSPORTNAME="6400"
COLLECTORPORT="8080"
DATABASEURL="dba"
DBTYPE_ALERT="sqlanywhere"
DBTYPE="sqlanywhere"
DEFAULT_NAME_SERVERS="no"
INSTALL_DIR="/opt/HP/BSM/BOE4/sap_bobj/"
LOCAL_NAME_SERVERS="IWFWM02570"
NAME_SERVERS="IWFWM02570"
PIDDIR="/opt/HP/BSM/BOE4//sap_bobj/serverpids/"
PRODUCTID_NAME="BusinessObjects"
PRODUCTID_VERSION="14.0"
REDIRECTPORT="8448"
REGFILE="/opt/HP/BSM/BOE4//sap_bobj/data/.bobj"
REINIT="yes"
SERVICE_NAME_ALERT="BI4_Audit"
SERVICE_NAME="BI4_CMS"
SERVICEPORT="no"
SHUTDOWNPORT="8005"
SIA_CMS_NAME="SHR"
SIAPORTNAME="6410"
SIPMDataVal="undefined"
SHRM2_LAUNCH="/opt/HP/BSM/BOE4/sap_bobj/enterprise_xi40/generic/bobjrestart.sh" -protect "/opt/HP/BSM/BOE4/sap_bobj/enterprise_xi40/generic/javaLaunch.sh" "-bbobj.product.languages_dir=/opt/HP/BSM/BOE4/sap_bobj/enterprise_xi40/Languages/" -djava.net.preferIPv4Stack=false -djava.awt.headless=true -boom.sap.vm.tag=SHRM2 "-Xmx64m" "-Xmx256m" "-XX:+ExitVMOnOutOfMemoryError" "-XX:+HeapDumpOnOutOfMemoryError" "-XX:+PrintGCDateStamps" "-XX:+PrintGCDetails" "-XX:LogGCMaxFileCount=3" "-XX:LogGCMaxFileSize=5m" "-XX:HeapDumpPath=/opt/HP/BSM/BOE4/sap_bobj/logging/" "-XtraceFile=/opt/HP/BSM/BOE4/sap_bobj/logging/SHRM2_jvm_SPID.log" "-XX:GCHIStoryFileName=/opt/HP/BSM/BOE4/sap_bobj/logging/SHRM2_gc.prf" "-Xloggc:/opt/HP/BSM/BOE4/sap_bobj/logging/SHRM2_gc.log" "-XX:ErrorFile=/opt/HP/BSM/BOE4/sap_bobj/logging/SHRM2_dump_SPID.log" -jar "/opt/HP/BSM/BOE4/sap_bobj/enterprise_xi40/java/lib/SIA.jar" -boot "/opt/HP/BSM/BOE4/sap_bobj/enterprise_xi40/linux_x64/_boe_SHRM2.bootstrp" -port "6410" -pidFile "/opt/HP/BSM/BOE4/sap_bobj/serverpids/SHRM2.pid" -loggingPath "/opt/HP/BSM/BOE4/sap_bobj/logging/" -traceInPath "/opt/HP/BSM/BOE4/sap_bobj/enterprise_xi40/conf/BO_trace.ini" -name "SHRM2" -dbinfo "/opt/HP/BSM/BOE4/sap_bobj/enterprise_xi40/linux_x64/_boe_SHRM2.dbinfo" -piddir "/opt/HP/BSM/BOE4/sap_bobj/serverpids/" -noauditor

```

34. 次のコマンドを実行して、すべてのServer Intelligence Agentサーバーを開始します。

```
/opt/HP/BSM/BOE4/sap_bobj/startservers
```

35. 次のコマンドを実行します。

- /etc/init.d/ SAPBOBJEnterpriseXI40 stop
- /etc/init.d/ SAPBOBJEnterpriseXI40 start

管理データベーステーブルの場合

管理データベーステーブルを復元するには、次の手順を実行します。

- 次のコマンドを実行して、PgAdminIIIを起動します。
 - cd \$PMDB_HOME/./Postgres/bin
 - ./psql -U pmdb_admin -d dwabc -p 21425
- インストール後の設定時に設定したものと同一パスワードを指定して、データベースに接続します。
- sqlクエリアナライザーを起動します。
- データベーステーブルを復元するには、次のクエリを実行します。

```
Delete From aggregate_control
```

```
COPY aggregate_control from '<バックアップパス>/backup_AGGREGATE_CONTROL.dat';
```

ここで<バックアップパス>は、管理データベースのバックアップファイルを置いたディレクトリです。

Vertica データベースのバックアップと復元

OBRは、IT環境のパフォーマンスデータの保存、処理、および管理にHP Verticaデータベースを使用します。他のHPE OBRデータベースファイルとともに、Verticaデータベースのバックアップも定期的に行う必要があります。

注: Verticaデータベースのバックアップを正常に復元したら、Verticaデータベースを起動します。

Verticaデータベースのバックアップと復元の詳細については、[HP Vertica Analytics Platform Version 7.1.xのドキュメント](#)を参照してください。

第 V 部 Appendix

このセクションでは、仮想化メトリックを収集するのに使用されるSiteScopeモニターのリストと、Xcelsiusアプリケーションのインストールに関する情報を提供します。

付録 AHPE OBRのSiteScopeモニター

次の表に、仮想化メトリックを収集するのに使用されるモニターを一覧表示します。

モニター名	カウンタ	測定名
VMwareパフォーマンス	ホストシステム\状態	hardware.memorySize
VMwareパフォーマンス	ホストシステム\状態	summary.hardware.numCpuCores
VMwareパフォーマンス	ホストシステム\状態	summary.hardware.cpuMhz
VMwareパフォーマンス	ホストシステム\状態	summary.hardware.numNics
VMwareパフォーマンス	ホストシステム\リアルタイム\sys	uptime.latest[]
VMwareパフォーマンス	ホストシステム\リアルタイム\mem	usage.average[]
VMwareパフォーマンス	ホストシステム\リアルタイム\mem	consumed average[]
VMwareパフォーマンス	ホストシステム\リアルタイム\cpu	usage.average[]
VMwareパフォーマンス	ホストシステム\リアルタイム\cpu	ready.summation[]
VMwareパフォーマンス	ホストシステム\リアルタイム\disk	usage.average[]
VMwareパフォーマンス	ホストシステム\リアルタイム\disk	read.average[]
VMwareパフォーマンス	ホストシステム\リアルタイム\disk	write.average[]
VMwareパフォーマンス	ホストシステム\リアルタイム	received.average[]

モニター名	カウンタ	測定名
ス	ムnet	
VMwareパフォーマンス	ホストシステムリアルタイムnet	transmitted.average[]
VMwareパフォーマンス	ホストシステムリアルタイムnet	packetsRx.summation[]
VMwareパフォーマンス	ホストシステムリアルタイムnet	packetsTx.summation[]
VMwareパフォーマンス	ホストシステムリアルタイムnet	usage.average[]
VMwareパフォーマンス	ホストシステムリアルタイムmem	usage.average
VMwareパフォーマンス	ホストシステムリアルタイムmem	consumed.average
VMwareパフォーマンス	仮想マシン状態	config.hardware.memoryMB
VMwareパフォーマンス	仮想マシン状態	config.cpuAllocation.shares.shares
VMwareパフォーマンス	仮想マシン状態	config.hardware.numcpu
VMwareパフォーマンス	仮想マシン状態	config.memoryAllocation.reservation
VMwareパフォーマンス	仮想マシン状態	config.memoryAllocation.limit
VMwareパフォーマンス	仮想マシン状態	config.cpuAllocation.reservation
VMwareパフォーマンス	仮想マシン状態	config.cpuAllocation.limit
VMwareパフォーマンス	仮想マシンmem	active.average[]
VMwareパフォーマンス	仮想マシンリアルタイム	uptime.latest[]

モニター名	カウンタ	測定名
ス	\sys	
VMwareパフォーマンス	仮想マシンリアルタイム \mem	usage.average[]
VMwareパフォーマンス	仮想マシンリアルタイム \mem	consumed.average[]
VMwareパフォーマンス	仮想マシンリアルタイム \mem	active.average[]
VMwareパフォーマンス	仮想マシンリアルタイム \mem	overhead.average[]
VMwareパフォーマンス	仮想マシンリアルタイム \mem	swopin.average[]
VMwareパフォーマンス	仮想マシンリアルタイム \mem	swapout.average[]
VMwareパフォーマンス	仮想マシンリアルタイム \mem	vmmemctltarget.average[]
VMwareパフォーマンス	仮想マシンリアルタイム \mem	usage.average[]
VMwareパフォーマンス	仮想マシンリアルタイム \mem	ready.summation[]
VMwareパフォーマンス	仮想マシンリアルタイム \mem	usagemhz.average[]
VMwareパフォーマンス	仮想マシンリアルタイム \mem	wait.summation[]
VMwareパフォーマンス	仮想マシンリアルタイム \mem	ready.summation[]
VMwareパフォーマンス	仮想マシンリアルタイム \mem	usage.average[]
VMwareパフォーマンス	仮想マシンリアルタイム \mem	read.average[]

モニター名	カウンタ	測定名
VMwareパフォーマンス	仮想マシンリアルタイム \mem	write.average[]
VMwareパフォーマンス	仮想マシンリアルタイム \mem	received.average[]
VMwareパフォーマンス	仮想マシンリアルタイム \mem	transmitted.average[]
VMwareパフォーマンス	仮想マシンリアルタイム \mem	packetsRx.summation[]
VMwareパフォーマンス	仮想マシンリアルタイム \mem	packetsTx.summation[]
VMwareパフォーマンス	仮想マシンリアルタイム \mem	usage.average[]
VMwareパフォーマンス	仮想マシンリアルタイム \cpu	usage.average[]
VMwareパフォーマンス	仮想マシンリアルタイム \cpu	ready.summation[]
VMwareパフォーマンス	仮想マシンリアルタイム \cpu	usagemhz.average[]
VMwareパフォーマンス	仮想マシンリアルタイム \cpu	wait.summation[]
VMwareパフォーマンス	仮想マシンリアルタイム \cpu	ready.summation[]
VMwareパフォーマンス	仮想マシンリアルタイム \net	received.average[]
VMwareパフォーマンス	仮想マシンリアルタイム \net	transmitted.average[]
VMwareパフォーマンス	仮想マシンリアルタイム \net	packetsRx.summation[]
VMwareパフォーマンス	仮想マシンリアルタイム \net	packetsTx.summation[]

モニター名	カウンタ	測定名
VMwareパフォーマンス	仮想マシンリアルタイム \net	usage.average[]
VMwareパフォーマンス	仮想マシンリアルタイム \disk	read.average[]
VMwareパフォーマンス	仮想マシンリアルタイム \disk	write.average[]
VMwareパフォーマンス	仮想マシンリアルタイム \disk	usage.average[]

次の表に、システム管理メトリックの収集に使用されるモニターを一覧表示します。

モニター	オブジェクト	カウンタ	システムタイプ
Microsoft Windowsリソース	メモリ	%コミット済みバイト数 (使用中)	Windows
Microsoft Windowsリソース	メモリ	ページ出力/秒	Windows
Microsoft Windowsリソース	システム	プロセッサキュー長	Windows
Microsoft Windowsリソース	システム	システム稼働時間	Windows
Microsoft Windowsリソース	物理ディスク	合計\ディスクバイト/秒	Windows
Microsoft Windowsリソース	物理ディスク	ディスク読み取りバイト 数/秒	Windows
Microsoft Windowsリソース	物理ディスク	ディスク書き込みバイト 数/秒	Windows
Microsoft Windowsリソース	物理ディスク	ディスクバイト数/秒	Windows
Microsoft Windowsリソース	ネットワークインターフェイス	%受信パケット数/秒	Windows
Microsoft Windowsリソース	ネットワークインターフェイス	%受信バイト数/秒	Windows

モニター	オブジェクト	カウンタ	システムタイプ
Microsoft Windowsリソース	ネットワークインターフェイス	%送信バイト数/秒	Windows
Microsoft Windowsリソース	ネットワークインターフェイス	%パケット数/秒	Windows
Microsoft Windowsリソース	ネットワークインターフェイス	%送信パケット数/秒	Windows
Microsoft Windowsリソース	ネットワークインターフェイス	合計バイト/秒	Windows
Unixリソース	キュー長	キュー長 \runq-sz	Unix/Solaris
Unixリソース	キュー統計	キュー統計 \runq-sz	HP-UX/AIX
Unixリソース	稼働時間	稼働時間 \稼働時間	Unix /Linux、HP-UX/AIX
Unixリソース	File System	%\容量	Unix/Solaris
Unixリソース	File System	%\kbytes	Unix/Solaris
Unixリソース	File System	avail	Solaris
Unixリソース	File System	used	Solaris
Unixリソース	File System	%\使用\%	RHEL
Unixリソース	File System	%\使用済み	RHEL
Unixリソース	File System	%\容量	HP-UX
Unixリソース	File System	%\%使用済み	HP-UX、AIX
Unixリソース	File System	%\1024-ブロック	AIX
Unixリソース	File System	%\空き	
Unixリソース	File System	1K-ブロック	RHEL
Unixリソース	File System	使用可能	RHEL
Unixリソース	ネットワークインターフェイス	%packets	RHEL

モニター	オブジェクト	カウンタ	システムタイプ
Unixリソース	ネットワークインターフェイス	%受信バイト数	RHEL
Unixリソース	ネットワークインターフェイス	%送信バイト数	RHEL
Unixリソース	ネットワークインターフェイス	%ipackets	Solaris
Unixリソース	ネットワークインターフェイス	%opackets	Solaris
Unixリソース	ネットワークインターフェイス	%rbytes	Solaris
Unixリソース	ネットワークインターフェイス	%obytes	Solaris
Unixリソース	ネットワーク統計	%lpkts	HP-UX
Unixリソース	ネットワーク統計	%Opkts	HP-UX
動的ディスク容量	ディスク/ファイルシステム	%/空きMB **	Unix/Windows
動的ディスク容量	ディスク/ファイルシステム	%/合計MB **	Unix/Windows
動的ディスク容量	ディスク/ファイルシステム	%/全パーセント **	Unix/Windows
CPU	N/A	使用率	Unix/Windows
CPU	N/A	cpuの使用率%	Unix/Windows
メモリ	N/A	使用パーセント	Unix/Windows
メモリ	N/A	使用仮想メモリ%	Unix/Windows
メモリ	N/A	使用物理メモリ% *	Unix/Windows

モニター	オブジェクト	カウンタ	システムタイプ
メモリ	N/A	使用スワップ%	Unix/Windows
メモリ	N/A	空き物理メモリMB *	Unix/Windows
メモリ	N/A	空き仮想メモリMB	Unix/Windows
メモリ	N/A	空きMB	Unix/Windows

* このカウンタは、WindowsノードがWMIメソッドと接続している時にのみ使用可能です。

* このカウンタは、WindowsノードがWMIメソッドと接続している時には使用できません。

付録BSAP BusinessObjects Dashboards 4.1 SP6 (以前のXcelsius) のインストール

SAP BusinessObjects Dashboardsレポートは、SAPを使用して作成される対話型のフラッシュベースのレポートです。HPE OBRのフラッシュベースレポートとしてDashboardsを作成するには、HPE OBRインストールメディアに含まれているSAP BusinessObjects Dashboardsアプリケーションをインストールする必要があります。HPE OBRレポートの表示には、SAP BusinessObjects Dashboardsは必須ではありません。このため、SAP BusinessObjects Dashboardsのインストールは省略可能です。

注: SAP BusinessObjects Dashboards 4.1 SP6は、基盤としてMicrosoft Excelを必要とします。

ハードウェアおよびソフトウェアの要件

BusinessObjects Dashboard 4.1 Service Pack 6のハードウェアおよびソフトウェアの要件リストについては、[SAP](#)のドキュメントを参照してください。

SAP BusinessObjects Dashboards 4.1 SP6のインストール(省略可能)

SAP BusinessObjects Dashboards 4.1 SP6をインストールするためのsetupファイルは、HPE OBRインストールメディアに含まれています。

setup実行ファイルを入手するには、次の手順を実行します。

1. HPE OBRインストールメディアで、\packagesフォルダーを参照します。
2. BusinessObjects_Dashboards.ZIPファイルを選択し、任意の場所にコピーし、ファイルを抽出します。
3. 抽出したフォルダーから、\DATA_UNITS\Xcelsiusフォルダーを参照し、setup実行ファイル(setup.exe)を実行します。

インストールの詳細については、[SAP](#)から入手できる『Dashboards and Presentation Design Installation Guide』を参照してください。

付録C:ETLのリスト

このセクションでは、コンテンツパックのETLのリストを示します。レポートを生成するには、少なくとも1つのドメインコンテンツパック、ETLコンテンツパック、レポートコンテンツパックを選択する必要があります。依存型のドメインコンテンツパックは自動的に選択されるため、データソースに基づくETLを選択するだけで済みます。

インストールおよびアンインストールの操作中、タイマーサービスは自動的に停止し、操作完了後に起動します。

インストールおよびアンインストールプロセスの実行中、デプロイメントマネージャではそのプロセスを中断することができません。[デプロイメントマネージャ] ページでその他の操作を実行するには、現在のプロセスが完了するまで待機する必要があります。

次のテーブルに、各コンテンツパックのETLのリストを示します。

コンテンツパック名	ETL	備考
Cross-Domain Operations Events	CrossOprEvent_ETL_OMi	トポロジソースがOMi 10の場合は、CrossOprEvent_ETL_OMi10コンポーネントを選択してください。 CrossOprEvent_ETL_OMiとCrossOprEvent_ETL_OMi10は、相互に排他的なコンテンツパックコンポーネントです。いずれか1つのみを選択するようにしてください。 CrossOprEvent_ETL_OMi_ExtendedとCrossOprEvent_ETL_OMi10_Extendedは、相互に排他的なコンテンツパックコンポーネントです。いずれか1つのみを選択するようにしてください。
	CrossOprEvent_ETL_OMi10	
	CrossOprEvent_Domain_Reports	
	CrossOprEvent_ETL_OMi10_Extended	
	CrossOprEvent_ETL_OMi_Extended	
	CrossOprEvent_Domain_Reports_Extended	
		注: イベントの詳細属性を含むカスタムのレポートを生成するには、Extended ETLを選択してください。
		注: Cross-Domain Operations EventsコンテンツパックはHealth and Key Performance Indicatorsコンテン

コンテンツパック名	ETL	備考
		ツパックに依存するため、Health and Key Performance Indicators ETLから1つを明示的に選択する必要があります。
Health and Key Performance Indicators	HIKPI_ETL_ServiceHealth	トポロジソースがOMi 10の場合は、HIKPI_ETL_ServiceHealth_OMi10コンポーネントを選択してください。 HIKPI_ETL_ServiceHealthとHIKPI_ETL_ServiceHealth_OMi10は、相互に排他的なコンテンツパックコンポーネントです。いずれか1つのみを選択するようにしてください。
	HIKPI_ETL_ServiceHealth_OMi10	
	HIKPI_Domain	
	HIKPI_Reports_ServiceHealth	
HPSA	HPSA_ETL	
	HPSA_Domain	
IBM WebSphere Application Server	IBMWebSphere_ETL_WebSphereSPI	IBM WebSphere SPI ETLをすでにインストールしていて、OMからOMi10へ移行する場合、または最新のOMi Management Pack for WebSphereにアップグレードする場合は、IBM WebSphere SPI ETLをアンインストールして、最新のIBM WebSphere MP ETLをデプロイしてください。
	IBMWebSphere_Domain	
	IBMWebSphere_Reports	
	IBMWebSphere_ETL_WebSphereMP	
Microsoft Active Directory	MicrosoftActiveDirectory_ETL_ADSPi	
	MicrosoftActiveDirectory_Reports	
	MicrosoftActiveDirectory_Domain	
Microsoft Exchange Server	MicrosoftExchange_ETL_ExchangeSPI2007	MicrosoftExchange_ETL_ExchangeSPI2007は、Exchange Server 2007用のHP Operations SPIからデータを収集します。
	MicrosoftExchange_ETL_	

コンテンツパック名	ETL	備考
	ExchangeSPI2010	<p>MicrosoftExchange_ETL_ExchangeSPI2010は、Exchange Server 2010用のHP Operations SPIおよびOMi管理パックからデータを収集します。</p> <p>MicrosoftExchange_ETL_ExchangeSPI2013は、Exchange Server 2013用のHP Operations SPIおよびOMi管理パックからデータを収集します。</p>
	MicrosoftExchange_ETL_ExchangeSPI2013	
	MicrosoftExchange_Domain	
	MicrosoftExchange_Reports	
Microsoft SQL Server	MicrosoftSQLServer_ETL_DBSPI	
	MicrosoftSQLServer_Domain	
	MicrosoftSQLServer_Reports	
Network Performance	NetworkPerf_ETL_PerfiSPI_NonRTSM	<p>NetworkPerf_ETL_PerfiSPI_NonRTSMとNetworkPerf_ETL_PerfiSPI_RTSMは、相互に排他的なコンテンツパックコンポーネントです。いずれか1つのみを選択するようにしてください。</p> <p>注: NNMiトポロジがBSM/OMi RTSMに統合されている場合は、NetworkPerf_ETL_PerfiSPI_RTSMコンテンツパックコンポーネントを選択してください。それ以外の場合は、NetworkPerf_ETL_PerfiSPI_NonRTSMコンテンツパックコンポーネントを選択してください。</p> <p>注: Network Performanceコンテンツパックは、Type2ノードグループ、すなわちルーターとスイッチからのみデータを収集します。</p>
	NetworkPerf_ETL_PerfiSPI_RTSM	
	NetworkPerf_Domain	
	NetworkPerf_Reports	

コンテンツパック名	ETL	備考
Network Component_Health	ComponentHealth_Reports	
	Core_ComponentHealth	
Network Interface_Health	InterfaceHealth_Reports	
	Core_InterfaceHealth	
Operations Events	OprEvent_ETL_HPOM	
	OprEvent_Domain_Reports	
Oracle	Oracle_ETL_DBSPI	
	Oracle_Domain	
	Oracle_Reports	
Oracle WebLogic Server	OracleWebLogic_ETL_WebLogicSPI	WebLogic SPI ETLをすでにインストールして、OMからOMi10へ移行する場合、または最新のOMi Management Pack for WebLogicにアップグレードする場合は、Oracle WebLogic SPI ETLをアンインストールして、最新のOracle WebLogic MP ETLをデプロイしてください。
	OracleWebLogic_Domain	
	OracleWebLogic_Reports	
	OracleWebLogic_ETL_WebLogicMP	
Real User Transaction Monitoring	RealUsrTrans_ETL_RUM	トポロジソースがOMi 10の場合は、RealUsrTrans_ETL_RUM_OMiコンポーネントを選択してください。 RealUsrTrans_ETL_RUMとRealUsrTrans_ETL_RUM_OMiは、相互に排他的なコンテンツパックコンポーネントです。いずれか1つのみを選択するようにしてください。
	RealUsrTrans_ETL_RUM_OMi	
	RealUsrTrans_Domain_Reports	
Synthetic Transaction Monitoring	SynTrans_Domain_Reports	トポロジソースがOMi 10の場合は、SynTrans_ETL_BPM_OMiコンポーネントを選択してください。

コンテンツパック名	ETL	備考
	SynTrans_ETL_BPM	SynTrans_ETL_BPMとSynTrans_ETL_BPM_OMiは、相互に排他的なコンテンツパックコンポーネントです。いずれか1つのみを選択するようにしてください。
	SynTrans_ETL_BPM_OMi	
System Performance	SysPerf_ETL_PerformanceAgent	データソースがHP Operations Agentの場合は、SysPerf_ETL_PerformanceAgentコンテンツパックコンポーネントを選択してください。
	SysPerf_ETL_SiS	
	SysPerf_ETL_SiS_API	SysPerf_ETL_SiS、SysPerf_ETL_SiS_DB、SysPerf_ETL_SiS_APIの3つのコンテンツパックコンポーネントのうち、1つのみを選択してください。
	SysPerf_ETL_SiS_DB	
	SysPerf_Domain	
	SysPerf_Reports	SysPerf_ETL_SiSは廃止されています。SysPerf_ETL_SiS_DBは、プロファイルデータベース統合用です。トポロジソースがBSM 9.xで、SysPerf_ETL_SiS_DBをすでにインストールしている場合は、同じものを引き続き使用できます。SysPerf_ETL_SiS_APIは、OMi 10.0統合用です。このコンテンツパックコンポーネントは、プロファイルデータベースがない場合にも使用できます。SysPerf_ETL_SiS_DBおよびSysPerf_ETL_SiS_APIのどちらを使用しても、収集されるメトリックのリストは同じです。
Virtual Environment Performance	VirtualEnvPerf_ETL_HyperV_PerformanceAgent	データソースがHP Operations AgentまたはPerformance Agentの場合は、Performance Agentベースのコンテンツパックコンポーネントを選択してください。
	VirtualEnvPerf_ETL_IBMLPAR_PerformanceAgent	データソースがVMware vCenterの場合は、VMWare_vCenterベースのコンテンツパックコンポーネントを選択してください。
	VirtualEnvPerf_ETL_SolarisZones_PerformanceAgent	VirtualEnvPerf_ETL_VMware_SiteScopeまたはVirtualEnvPerf_ETL_VMware_SiS_APIのいずれかのコンテンツパックコンポーネントを選択してください。
	VirtualEnvPerf_ETL_	

コンテンツパック名	ETL	備考
	VMWare_PerformanceAgent VirtualEnvPerf_ETL_VMware_SiS_API VirtualEnvPerf_ETL_VMware_SiteScope VirtualEnvPerf_Domain VirtualEnvPerf_Domain_VMWare VirtualEnvPerf_Reports VirtualEnvPerf_Reports_VMWare VirtualEnvPerf_ETL_VMWare_vCenter	<p>VirtualEnvPerf_ETL_VMware_SiteScopeは、プロファイルデータベース統合用です。トポロジソースがBSM 9.xで、VirtualEnvPerf_ETL_VMware_SiteScopeをすでにインストールしている場合は、同じものを引き続き使用できます。VirtualEnvPerf_ETL_VMware_SiS_APIは、OMi 10.0統合用です。このコンテンツパックコンポーネントは、プロファイルデータベースがない場合にも使用できます。VirtualEnvPerf_ETL_VMware_SiteScopeおよびVirtualEnvPerf_ETL_VMware_SiS_APIのどちらを使用しても、収集されるメトリックのリストは同じです。</p> <p>VirtualEnvPerf_ETL_VMWare_vCenterとVirtualEnvPerf_ETL_VMWare_PerformanceAgentは、相互に排他的なコンテンツパックコンポーネントです。いずれか1つのみを選択するようにしてください。</p> <p>注: HP Operations Agentのバージョンが11.x以前の場合は、VirtualEnvPerf_ETL_VMWare_PerformanceAgentおよびVirtualEnvPerf_ETL_HyperV_PerformanceAgent ETLを使用してください。HP Operations Agentのバージョンが12の場合は、HP Virtualization Performance Viewer (vPV) コンテンツを使用してください。</p> <p>注: HPE Operations Bridge ReporterではHP Virtualization Performance Viewer (vPV) がサポートされます。HPE OBRはHP vPVを使用して、仮想環境のパフォーマンス、設定、容量の問題に</p>

コンテンツパック名	ETL	備考
		<p>ついてレポートするためのデータを収集します。HPE OBRのvPV統合の詳細については、次のURLに用意されているユーザーガイドを参照してください。</p> <p>https://hpln.hp.com/contentoffering/hp-shr-vpv-integration-content</p>

ドキュメントに関するフィードバックの送信

このドキュメントに関するご意見は、電子メールでドキュメントチームまでお寄せください。このシステムで電子メールクライアントが設定されている場合は、上にあるリンクをクリックすると、表題の行に以下の情報が付いた状態で電子メールウィンドウが開きます。

設定ガイド (Operations Bridge Reporter 10.00) に関するフィードバック

電子メールにフィードバックを記入して、送信ボタンをクリックしてください。

使用できる電子メールクライアントがない場合は、上記の情報をWebメールクライアントの新しいメッセージにコピーして、フィードバックをdocfeedback@hpe.com に送信してください。

お客様からのご意見をお待ちしております。